

福岡市

多々良込田遺跡Ⅲ

福岡市東区多の津所在遺跡群の調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書第121集

1985

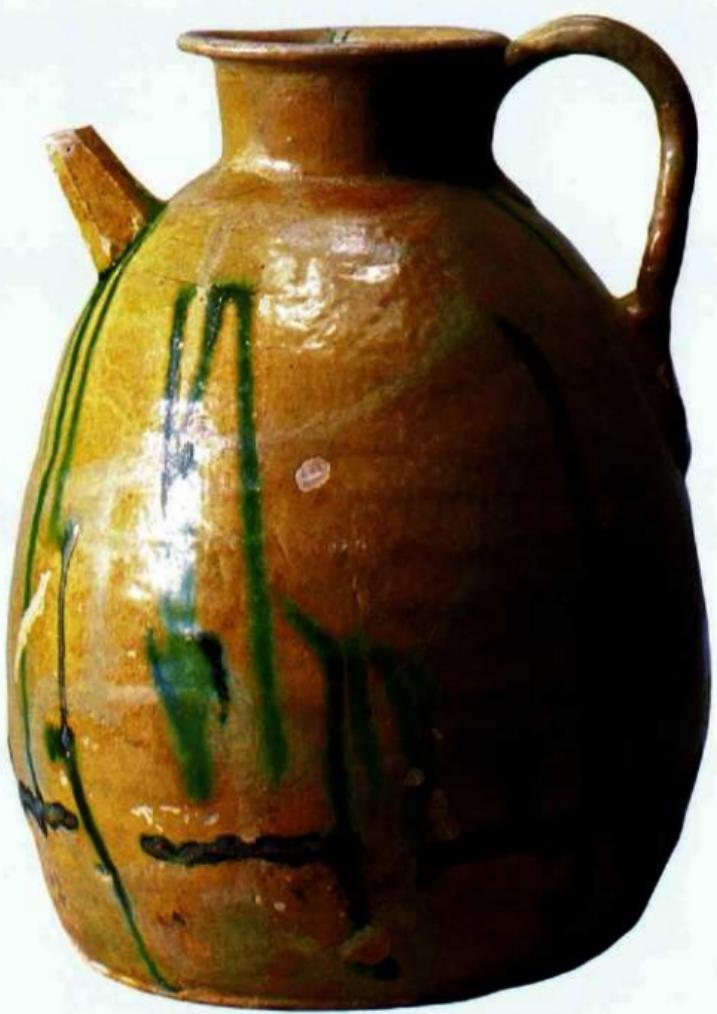
福岡市教育委員会

福岡市
多々良込田遺跡Ⅲ

福岡市東区多の津所在遺跡群の調査
福岡市埋蔵文化財調査報告書第121集

1985

福岡市教育委員会



三彩水注





3-1



3-2

3-3

1. 長沙窯黃褐褐綠彩盤 2.3. 長沙窯碗



4-1

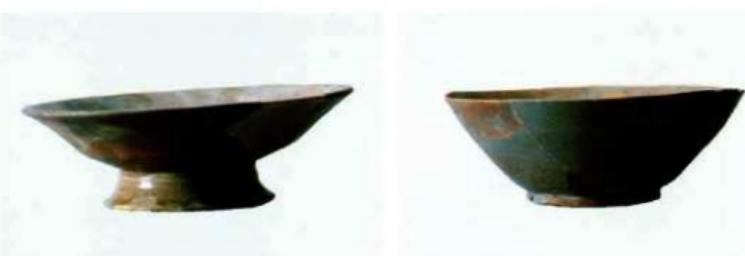
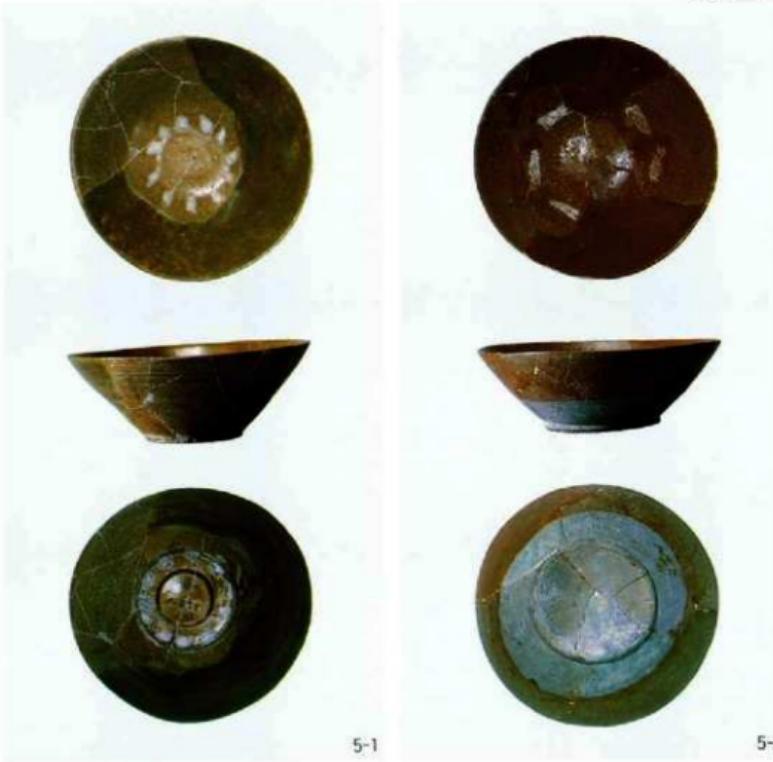


4-2



4-3

1. 灰釉陶器—短頸壺 2. 灰釉陶器—小壺 3. 綠釉陶器耳皿



1~4. 越州窯系青磁器



6-1

6-2



6-3

6-4

1~4. 綠釉陶器

序 文

福岡市は古来より大陸文化の門戸として栄えてきました。そのためもあり、市内には数多くの埋蔵文化財があります。本市では特に文化財の保護につとめております。しかし、開発等に伴い保存が無理な場合は発掘調査を実施し、記録保存につとめております。

本書もそうした遺跡のうちの一つで、福岡市東区多の津に所在する流通施設の拡充に伴い発掘調査を実施した多々良込田遺跡の報告書です。

発掘調査によって、弥生時代から古墳時代にいたる集落および古代の建物群とそれに伴い中国陶磁器、国産陶器などが多く出土し、福岡の歴史を知るには、かかせない貴重な成果を得ることができました。

本書が広く活用されることを願うとともに、発掘調査から資料整理にいたるまで、指導委員の先生方をはじめ多くの関係者からいただいた助言・指導・協力に対して深甚の敬意を表するものであります。

昭和60年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西 津 茂 美

例　　言

1. 本書は福岡市都市開発局都市開発部流通施設事務所が計画した流通センター施設建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会文化部文化課が1983年～1984年に発掘調査を実施した多々良込田遺跡第6次調査の報告書である。
2. 本書の執筆は山崎純男があたり、瓦類について九州歴史資料館大宰府調査事務所の石松好雄、高橋章氏の玉稿をいただいた。
3. 本書に使用した遺構実測は山崎、平川祐介、宮田昌之、角浩行、丸山明宏、福岡大学歴史研究部考古学班があたった。遺物実測は山崎が主にあたり、一部、小畠弘己、今津啓子、平川祐介の助力を得た。
4. 本書使用の図の製図は山崎、平川、今津、角、三山茂があたった。
5. 本書使用の写真は山崎によるものである。
6. 本書に使用した方位はすべて磁北である。
7. 本書の編集は山崎がこれにあたった。
8. なお、時間、予算の関係上、本書に収録できなかつた遺物が多くあるが、おって報告する予定である。

卷頭図版目次

1. 三彩水注	1
2. 長沙窯貼花文水注	2
3-1 長沙窯黄釉褐綠彩盤	3
3-2,3 長沙窯楓	3
4-1 灰釉陶器一頸壺	4
4-2 灰釉陶器一小壺	4
4-3 綠釉陶器一耳皿	4
5. 越州窯系青磁器	5
6. 綠釉陶器	6

本文目次

第1章 序説	1
1. はじめに	1
2. 調査体制	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	3
1. 遺跡の位置と立地	3
2. 周辺の遺跡と歴史的環境	3
第3章 調査の概要	6
第4章 調査の記録—弥生時代の遺構と遺物—	9
1. 遺構	9
2. 遺物	10
第5章 調査の記録—古墳時代の遺構と遺物—	12
1. 第13号住居址 (SC-13)	12
2. 第14号住居址 (SC-14)	13
3. 第15号住居址 (SC-15)	14
4. 第16号住居址 (SC-16)	14
5. 第17号住居址 (SC-17)	14
6. 第18号住居址 (SC-18)	24
7. 第19号住居址 (SC-19)	30
8. 第20号住居址 (SC-20)	35

9. 第21号住居址 (SC-21)	39
10. 第22号住居址 (SC-22)	40
11. 第23号住居址 (SC-23)	43
12. 第24号住居址 (SC-24)	45
13. 第25号住居址 (SC-25)	48
14. 第26号住居址 (SC-26)	48
15. 第27号住居址 (SC-27)	50
16. 第28号住居址 (SC-28)	57
17. 第29号住居址 (SC-29)	58
18. 第30号住居址 (SC-30)	60
19. 第31号住居址 (SC-31)	65
20. 第32号住居址 (SC-32)	65
21. 第33号住居址 (SC-33)	66
22. 第27号掘立柱建物 (SB-27)	68
23. 第28号掘立柱建物 (SB-28)	68
24. 第2号井戸 (SE-02)	69
25. 第28号土塙 (SK-28)	71
26. 第29号土塙 (SK-29)	72
27. 第1号溝 (SD-01)	75
28. 第2号溝 (SD-02)	75
29. その他	81
30. 古墳時代のまとめ	81
第6章 調査の記録—古代の遺構と遺物—	83
1. 遺構	83
(1) 第15号掘立柱建物 (SB-15)	83
(2) 第16号掘立柱建物 (SB-16)	83
(3) 第17号掘立柱建物 (SB-17)	83
(4) 第18号掘立柱建物 (SB-18)	86
(5) 第19号掘立柱建物 (SB-19)	86
(6) 第20号掘立柱建物 (SB-20)	90
(7) 第21号掘立柱建物 (SB-21)	90
(8) 第22号掘立柱建物 (SB-22)	90
(9) 第23号掘立柱建物 (SB-23)	90

(10) 第24号掘立柱建物 (S B-24)	91
(11) 第25号掘立柱建物 (S B-25)	91
(12) 第26号掘立柱建物 (S B-26)	91
(13) 第4号溝 (S D-04)	91
(14) 第24号溝 (S D-24)	91
(15) 第25号溝 (S D-25)	92
(16) 第26号溝 (S D-26)	92
(17) 第26号土塁 (S K-26)	92
(18) 第27号土塁 (S K-27)	92
2. 遺物各説.....	92
(1) 施釉陶器.....	92
① 越州窯系青磁器.....	92
② 長沙窯産磁器.....	97
③ 白磁器.....	98
④ 三彩.....	98
⑤ 緑釉陶器.....	101
⑥ 灰釉陶器.....	102
(2) 須恵器.....	103
(3) 土師器.....	103
(4) 黒色土器.....	103
(5) 瓢.....	103
(6) 墨青土器.....	112
(7) 石帶・裝飾品.....	112
(8) 製塙土器.....	114
(9) 土鍤.....	114
(10) 鉄器.....	115
(11) 滑石製品.....	117
(12) 瓦.....	117
3. 古代のまとめ.....	125
おわりに.....	127

挿 図 目 次

Fig. 1	遺跡の位置と周辺遺跡分布図	4
Fig. 2	調査区と遺跡地形図	7
Fig. 3	第6次調査遺構配置図	8～9
Fig. 4	弥生土器実測図	9
Fig. 5	石器実測図	11
Fig. 6	第13号住居址（SC-13）実測図	12
Fig. 7	第13・15号住居址（SC-13・15）出土遺物実測図	13
Fig. 8	第15号住居址（SC-15）実測図	14
Fig. 9	第17号住居址（SC-17）遺物出土状況	15
Fig. 10	第17号住居址（SC-17）実測図	16
Fig. 11	第17号住居址（SC-17）出土遺物実測図I	18
Fig. 12	第17号住居址（SC-17）出土遺物実測図II	19
Fig. 13	第17号住居址（SC-17）出土遺物実測図III	21
Fig. 14	第17号住居址（SC-17）出土遺物実測図IV	22
Fig. 15	第18号住居址（SC-18）実測図	24
Fig. 16	第18号住居址（SC-18）石錐出土状況実測図	25
Fig. 17	第18号住居址（SC-18）出土遺物実測図I	27
Fig. 18	第18号住居址（SC-18）出土遺物実測図II	28
Fig. 19	第18号住居址（SC-18）出土遺物実測図III	29
Fig. 20	第19号住居址（SC-19）遺物出土状況	31
Fig. 21	第19号住居址（SC-19）実測図	32
Fig. 22	第19号住居址（SC-19）出土遺物実測図	34
Fig. 23	第20号住居址（SC-20）実測図	36
Fig. 24	第20号住居址（SC-20）出土遺物実測図	37
Fig. 25	第21号住居址（SC-21）実測図	38
Fig. 26	第21号住居址（SC-21）出土遺物実測図	39
Fig. 27	第22号住居址（SC-22）実測図	41
Fig. 28	第22・26号住居址（SC-22・26）出土遺物実測図	42
Fig. 29	第23号住居址（SC-23）実測図	44
Fig. 30	第23号住居址（SC-23）出土遺物実測図	44
Fig. 31	第24号住居址（SC-24）実測図	45

Fig. 32	第24号住居址 (SC-24) 出土遺物実測図	46
Fig. 33	第25号住居址 (SC-25) 実測図	47
Fig. 34	第27号住居址 (SC-27) 実測図	49
Fig. 35	第27号住居址 (SC-27) 山土遺物実測図 I	52
Fig. 36	第27号住居址 (SC-27) 出土遺物実測図 II	53
Fig. 37	第27号住居址 (SC-27) 出土遺物実測図 III	54
Fig. 38	第27号住居址 (SC-27) 出土遺物実測図 IV	55
Fig. 39	第28・29号住居址 (SC-28・29) 実測図	56
Fig. 40	第28号住居址 (SC-28) 出土遺物実測図	57
Fig. 41	第30号住居址 (SC-30) 遺物出土状況実測図	58
Fig. 42	第30号住居址 (SC-30) 実測図	59
Fig. 43	第30号住居址 (SC-30) 出土遺物実測図 I	61
Fig. 44	第30号住居址 (SC-30) 出土遺物実測図 II	62
Fig. 45	第30号住居址 (SC-30) 出土遺物実測図 III	63
Fig. 46	第32号住居址 (SC-32) 実測図	64
Fig. 47	第32号住居址 (SC-32) 出土遺物実測図	65
Fig. 48	第33号住居址 (SC-33) 実測図	66
Fig. 49	第33号住居址 (SC-33) 出土遺物実測図	67
Fig. 50	第27号掘立柱建物 (SB-27) (倉庫)	68
Fig. 51	第28号掘立柱建物 (SB-28) (倉庫)	69
Fig. 52	第28号掘立柱建物 (SB-28) 柱穴断面図	70
Fig. 53	第28号土塙 (SK-28) 遺物出土状況実測図	71
Fig. 54	第28号土塙 (SK-28) 出土遺物実測図	72
Fig. 55	第29号土塙 (SK-29) 遺物出土状況、遺物実測図	73
Fig. 56	溝 (SD-01) 出土土器実測図	74
Fig. 57	溝 (SD-02) 出土土器実測図 I	76
Fig. 58	溝 (SD-02) 出土土器実測図 II	77
Fig. 59	玉類実測図	78
Fig. 60	古墳時代の遺構分布図	80
Fig. 61	掘立柱建物 (SB-15・16) 実測図	84
Fig. 62	掘立柱建物 (SB-17・18) 実測図	85
Fig. 63	掘立柱建物 (SB-19) 実測図	86
Fig. 64	掘立柱建物 (SB-20・21) 実測図	87

Fig.65	掘立柱建物（SB-22・23・24）実測図	88
Fig.66	掘立柱建物（SB-25・26）実測図	89
Fig.67	越州窯系青磁器実測図I	90
Fig.68	越州窯系青磁器実測図II	94
Fig.69	越州窯系青磁器実測図III	95
Fig.70	長沙窯青磁器実測図	96
Fig.71	白磁器実測図	97
Fig.72	三彩水注実測図	98
Fig.73	綠釉陶器実測図I	99
Fig.74	綠釉陶器実測図II	100
Fig.75	灰釉陶器実測図	102
Fig.76	須恵器実測図I	104
Fig.77	須恵器実測図II	105
Fig.78	須恵器実測図III	106
Fig.79	須恵器実測図IV	107
Fig.80	須恵器実測図V	109
Fig.81	須恵器実測図VI	110
Fig.82	土師器実測図I	112
Fig.83	土師器実測図II	113
Fig.84	円面碗・風字碗・墨書土器実測図	114
Fig.85	石帶・鈴・袋飾品実測図	115
Fig.86	製塙土器（玄界灘式）実測図	116
Fig.87	土鍤実測図	118
Fig.88	鉄器実測図	119
Fig.89	滑石製品実測図	120
Fig.90	瓦実測図I	121
Fig.91	瓦実測図II	122
Fig.92	古代の遺構分布図	123

図版目次

- PL. 1 ① 第14号住居址 (SC-14)
② 第13号住居址 (SC-13) (北から)
③ 第13号住居址 (SC-13) (南から)
- PL. 2 ① 第17号住居址 (SC-17) 遺物出土状況
② 第17号住居址 (SC-17)
- PL. 3 ① 第18~22、25、26号住居址 (SC-18~22、25、26) と掘立柱建物 (SB-13)
② 第18、19、22、26号住居址 (SC-18、19、22、26)
- PL. 4 ① 第19号住居址 (SC-19) 遺物出土状況
② 第19号住居址 (SC-19)
- PL. 5 ① 第19号住居址 (SC-19) 壁面の状況
② 第19号住居址 (SC-19) 床面の炭化材
- PL. 6 ① 第20号住居址 (SC-20)
② 第22号住居址 (SC-22)
- PL. 7 ① 第18号住居址 (SC-18) 床面の石錘出土状況
② 第22号住居址 (SC-22) 床面の砾石出土状況
- PL. 8 ① 第22号住居址 (SC-22) 遺物出土状況
② 第20号住居址 (SC-20) 遺物出土状況
- PL. 9 ① 第21号住居址 (SC-21)
② 第24号住居址 (SC-24)
- PL. 10 ① 第27、32号住居址 (SC-27、30)
② 第27号住居址 (SC-27) ピット内遺物出土状況
- PL. 11 ① 第28~31号住居址 (SC-28~31) 遺物出土状況
② 第28~31号住居址 (SC-28~31)
- PL. 12 ① 第23号住居址 (SC-23)
② 第33号住居址 (SC-33)
- PL. 13 ① 第28号掘立柱建物 (SB-28)
② 第27号掘立柱建物 (SB-27)
- PL. 14 ① 第28号土塙 (SK-28) 遺物出土状況
② 第28号土塙 (SK-28) 遺物出土状況
- PL. 15 ① 第29号土塙 (SK-29) 遺物出土状況
② 第29号土塙 (SK-29) 遺物出土状況

- PL.16 ① 第2号溝（SD-02）遺物出土状況
② 第2号溝（SD-02）遺物出土状況
- PL.17 ① 第24、26号溝（SD-24、26）（東から）
② 第24、26号溝（SD-24、26）（西から）
- PL.18 ① 掘立柱建物群（遠景）
② 掘立柱建物群（近景）
③ 第22号掘立柱建物（SB-22）
- PL.19 ① 第15、16号掘立柱建物（SB-15、16）
② 第16、17号掘立柱建物（SB-16、17）
③ 第15号掘立柱建物（SB-15）
- PL.20 ① 第26号掘立柱建物（SB-26）
② 第25号掘立柱建物（SB-25）
③ 第21号掘立柱建物（SB-21）
- PL.21 ① 第19号掘立柱建物（SB-19）
② 第24号土坑（SK-24）
③ 第24号溝（SD-24）断面
- PL.22 ① 弥生土器出土状況
② 緑釉陶器出土状況（SD-04内）
③ 土師器耳皿出土状況（SD-04内）
- PL.23 SD-04内 遺物出土状況
① 瓢 ② 檻 ③ 石帯 ④ 馬齒 ⑤ 三彩 ⑥ 鉈

第1章 序 説

1. はじめに

「多々良込田遺跡」は、1970年の山陽新幹線建設ルート内の分布調査によって発見され、1972～73年にかけて福岡市教育委員会文化課が新幹線路線敷内の発掘調査を実施した（第1次調査）。その結果、弥生時代以降平安時代にかけての集落址等を検出し、その成果は『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第32集）として公表されている。その後、周辺の開発が進み、1977年には、第1次調査発掘区東側に隣接する地域7500m²に倉庫建設が行われ、1978年（第2次調査）と1979年（第3次調査）の2次にわたって発掘調査を実施した。その成果は第1次調査結果を踏襲するものであったが、古代の掘立柱建物群は企画性のある配置を示し、官衙的色彩を強く持つことが判明し、出土遺物も一般集落とは異なり越州窯系青磁器、縁釉陶器、石帯等が検出され遺跡の内容をより鮮明に把握できるにいたった。その成果は第3次調査の報告として『多々良込田遺跡II—福岡市東区多の津所在遺跡群の調査一』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第53集）として公表されている。その後も石油スタンド建設や造成工事等によって隣接地が開発され、第4・5次の調査をトレンチ調査によって実施したが、造構等の存在は認められなかった。1983年において、福岡市の流通施設の拡充に伴い新幹線の北側多々良川岸までの広範な地域が造成されることになり、福岡市教育委員会文化課は、造成工事に先行して、試掘調査を実施し、遺跡の広がりを把握した。その結果によって保存を含めて協議を重ねたが、諸事情により調査のやむなきにいたり、本調査（第6次調査）を実施することとした。本調査は1983年9月より実施し、翌年の2月15日に終了した。ただし、本調査に着手した時点では、発掘区を除いて造成は終了しており、本調査の成果からすれば、遺跡の広がりはさらに北側に延びるものと推測されたが、諸般の事情より発掘区の拡大は無理であった。試掘調査、保存問題等、今後の対応についての反省材料も少なくない。

2. 調査体制

調査体制として、以下に示す組織を構成した。相次ぐ緊急調査で充分なる体制を組むことはできなかったが、関係各位のご協力と調査補助員の誠意的な努力によって発掘調査が順調に進行したことを明示しておく。

調査地区 福岡市東区多の津

調査期間 1983年9月26日～1984年2月15日

第1章 序 説

調査委託者 福岡市都市開発局都市開発部流通施設事務所

調査主体 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第1係

教育長 西津茂美、教育次長 草場 隆、文化部長 中田宏、 文化課長 生田
征生、埋蔵文化財第1係長 柳田純孝

調査指導、協力

森貞次郎（九州産業大学教授）、岡崎敬、横山浩一（九州大学教授）、西谷正
(九州大学助教授)、石野博信（権原考古学研究所研究部長）

調査担当 山崎純男（文化課埋蔵文化財第1係）

事務担当 古藤国生、松延好文

調査補助員 平川祐介、角浩行、宮田昌之、丸山明宏、高木裕之、仲田善則、島津洋子、小路
水智明、辯田浩治、牧口明、谷口麻里子

福岡大学歴史研究部考古学班

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と立地

博多湾にのぞむ福岡の平野部は、北に向かって突出する幾つかの山塊丘陵によって限られ一定のまとまりある小平野を形成している。東より柏屋、福岡、早良の各平野であり、いずれも、その間に貢流して博多湾にそそぐ河川の沖積平野である。多々良込田遺跡は東北端の柏屋平野の河口つけね近くに位置する。国土地理院発行の5万分の1地形図（福岡）の北より9.4cm、東より7.8cmの一帯が遺跡の位置である。

柏屋平野は東より多々良川、須恵川、宇美川の三河川を主流とし、河口近くにデルタ地帯を形成している。各河川の上流部にはそれぞれ小平野を形成しており、柏屋平野はこれらの総称である。

多々良込田遺跡は、平野の東北端を西流する多々良川の左岸、沖積微高地（段丘？）上に立地し、現在の多々良川水面とは約2mの比高差をもつ。遺跡の現水田面は標高3.6～3.7mで、旧氾濫原との比高は1m前後とみられる。本遺跡から海岸線までは約4km、三河川の合流点からは2kmほど上流の地点にあたるが、遺跡の形成された当時においては、海が深く湾入し、少なくとも本遺跡付近まで開けていた可能性は強く、このことは総括でも述べるが、本遺跡の性格を知る上でも重要な点である。

2. 周辺の遺跡と歴史的環境

本遺跡は以下の章でのべることく弥生時代～古墳時代前期の集落址ならびに古代（奈良・平安時代）の掘立柱建物群からなる。以下、本遺跡の性格を知る上でも、周辺の遺跡、歴史的環境はとらえておく必要がある。しかし、本遺跡周辺を含めて柏屋平野の遺跡分布は不明な部分が多く、残された問題は多い。以下、簡単ではあるが、本遺跡周辺の遺跡を概観しておきたい。

古墳時代前期の遺跡としては多々良込田遺跡と対比できる集落址の存在は明らかでない。古墳としては注目すべき数基の古墳が存在する。本遺跡より西方2kmの多々良川河口の右岸丘陵上に位置する名島古墳は全長推定50～60mの前方後円墳である。墳丘の大部分を失っているが、内部主体は粘土構造と考えられ、三角縁神獣鏡1面が出土している。また、東北方向約2km、多々良川の支流猪野川左岸の舌状丘陵上に天神森古墳が位置する。全長50～60mの前方後円墳で、後円部中央部が道路によって切断され、道路建設時に三角縁神獣鏡1面、盤龍鏡1面が出土している。また、天神森古墳の南、久原川を挟んだ対岸の蒲田の台地上には部木古墳群が



1:25,000 福岡

500m 1km 2km

Fig. 1 遺跡の位置と周辺遺跡分布図

1. 多々良込田遺跡 2. 名島古墳 3. 名子道遺跡 4. 戸原麥尾遺跡
5. 内橋庵寺 6. 夷守駄推定地 7. 多々良道跡

2. 周辺の遺跡と歴史的環境

ある。部木古墳群は1号墳が全長30mの前方後方墳で、他は低平な墳丘をもつ小円墳である。内部主体、副葬品は明らかではない。また、多々良川左岸の段丘上、多々良込田遺跡の東南1.5kmのところにも全長40m前後の前方後円墳がある。これら前方後円墳、前方後方墳に先行する墳墓としては大神森古墳の西側、猪野川を挟んだ対岸丘陵上に名子道遺跡が存在する。また、部木古墳群の東方約0.7kmには平塚古墳が存在する。共に内部主体は巨大な箱式石棺であり、その出土遺物から前方後円墳形成以前の墳墓であり各小平野をまとめた首長墓と推定され、在地墳墓から前方後円墳形成にいたる過程を解明するには絶好の地域である。

こうした状況の中にあって多々良込田遺跡の古墳時代前期の集落は、その出土土器に後述するごとく他地域あるいは朝鮮半島の舶載土器がみられることは注目され、今後の集落遺跡の調査が進めばその内容はより明らかになり、古墳との関連が把握されよう。

古代の柏原郡は和名抄によれば香椎、志河、厨戸、大村、池田、阿曇、柞原、勢門、敷梨の九郷を管する中郡である。各郷は現存する遺称地名との対比によって、香椎郷は福岡市香椎、志河郷は同志賀島、阿曇郷は同和白、柏原郡新宮、柞原郷は久山町、勢門郷は篠栗町、池田郷は柏原郡古賀町に比定され、この六郷についてはほぼ異論なく定まっている。残る敷梨、大村、厨戸の三郷については直接の手がかりが多く異論が多い。最近、板橋和子氏は「敷梨郷について大宰府神社関係文書」の中に「糟屋郡敷梨郷極楽寺」という記載を持つ文書があり、ここに見える極楽寺という寺は「大宰管内志」（巻十）糟屋郡極楽寺条所引の「八幡愚童記」によると、同郡宇美村の枝村障子岳という処にありと記されている。これによって敷梨郷は、大宰府や筑国国府に最も近い宇美川流域に編戸されていたことが知られているのである。としている。そして大村郷については考古学的調査成果より、多々良川流域にもとめている。厨戸郷は池邊彌氏の「郡郷里駅名索引」によると「厨」字の付く地名は糟屋郡厨戸郷のみであり、大宰府の御厨であったことの特別の命名であろうとし、海産物を主として貢納する厨戸の性格上、志河、阿曇郷と同じく海岸部の海人を中心として編戸されたものと考え、「三代実録」貞觀十一年（869）十二月五日条の「津尉」を大宰府厨戸の厨であろうとし、福岡市海の中道遺跡が大宰府津尉として符合する点が多いことを指摘し、海の中道遺跡を含めた周辺部とする注目する論考を示している。

柏原平野における古代遺跡は、その実態がほとんど知られていないが、調査例としては本遺跡以外に篠栗町和田部木原遺跡、柏原町駕与丁廃寺、福岡市蒲田遺跡C・D地区、蒲田水ヶ元遺跡、多々良遺跡があるが、今後に残された問題が多い。

第3章 調査の概要

1. 発掘区の設定と名称

発掘区は試掘調査によって限定されていたために、その限定された地区全面を対象として行った。グリッドの設定は第2・3次調査のグリッドを継続して使用した。すなわち、遺跡の範囲全体に一辺20mのグリッドを設定している。このグリッドはいわば大区画にあたり、東西の軸をV-Z、A-Hの13区、南北の軸を-1、0~5の7区に区分し、各グリッドの名称はその文わりを読むことにした。たとえば南北がA列、東西が1列の一区画はA-1区と標示される。

さらに大区画のグリッドの内部は、一辺4mで区画した計25個の小グリッドを設けて遺物取上げや現場の遺構観察、実測図作成の単位とした。小グリッドの名称は、大グリッドに従いa~e、1~5の小文字で表現した。しかし、報告書の表現ではかえって煩雑になるので、遺構の位置については、大グリッド奈辺に当るという説明に統一した。従って、第6次調査区の表示はW-1区、W-0区……の地区表示となる。なお遺構の表示は、遺構をS、櫛・堀をA、掘立柱建物をB、竪穴住居址をC、溝をD、井戸をE、土塹をK、その他をXとし、番号は第1次調査からの通算で示し、SD-03等のごとく表示するが、標題は各遺構の名称と表示記号を併記している。

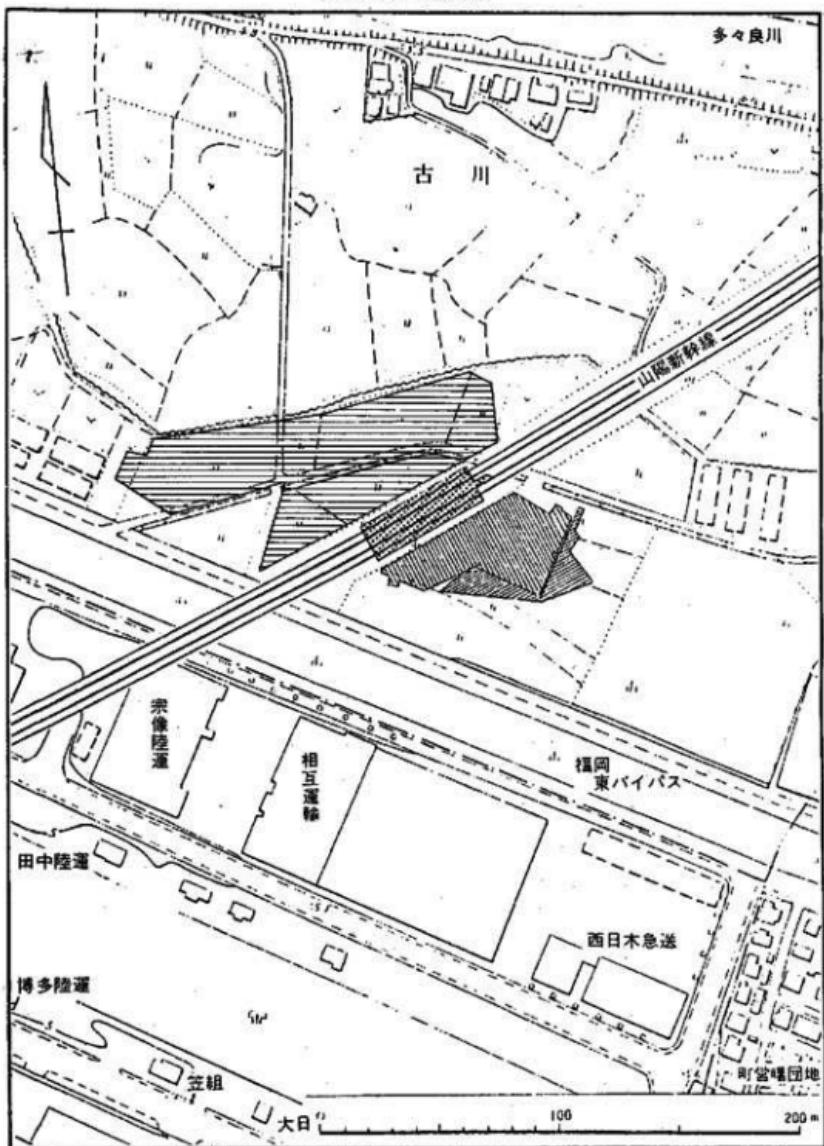
2. 第6次調査の概要

第6次調査区は、1973年に実施された調査区の地に接し、大区画のA-(-1)・0・1~3、B-(-1)・0・1・2、C-(-1)・0・1、D-(-1)・0、E-(-1)、W-0・1、X-0・1、Y-(-1)・0・1、Z-(-1)・0が含まれ、調査面積は約5000m²である。

第6次調査区で検出した遺構は竪穴住居址21、掘立柱建物14、櫛2、井戸1、土塹9、溝14である。出土遺物では数点の弥生時代前期土器、石匙を上限として、若干の弥生中期後半の土器、石器があるが明確な遺構は検出していない。弥生時代終末期～古式土師器の時期にかけて竪穴住居址、溝、掘立柱建物、井戸などで構成される集落をなしている。ついで6~7世紀には明確な遺構はないが、SD-04内や周囲より若干の遺物が検出される。奈良、平安時代には溝、櫛、掘立柱建物などからなる施設が造営されるが、第2・3次調査区の施設との間には空間地域が存在する。以下、本遺跡の中心となる古墳時代・古代の遺構の概略をみてみよう。

古墳時代 古墳時代の遺構は本遺跡の立地する微高地北端の段落ちに沿って検出した。竪穴

2. 第6次調査区の概要



■ 第1次調査(1973年) ▨ 第2次調査(1978年) ▨ 第3次調査(1979年) □ 第6次調査

Fig. 2 調査区と遺跡地形図

住居址は第6次調査区で21軒検出した。壁面が削平され炉址のみとなるものと壁面の一部のみを検出し、明確に住居址と認定できなかったものを入れて25軒前後となる。第1~3次調査検出の12軒と合せて40軒前後の存在が考えられる。第2次調査区および本調査区で、それぞれ東端と西端の広がりが限定されるので、ほぼ本遺跡における古墳時代の住居址を完掘したものと考えることができる。南側についてはSD-10を境として古墳時代遺物遺構が認められないことから、南側の限定も可能であるが、地形的な面を考えれば微高地の後世（古代~中世）の削平等によって遺構の消失も推定でき、第1~6次調査において検出した住居址よりは若干の増加が考えられる。また、本調査区検出の1間×2間の掘立柱建物2棟は柱穴掘方内の遺物、検出位置、方向から見て明らかに古墳時代に属し、竪穴住居址と組み合う倉庫とみられ第3次調査の1棟と合せて、3棟の倉庫の存在を確認したことになる。この期に属する溝は3条検出し、いずれも第1~3次調査に連続するものである。方向は微高地北端の段落ちには平行し、東南から西北に向かう。溝と竪穴住居址で相互に切り合い関係があり、また出土土器から見ても同時併存の時があったことは疑いなく、溝の使用目的に注意する必要がある。

出土遺物で特記すべきは、外来系土器が多量に認められることであり、また焼失住居址が比較的高い比率で認められることであろう。

古代 本調査区で検出したこの時期の遺構は掘立柱建物2棟、棚列2、溝7条、土塙4、炉址1である。この段階ではSD-01（段落ち）は完全に埋まり、ゆるく旧多々良川に向かって下降する微高地となっている。

この時期の遺構の配置は条里の方向に一致するSD-24を南限としてSD-04をはさむ形で建物群が配される。溝は第1~3次調査から延長するものが多いため、建物群は本調査区のA-0区SB-15を東限とし西側はY-0区SB-24を西限とした約50m×30mの範囲に限られ、第1~3次調査の建物群とは約50mの空地部分が存在し、この間には溝以外の遺構も希少である。建物群は東西棟10、南北棟2からなる。いずれも規模の大きい建物で2間×6間を最大とし、2間×5間の建物が大部分で建物自体にも規格性をもとめることができる。また、方向も条里方向と一致するものに近似するものがすべてであることは上記事例と共に注目される。建物とSD-04との重複する部分の切り合い関係ではSD-04がすべての建物を切っており、少なくとも建物とSD-04の関係は同時期ないしは先行するものであり、建物の重複関係から見ても繰り返して建て替えがあったことを知る。出土遺物は大部分がSD-04出土である。SD-04は上・中・下の三層に分離できるが、流路を数回にわたって変えて重複、搅乱しているために遺物の混在が多く傾向として下層に古いものが多い状態で明確に分離することはできない。遺物としては多量の唐代の中国陶磁器や日本製の綠釉陶器、灰釉陶器をはじめとして、石帶、硯、墨書き土器、鈴、鏡、笄、飾金具、貨幣、椎等官衙的色彩を示す遺物が多く、前述の建物群ともあわせて、何らかの官衙を想定することができるものと考えている。

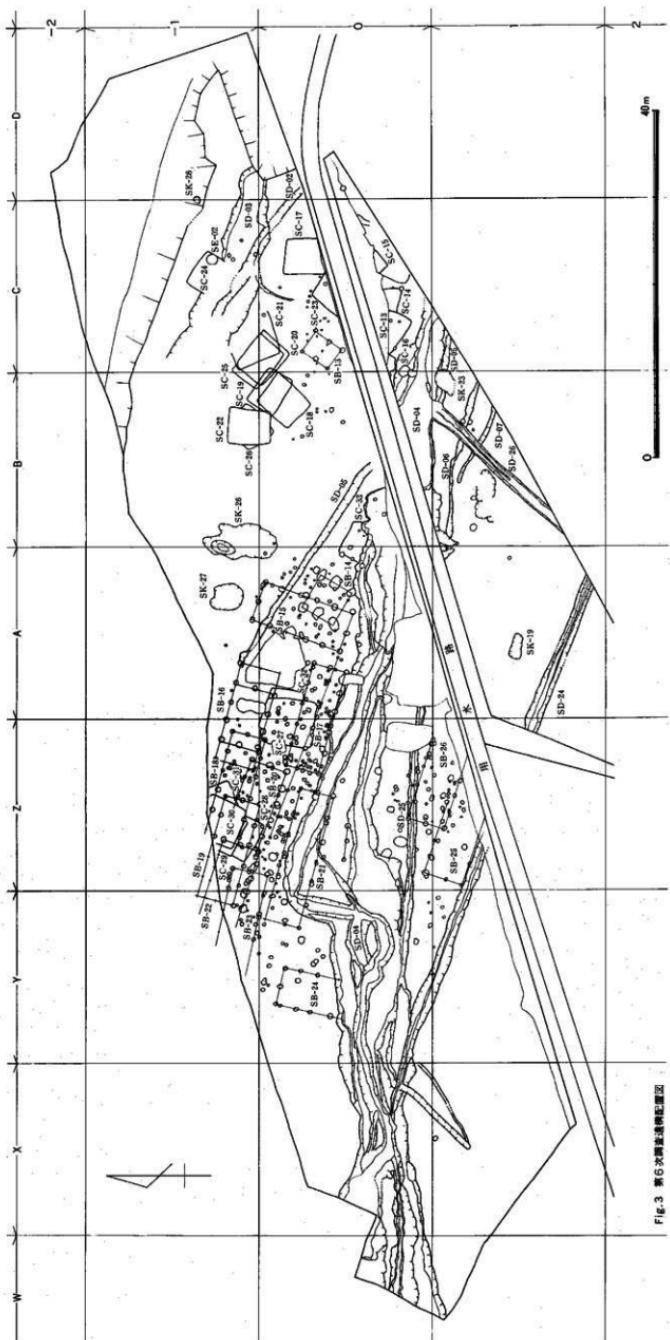


Fig. 3 斯6水文地质剖面图

第4章 調査の記録 一弥生時代の遺構と遺物一

1. 遺構

弥生時代に属する確実な遺構としては、後述する第17号住居址（SC-17）が存在する。ただしこの住居址は他の住居址との関連性が深く、一定の時代の流れの中で理解することがより有効的であるので、他の住居址の属する古墳時代の遺構の章で詳述する。

SC-17以前の弥生時代遺構として明確なものは今回は検出することはできなかったが、D-0区では古墳、古代遺構検出面下約1mの層で弥生土器の變形土器1個が完形で出土した。この變形土器は一見し、小児用甕棺ではないかと考えたが、一部掘り込み部を確認したのみで明確な墓塚の検出はできず、また合せ口等の甕棺の姿は示さず単独であるため、甕棺墓とは判断することはできなかった。なおこの變形土器を中心にしてかなりの面積の拡張を行ったが、最初の變形土器以外には土器片等の遺物は検出できなかった。

しかし、第1・3次調査ではかなりの量の弥生土器、石器が出土しているので、この遺

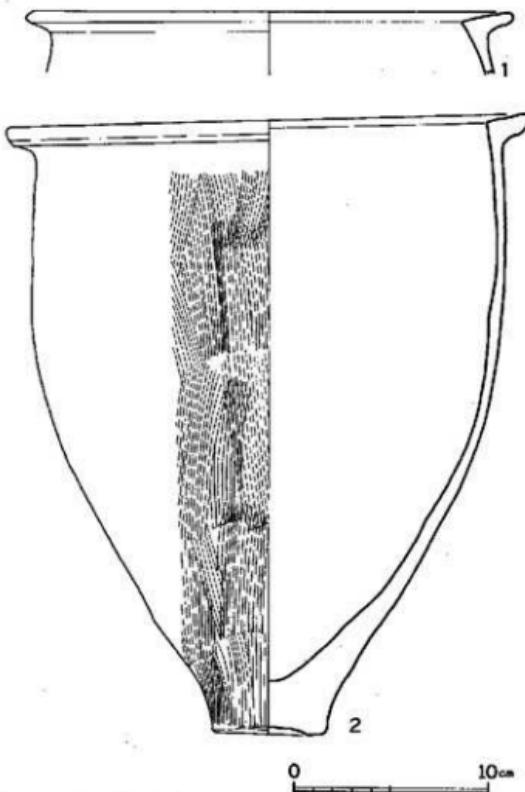


Fig. 4 弥生土器実測図

跡に近接して弥生時代遺跡の存在が予想されるがその位置は明確にできない。

2. 遺 物

(1) 弥生土器 (Fig. 4)

図示したのは中期の斐形土器2点であるが、他に縄文晩期～弥生前期と考える底部破片や胴部破片若干がある。1は復原口径25cm、口縁が逆L字形をした斐形土器である。全体に磨滅が著しく、調整等については不明。胎土には多量の石英、長石の砂粒を含む。焼成は良好で白黄色を呈する。2は完形の斐形土器で口径27cm、器高31.6cm、底部径6cm、口縁は逆L字形をなし、底部はややあげ底である。外面は輻方向のハケ目調整、内面はナデ調整。外面の胴下半部に二次加熱による変色が認められ、上半部は器壁の剥離が著しく、一部スヌの付着がみられる。胎土には若干の石英、長石、赤色鉱物の砂粒が混入されるが精製されたものである。焼成は良好で、器体の色調は黄褐色をなす。

(2) 石器 (Fig. 5)

石器は調査区の各区より混入状態で出土する。石斧、石庖丁、石匙、スクレイパー、砥石、フレイク、チップ等があり、その形態からは縄文晩期～弥生前期と中期に属すると考えることができ、出土土器との年代も一致している。図示したものはいずれもSD-04に混入して出土したものである。1は今山産（玄武岩）の太形蛤刃石斧破片である。頭部と刃部を欠損する。全体によく研磨されているが、一部、敲打痕を残す部分もある。今山産の石斧の中では中型品に属する。現存長9.8cm、幅7.4cm、厚さ4cm強で断面は長楕円形をなす。SD-04、5区1層よりの出土である。2は扁平な小形の磨製石斧で、頭部の一部を欠損する。刃部はつぶれて磨耗が著しい。石材は片岩系のもので、全体によく研磨している。長さ10.9cm、幅は頭部で3cm、刃部で5.1cm、厚さ1.2cm。3は古銅輝石安山岩を利用した横型の石匙で一部新しい欠損があるが、ほぼ完形である。横剥ぎのフレイクを素材として、両端よりリタッチを加え丁寧に整形している。刃部はやや外済し、両端部は尖っていたと思われるが欠損する。背部にはやや片よってつまみがつけられる。長さ8.5cm。石庖丁は3点が存在し、いずれも外湾刃石庖丁の破片である。4は大形石庖丁で紐孔部より破損する。全体に磨滅が著しい。刃部は両刃で孔は両面よりの穿孔である。全形は三角形に近い形状を示す。現存長7.5cm、厚さ0.4cm、安山岩質ホルンフェルスを素材とする。6は中形品で紐孔部がわずかに残る。刃部は両面よりの研磨。研磨は全面に丁寧に施されるが一部敲打面を残す部分がある。黒色の凝灰岩ホルンフェルスを素材とする。7はアズキ色の凝灰岩質ホルンフェルス製の小形の石庖丁である。全体に良く研磨されている。刃部は両面よりの研ぎ出しで、紐孔は両面より穿孔する。全体に磨滅が著しい。古銅輝石安山岩のフレイクを素材とする。一面には表皮を残す。周縁部に2次加工を加え刃部を形成する。

2. 造 物

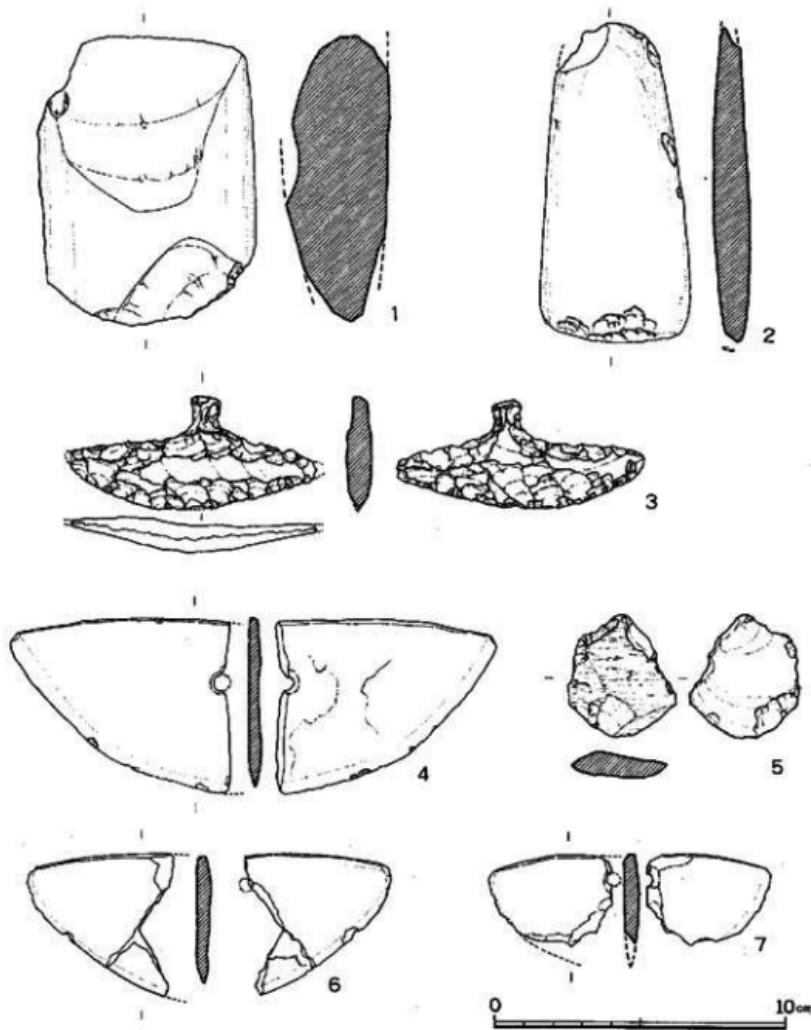


Fig. 5 石器実測図

第5章 調査の記録—古墳時代の遺構と遺物—

1. 第13号住居址 (SC-13)

(1) 住居址 (Fig. 6)

B-0区東南部に検出した住居址である。調査区内を西流する農業用水路によって約半分が破壊される東西4.5m、南北3.2m以上の方形に近いプランをもつものと推定される。東・西壁

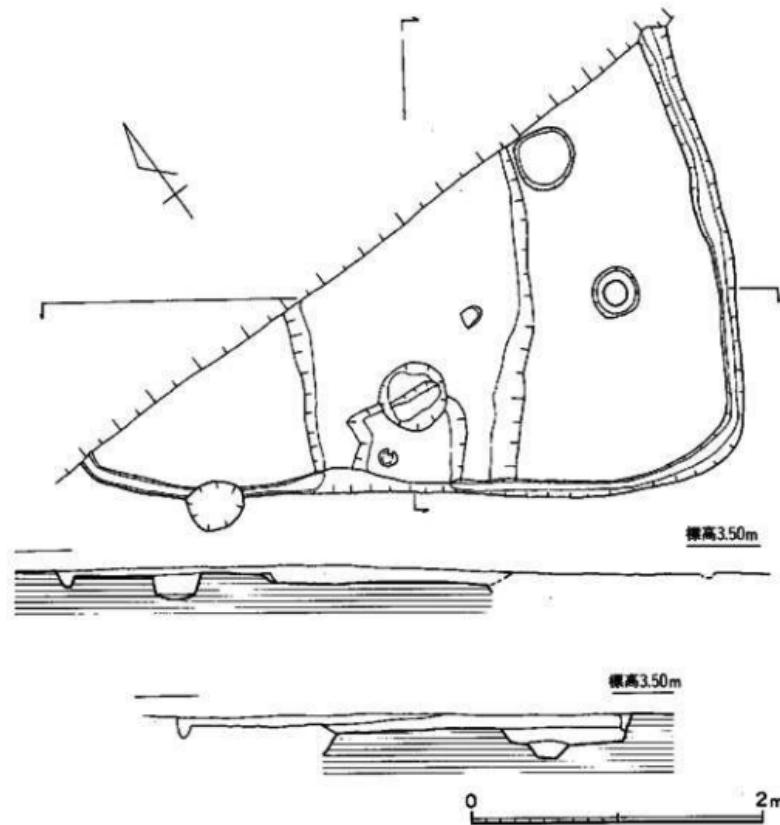


Fig. 6 第13号住居址 (SC-13) 実測図

1. 第13号住居址 (SC-13)

にそってベッド状遺構が付設される。東側のベッド状遺構は幅1.2~1.6mで、高さ約6cm、床面に2個の柱穴が認められる。西側のベッド状遺構は幅1.6m、高さ7cm。壁の内側には幅10cm、深さ10cmの周溝をめぐらす。周溝内には板をたてた痕跡が明瞭に残っている。板の厚さ2cm前後、南側部中央部に壁に接して0.75m×0.8mの不整形方形掘り込みがあり、壁面と反対側が一段深く掘り込まれ、その深さは約20cmである。住居址の出入口に梯を利用したと考えれば、この部分が出入りとしての機能を果たしていたものと考える。

床面の遺物は若干の土師器と石器片1点があった。

(2) 遺物 (Fig. 7-1~4)

床面出土遺物として図示できるものは土師器3点と石器1点である。

1、2は浅い碗で、1は口径11.2cm、器高3.5cm、保存状態が悪いが一部残存部からみて、内外面共に横方向のヘラ研磨調整を行っている。胎土は精製されたもので、石英、長石、金雲母の小粒子を含む良質のものである。焼成は良好で赤褐色をなす。2は口を残す破片で、復原口径9cm、器高2.3cm、手づくねで成形したもので内外面ともに凹凸が著しい。

1と比較し胎土、成形共におちる。胎土はやや粒子の大きい石英、長石、黒雲母、赤色鉱物を多量に含む。焼成は良い、黄褐色、外面に黒斑がある。3は高環部破片、口縁部を欠く、環部底部と体部の段は明瞭で、体部は直線的に外に延びる。推定口径14.8cm、口縁部内面に横方向のハケ目。4は粘板岩製の石器片である。現存長4.5cm、現存幅4.1cm、厚さ0.4cmである。全体形は明らかにできない。全体に研磨されていて一見石庖丁を思わせる。両面に縱方向の条線がはいる。

2. 第14号住居址 (SC-14)

B-0区東部中央、SC-13の東側に存在し、農業用水路およびSC-13に切られている。壁面の残りはほとんどなく、かろうじて住居址として識別できる状態である。プラン、その他について不明。床面上より土師器の小破片が出土しているが図示できるものはない。

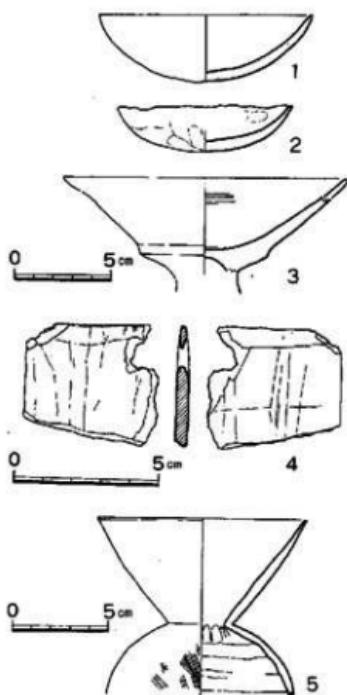


Fig. 7 第13・15号住居址 (SC-13・15)
出土遺物実測図

3. 第15号住居址(SC-15)

(1) 住居址(Fig. 8)

C-0区西端中央部に検出した。前述農業用水路によって大部分が破壊され、南西のコーナー($2.2m \times 1.3m$)を残すのみである。壁は比較的の残存状況が良く、約30cmの高さがある。床面上に土師器を検出したが量的に少ない。復原すればSC-17、SC-23との重複関係が存在する可能性もある。

(2) 遺物(Fig. 7-5)

小形の直口壺、口径10.8cm、頸部径3.4cm、推定高13cm前後。器形は頸部で瓶端にすばまり、ややふくらみをもってラッパ状にひらく口縁に球形の胴部を付したものである。口縁部内外面は横方向へのら研磨、胴部は細い縦方向のハケ目調整後、横方向へのら研磨を施す。内面は粘土紐の痕跡が明瞭に残っている。胎土は精選された良質の粘土を使用し、焼成は堅致。外面は赤褐色、内面は白灰色をなす。

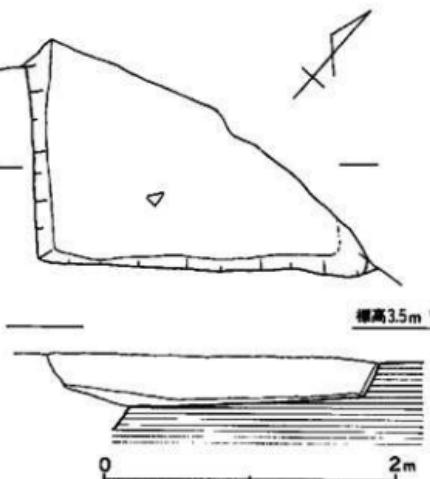


Fig. 8 第15号住居址(SC-15) 実測図

4. 第16号住居址(SC-16)

B-0区中央部近くに検出した。前述農業用水路による破壊とSD-04、SC-13の重複関係による切り合いで大部分を失いプランは不明。壁の残存状況も削平によって数cmを残すのみで、炉址、柱穴の存在はない。床面より土師器細片が若干出土しているが、図示できるものはない。

5. 第17号住居址(SC-17)

(1) 住居址(Fig. 9・10)

C-0区北西端に検出した。農業用水路によって南側壁が一部破壊される。北側壁長4.0m、東側壁現存長3.4m、西側壁現存長5.0m、推定長5.6mの南北に長い長方形プランを有する。壁高15cm、壁に沿って幅15cm、深さ10cmの周溝がめぐる。板材の痕跡は認められない。両短側壁(北・南)に沿ってベッド状遺構が付設される。南側ベッドは痕跡を残すのみであるが、北

5. 第17号住居址 (SC-17)

鋪ベッドは幅115~125cm、高さ10cmで作りつけのものである。ベッド中央部に接して2本の主柱穴が配される。柱穴掘り方は北側が径75cm×85cmの円形、深さ30cm。南側が $75 + \alpha$ cm×100cmの円形、深さ40cmである。柱の大きさは不明。柱間隔は2.5mである。柱穴の間に炉が営まれている。がは径30cm、深さ10cmの浅い皿状の凹みをなし赤く焼ける。その上面は焼土、炭化物、灰層が重層的に堆積している。灰の粒がりは、炉を中心に径0.6mにわたる。

(2) 遺物 (Fig. 11~14)

遺物出土状況 (Fig. 9)

本住居址より検出した遺物はすべてが土器である。いずれも床面に密着して出土し、埋土中よりの出土は皆無である。土器は完形品を含み、大きな破片が大部分で、復原完形に近いものも少くない。土器の分布は特別な状況は示さず、床面全域にわたって分布するかのようにみえるが、全体に住居址東半部に密度が濃い。接合関係からすればかなり原位置(据え置かれた)に

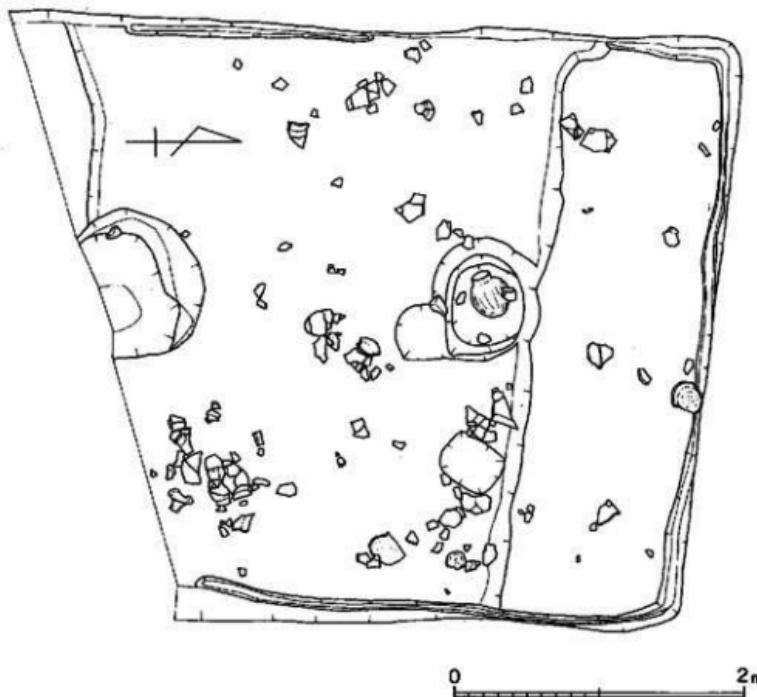


Fig. 9 第17号住居址 (SC-17) 遺物出土状況

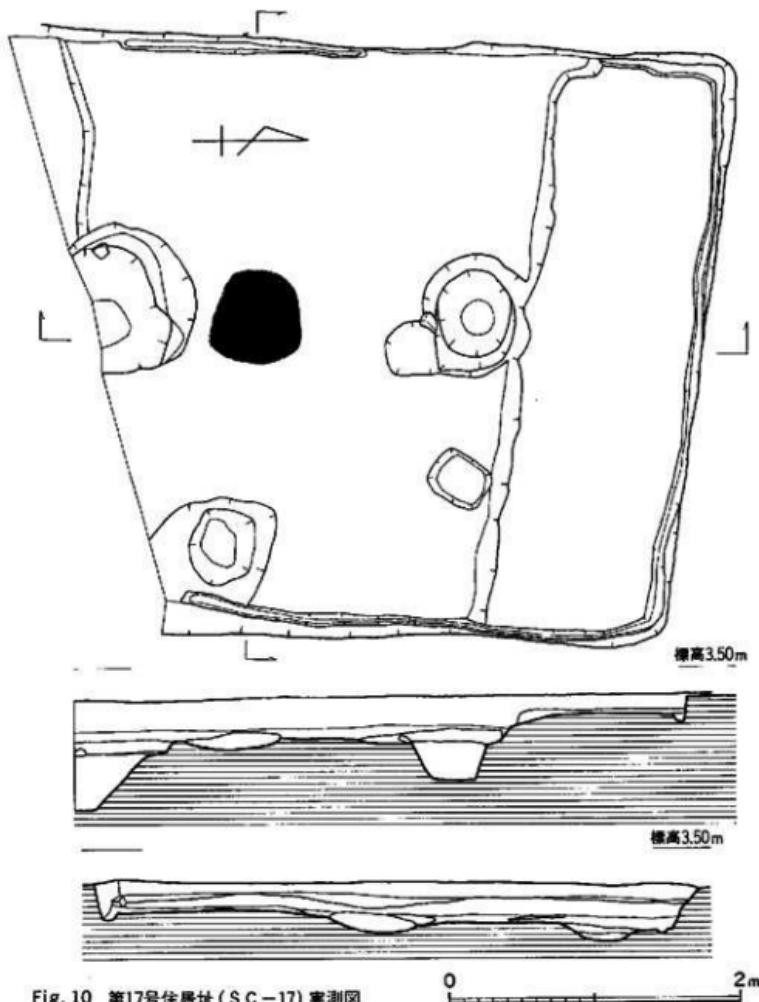


Fig. 10 第17号住居址 (SC-17) 実測図

近い状況を示している。火災住居址の状態に近いとみることができるが、焼土、炭化材等の火災を示す遺物は皆無であって、いかなる状況下における出土状況かは現段階ではきめがたい。

遺物 (Fig. 11~14)

壺、甕、瓶、脚付椀、器台、鉢、高杯等の器種がある。以下、各個体について説明する。

5. 第17号住居址(SC-17)

1は菱形土器の完形品で、小さい平底の底部から外傾しながらたち上がり、胴部は張らず、頭部でややすばみ、外反する口縁を付した一般的な器形をもつ、口径17.6cm、頭部径15.6cm、胴部最大径18cm、底部径3cm、器高21.4cm。外面は縱方向のハケ目調整、口縁部はその後、横ナデを施し、ハケ目痕を消している。胴下半はヘラナデ(磨き)によってハケ目痕を消す。内面は口縁部が横方向のハケ目調整、胴部は縦位のハケ目調整後、ヘラナデ(磨き)によって調整する。煮沸用の土器で、外面刷下半に二次加熱による変色がみられ、ススが付着し、内面下半にもコゲつきが残っている。胎上には石英、長石、雲母の砂粒を含む。焼成は良好で、色調は黄褐色をなす。底部附近と胴部には黒斑がある。2は1と同様の器形をなす菱形土器であるが、頭部、口縁部を欠く。底部径3cm、胴部最大径15.9cm、現存高17cm、外面は下から上へかきあげた縱方向のハケ目調整、内面は胴下半が縱方向、上半部が横方向のハケ目調整、外面にススが付着する。胎上、焼成、色調は1と同じである。3、4は短頸壺である。3は直口する口縁にやや長胴の体部を付したもので、完形品である。口径15.1cm、胴部最大径は25.7cm、器高30.4cm、外面は縱方向のハケ目調整、底部近くでヘラ磨きを加える。口縁部はハケ目の上に横ナデを施す。内面は横方向のハケ目調整、内底部にはヘラ研磨を加える。胴部と頭部の接合部は指による圧痕があり、粘土帯の痕跡が明瞭に残る。口縁部も横方向の荒いハケ目調整である。底部附近とそれと対称的な肩部に黒斑がみとめられる。胎土には石英、長石、雲母の砂粒を含む。焼成は良い、色調は黄褐色をなす。4は小形品で約半分を残す。球形の胴部に直口する口縁をつけたもので、口縁端部がやや外反し、端部は平坦に仕上げる。口径12.6cm、胴部最大径16.6cm、器高15.5cm、外面は細い縱方向のハケ目調整で丁寧に仕上げる。口縁部はその後に横ナデが認められる。内面は丁寧に研磨する。内底部にコゲ付きが見られる。外面は二次加熱によって変色する部分がある。胴部に黒斑がある。胎上に石英、長石、雲母の砂粒を含み、焼成は良い。色調は内外面共に褐色をなす。5～7、12～14は大形の菱形土器である。5は $\frac{1}{4}$ ほどを残す破片で、復原口径23cm、胴部最大径25cmで、く字に屈曲する口縁で、口縁端部は丸くおさめる。外面は縱方向のハケ目調整で胴下半はヘラナデ(研磨)でハケ目を消している。口縁部はハケ目の上に横ナデを施す。内面は丁寧な縦方向のハケ目調整で口縁は斜方向のハケ目調整。粘土帯の接合部痕跡が残る。胴部に黒斑がみられる。胎土には石英、長石、雲母の砂粒を含む。焼成は良好で、色調は外面が褐色、内面が赤黄色である。6は復原口径26cm、器形は4と同じであるが、口縁端部は平坦である。内外面ともに細いハケ目調整、胎土は石英、長石、雲母の砂粒を含むが良質。焼成は堅致で色調は外面が赤黄色、内面は黄灰色である。7も前者と同様の器形をなす。復原口径27.3cm、外面は縦方向の荒いハケ目調整、内面は横方向のハケ目調整、胎上には石英、長石、雲母の砂粒を比較的多く含み、焼成は良好。色調は黄褐色をなす。12、13は器形は同様であるが、頭部に断面三角形の突帯を巡らしている。12は復原口径34.6cm、口縁端部は平坦に仕上げる。外面は縦位の荒いハケ目調整を施す。内面は丁寧なナデ

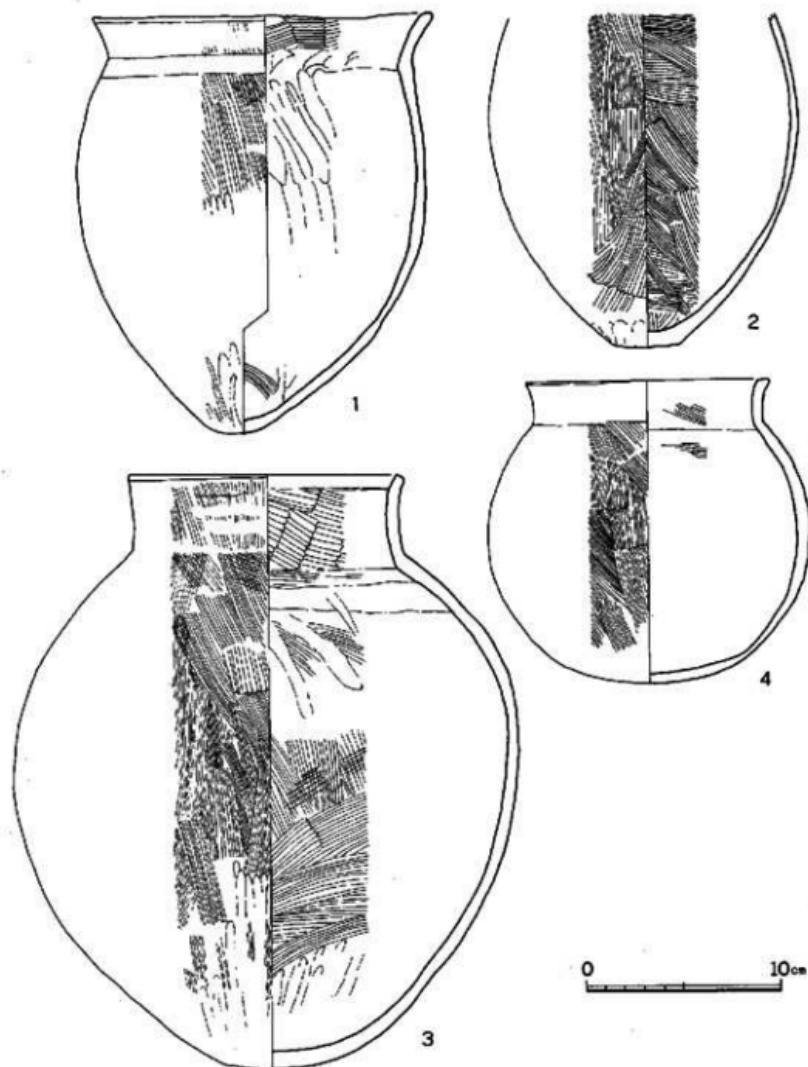


Fig. 11 第17号住居址(SC-17)出土遺物実測図

5. 第17号住居址(SC-17)

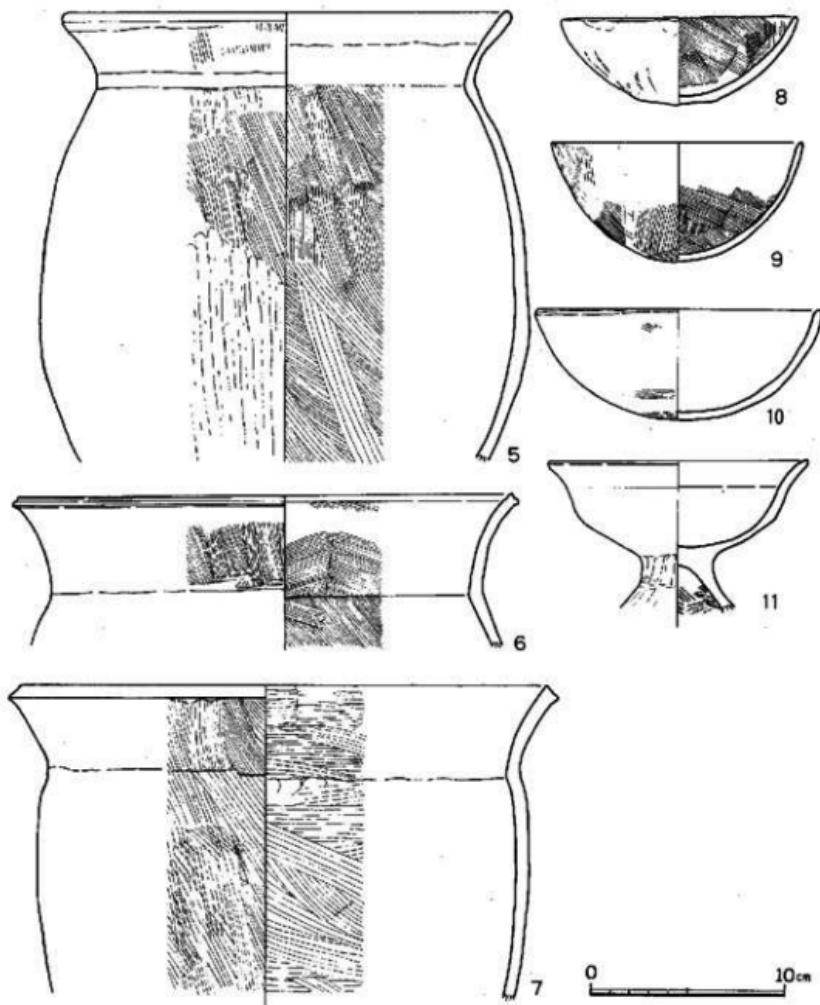


Fig.12 第17号住居址(SC-17)出土遺物実測図 II

によって調整する。胎土には石英、長石、雲母の砂粒を多量に含む。焼成は良く黄褐色をなす。13は口縁部がややのびるもので、口縁端部は丸くおさめる。外面は縦位の細いハケ目調整、内面は胴部が横位、口縁部が斜位の細いハケ目調整、胎土は前者と同様で焼成は堅致。14は復原口径30cm、胴部外面は縦位の荒いハケ目調整で、胴下半部は棒状工具で研磨する。口縁部は下から上へかきあげるハケ目調整であるが、縦、斜位のくりかえしがみられる。内面は横位、一部縦位の荒いハケ目調整、胎土には石英、長石、雲母の砂粒を含む。焼成は良好で外面が赤褐色、内面が黄褐色をなす。

椀（8～10）3個を図示した。8は口径12.3cm、器高4.4cm、外面は手づくね的で調整は荒い。底部は丸底に近い平底をなす。底部から胴中位までは荒いヘラ削り調整で下から上方に削っている。口縁部は手づくね調整を行う。内面は底部付近が指頭による調整、体部は下方から斜上方へかきあげたハケ目調整を逆時計まわりに丁寧に施す。胎土には石英、長石、雲母のやや粗い砂粒を多く含み良質ではない。焼成は良好。色調は内面が赤褐色、外面は赤褐色～黄褐色をなす。内外面の調整手法からみて後述する型作りの椀である可能性がある。9はほぼ完形で口縁部の一部を欠損する。口径13～13.6cmで正円でない。器高15cm、前者と異なり丁寧なつくりである。丸底で半球状の器形でやや深みがある。外面は丁寧なハケ目調整で底部から口縁に向かう縦方向に施し、口縁部は横方向のハケ目調整を重ねる。全面にススが付着し、一部二次加熱によって変色する部分もある。内面は細い丁寧なハケ目調整で逆時計まわりに斜位に施す。胎土には石英、長石、雲母の砂粒を含むが良質である。焼成は良好、色調は内面が赤褐色、外面が赤褐色～褐色をなす。10は%程度を残す破片である。製作技法は9と同様に丁寧である。口径14.9cm、器高5.7cm、外面は底部近くはハケ目調整で体部上半部は横ナデでハケ目痕を消している。底部に黒斑がある。内面は丁寧なナデによって仕上げる。胎土には石英、長石、雲母の砂粒を含む。焼成は良好、色調は赤黄色～黄褐色をなす。11は脚付椀で、脚端部と体部の一部を失う。口径13.5cm、楕部高4.6cm、脚現存高3cm、器形は脚があり高くなく、広がらないもので楕部は口縁付近で屈曲し外反するものである。外面は口縁部付近が横方向のヘラ研磨、体部が縦方向のヘラ研磨、楕部と脚部の接合部はヘラによる面取り状の研磨が加えられる。内面も外面と同様に口縁部が横方向、内底部が不定方向のヘラ研磨によって丁寧に整形される。脚内面は逆時計まわりのハケ目調整であるが丁寧ではない。楕部口縁近くに黒斑がある。胎土には長石、石英、雲母の砂粒を比較的多く含む。焼成は良好、色調は内面が黄褐色、外面が赤褐色～黄褐色をなす。15は高杯ないしは鉢の脚と考えるものであるが上部を欠く、脚は径が大きく器高が低く、裾広がりの安定したもので、現存高11.4cm、脚端径17.5cmをはかる。内外面共に保存状態が良くないため調整法については明らかにできない。胎土には多量の花崗岩の粗い砂粒を含み良質ではない。焼成は良好、色調は赤黄色で、脚端部の左右対称のところに黒斑が認められる。10は器台ないしは高杯等の脚と考えられるものであるが判定するのに困

5. 第17号住居址 (SC-17)

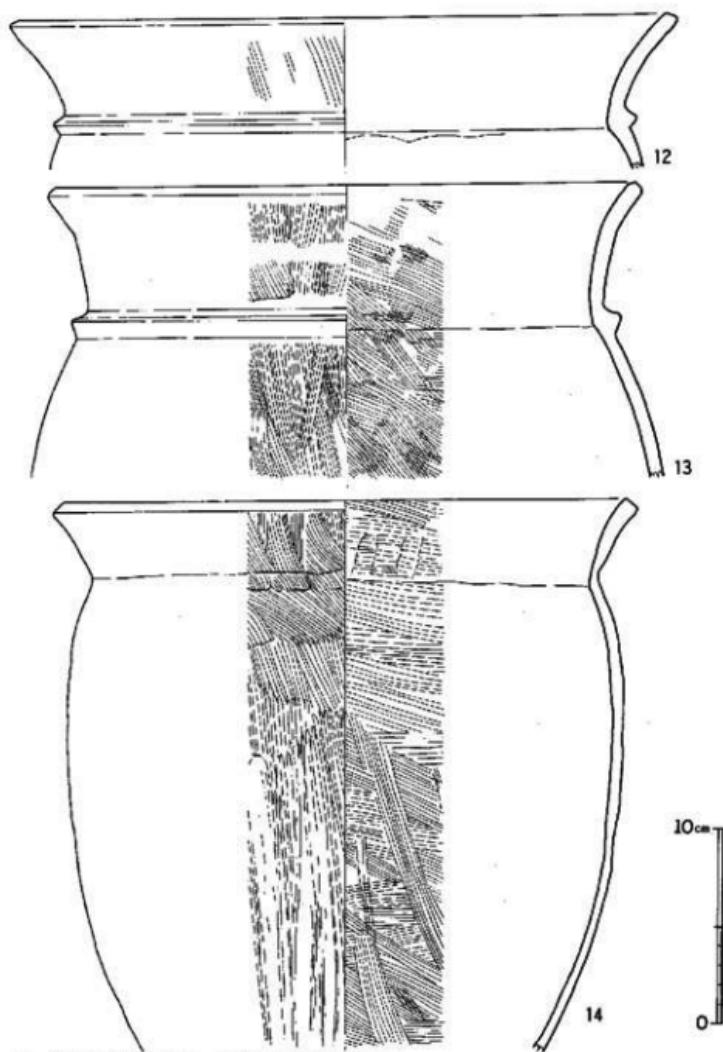


Fig. 13 第17号住居址 (SC-17) 出土遺物実測図 III

難である。器壁の厚さ等からすれば後述する器台とは異なる。ここでは一応、脚で説明を加える。内傾しながら直線的にたちあがる器形である。外面は縱方向のハケ目調整、内面は下半が

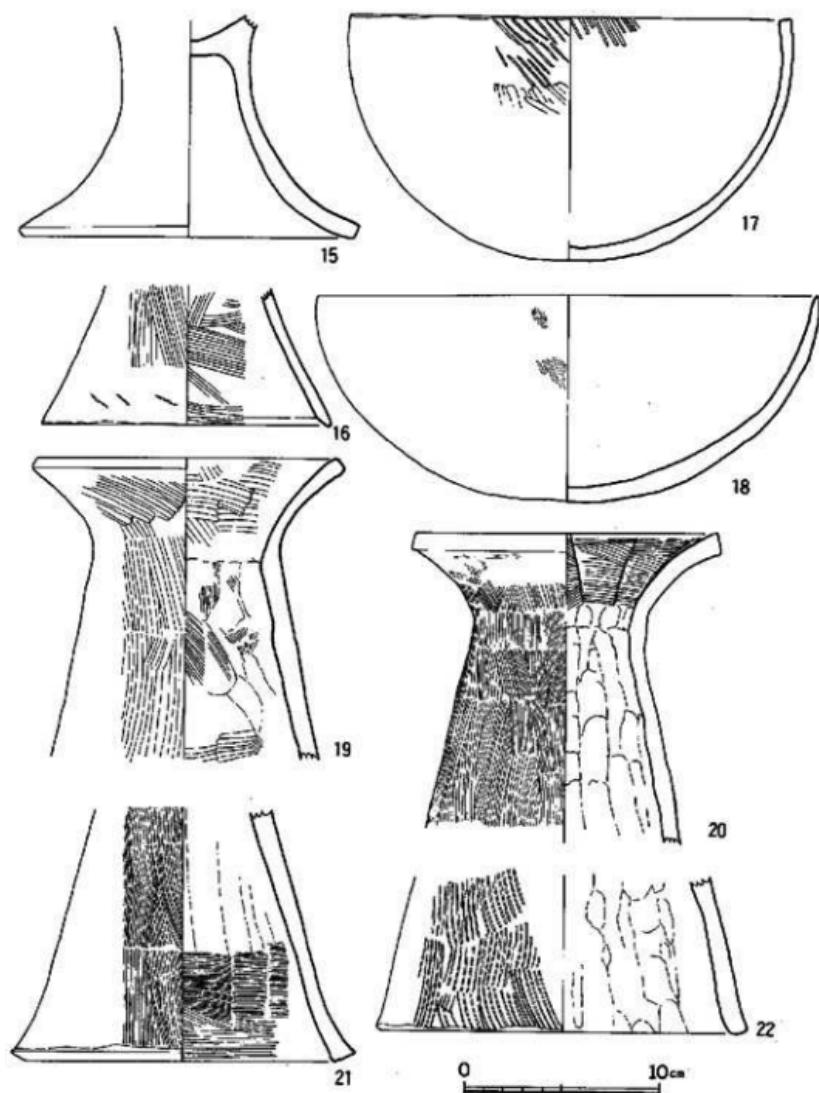


Fig. 14 第17号住居址(SC-17)出土遺物実測図 IV

横方向、上半部が縱方向のハケ目調整、脚端部内側をヘラで削り取り薄くしている。胎土には長石、石英、雲母の砂粒を含む。焼成は良好で、色調は内面が赤褐色、外面が黒褐色～黄褐色をなす。17、18はポール状をした鉢形土器である。図示していないが、同様のものが他に1個体存在する。17は口径22.8cm、器高12.5cm、半球状の器形をなす。外面は口縁部付近に平行タタキ目が部分的に残っているが、胴部から底部にかけて丁寧なヘラ研磨を施すことによってタタキ目を消している。内面も外面と同様の調整を施す。口縁端部はヘラで削り平坦にしている。外面には底部から胴部にかけてスヌの付着が頗る著である。胎土には石英、長石、雲母の砂粒をやや多量に含んでいる。焼成は良好、色調は外面が赤褐色～黒褐色、内面は赤黄褐色である。18は約1/6を残す破片である。復原口径25.8cm、器高10.5cm、器形は17と比較しやや浅く開き気味である。口縁端部を丸くおさめることも17と異なるところである。外面はハケ目調整後、ナデ調整を加えて器面を整えている。内面はヘラ研磨である。外面にスヌの付着は認められない。胎土には石英、長石、雲母の砂粒を多量に含む、焼成は良好、色調は内外面共に赤褐色をなす。図示しなかった1個体は器形的には17と同様であるが、やや小形品で口径20.5cm、器高10.4cm、外面は荒い手づくね的な調整、内面は丁寧なヘラ研磨、口縁部の左右対称に黒斑が認められる。口縁端部は平坦に仕上げられる。胎土は石英、長石、雲母を含む。焼成は良好。色調は赤褐色をなす。19~22は器台である。器形はいずれも共通していて、脚端部から、すばまりながらたちあがり、上半部で反転して受部を形成するものである。以下各個体について説明する。19は下端部を欠く。受部径16cm、現存器高15.5cm、外面脚部は縱方向の荒いハケ目調整、受部が斜方向のハケ目調整、内面は脚下半が横方向の荒いハケ目調整、上半部はしばりのため器面の凹凸が著しく、縱、斜方向の細いハケ目調整が部分的に施される。また、粘土帯の痕跡が明瞭に残存していて、その長さは4.5cmである。受部内側は横方向の荒いハケ目調整である。胎土は石英、長石、雲母の砂粒を多く含む。焼成は良好で色調は赤褐色をなす。20も脚下半部を欠失している。受部径15.8cm、現存高16cm、外面は脚部が細い縱方向のハケ目調整、受部は斜方向のハケ目調整、脚部の対象部分に黒斑がある。内面は脚下半部の一部を横方向のハケ目調整で平滑な面にしあげているが、上半部はしばりによる凹凸が縦位に残り、そのまま放置してある。受部は横方向のハケ目調整で丁寧に仕上げている。胎土は石英、長石、雲母の砂粒を若干含む。焼成は良好で、色調は赤褐色～黄褐色をなす。21は脚部破片で、復原脚端径17.7cm、前二者よりシャープなつくりである。外面は縦方向の細いハケ目調整、上半部から脚端部にかけて黒斑がある。内面は上半部が縦位のヘラによるかきあげが条線状にみとめられ、下半部はその上に横位のハケ目調整を施し、面をととのえる。胎土には石英、長石、雲母の砂粒をやや多く含む。焼成は良好、色調は外面が黄灰色～黒色、内面が褐色をなす。22は脚端部の破片である。復原脚端径19cm、外面は縦方向の荒いハケ目調整、内面は指頭による調整で凹凸が著しい。胎土には石英、長石、雲母を含む。焼成は良好で、色調は赤褐色をなす。

6. 第18号住居址 (SC-18)

(1) 住居址 (Fig. 15)

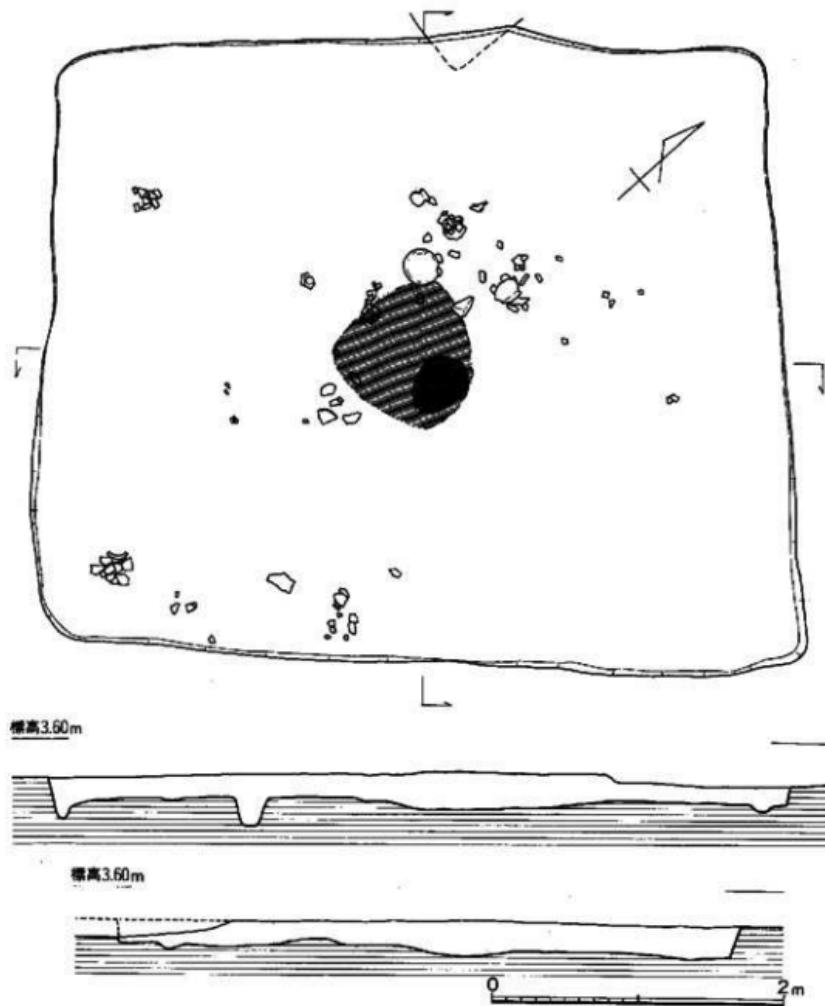


Fig. 15 第18号住居址 (SC-18) 実測図

6. 第18号住居址(SC-18)

B-0区北東隅に検出した。SC-19、SC-22とNoなしの炉址との重複関係がある。北東側壁長4.2m、南西側壁長4.0m、北西側壁長5.2mの北東に長い長方形プランを有する。壁高10~20cm前後である。床面は粘土をはっている。ベッド状造構、周溝などはみられない。ほぼ中央部に炉址を検出した。炉は40cm×30cmの楕円形で浅い皿状の凹みがあり、焼土、炭、灰がつまっていた。炉を中心として主に西側に径90cmの範囲で炭、灰層の抜がりが認められる。柱穴は精査したにもかかわらず検出することはできなかった。

(2) 遺物 (Fig. 17~19)

遺物出土状況 (Fig. 15, 16)

本住居址の遺物も比較的良好な状態で出土した。いかなる理由によって廃棄されたかは不明であるが、いずれもほぼ原位置に近い状態であろうと推定される。遺物は完形品に近い状態であったものが、後世の削平と発掘時における表土層の除去中に破壊したものであることは推測に難くない。

遺物には土器類と石器がある。土器は二群にわかつて出土している。一群は炉の周囲で、特に炉の北側に集中するもので、壺、小形丸底壺、高环よりなり、高环の下に後述する石錘もある。他の一群は周壁に沿った部分より出土するもので、特に南東壁に沿って器が出土している。

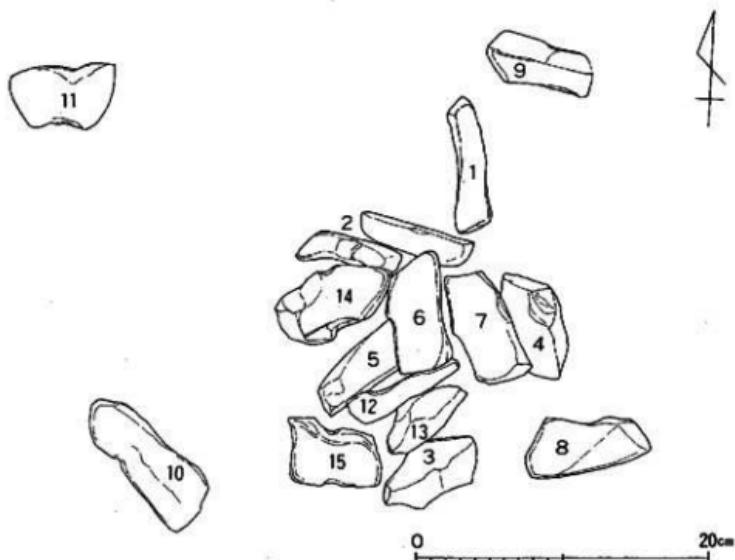


Fig. 16 第18号住居址(SC-18) 石錘出土状況実測図

石錐は炉の北側、約50cm離れて、Fig.16に示すように一塊りとなって出土し、その対が判明するような状態であった。この状態は明らかにおかれた状態を示すものであるが、火災等を示す発掘所見はみられなかった。SC-17と同様の理由によるものであろうか。

遺物 (Fig. 17~19)

土師器には甕、壺、小形丸底壺、高环等がみられるが、図示できるものはFig.17に示した7点である。石器類はすべてが石錐である。

1は壺形土器で口径18.8cm、頸部径13.8cm、胴部最大径は24.5cmである。球形の胴部に口縁が強く外反する口縁部を有する。口縁端部には浅い凹線がめぐらされ、下端部がややふくれる。外面は口縁部が横ナデ、胴上半部が横位のハケ目調整、下半部はその上に縱位のヘラ磨きを加えてハケ目を消している。内面は口縁部が横ナデ調整、胴部は頭部下のやや下方より横方向の丁寧なヘラ削りを加え器壁を薄く仕上げている。器壁の厚さは0.3~0.5cm、外面の胴下半に黒斑が認められる。また、わずかにススの付着もある。胎土には石英、長石、黒雲母、金雲母、赤色鉱物の砂粒を含むが良質。焼成は良好で、色調は褐色をなす。2は広口壺で復原口径23.6cm、頸部径20cm、胴部は肩が張り、口縁部はわずかに外反し立ちあがる。口縁端部は平坦に仕上げる。内外面共に保存状態が悪く調整痕は明らかにできない。ただし、胴部内面にはヘラ削りは施されていない。胎土には石英、長石、雲母の砂粒を含むが良質、焼成は良く、色調は外面が赤褐色、内面は灰褐色である。4、5は小形丸底壺である。4は復原口径9.6cm、頸部径8.4cm、胴部最大径10.5cm、推定高10.6cm、球形の胴部に外傾しながら立ち上る口縁を付す。口径が胴部よりやや小さい。外面は口縁部が横ナデ調整、胴部は不定方向の細いハケ目調整で、胴上半部はナデ消す部分がある。内面は口縁部が横方向の細いハケ目調整、底部付近~胴中位までヘラ削りによって凹凸があるが、上半部はナデ調整である。胎土には石英、長石、雲母の砂粒を含む。焼成は良好で、色調は外面が褐色~黒褐色、内面が赤褐色をなす。5もほぼ同大のものであるが、口縁部が外反しながら立ちあがる。外面は口縁部が横ナデ調整、胴上半部は縱方向の細いハケ目調整で下半部は保存状態が悪く不明瞭である。内面は口縁部が横ナデ調整、頭部の下方1cmぐらいはヘラナデ状のケズリで丁寧に調整される。胎土には石英、長石、雲母の砂粒を含む。焼成は良好で色調は内外面共に赤褐色をなす。3、6、7は高环で、6、7は脚部である。3は約1%の破片である。脚端部は不明であるが、ラッパ状に広がる安定した脚に環部をつけたもので、環部はほぼ中位で屈曲し、口縁部は外反する。復原口径21.7cm、屈曲部径13.4cm、現存器高11.5cm。外面は屈曲部以下~脚がヘラ磨きで口縁部は横ナデ調整、内面はヘラ磨き調整、屈曲部の粘土接合部はハケ目を入れ接合強度を良くしている。脚内面にはヘラ削りを加えている。胎土は石英、長石、雲母の砂粒を含むが良質。焼成は良好で赤黄色をなすが、脚内側は黒色である。6、7は筒部から脚端部が強く屈曲し広がるもので、6は外面がヘラ磨き、筒部内面はヘラ削り、8は脚部破片で復原径12.4cm、内外面共にナデ調整、6、

6. 第18号住居址(SC-18)

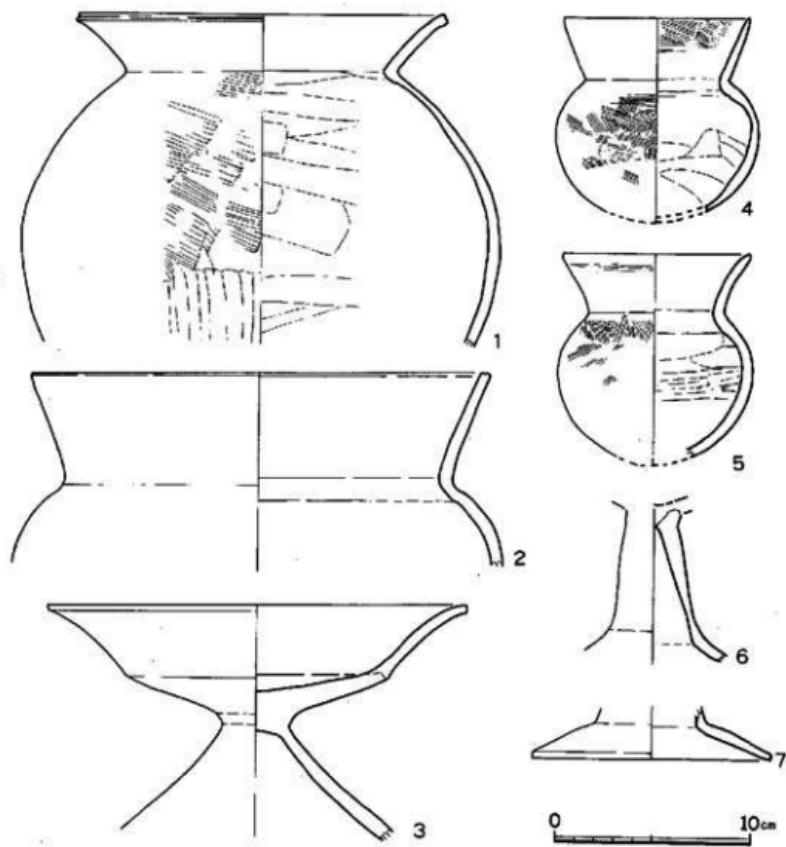


Fig. 17 第18号住居址(SC-18)出土遺物実測図 I

7共に胎土には石英、長石、雲母の砂粒を含む。焼成良好で色調は6が赤黄色、7が赤褐色をなす。

石器は席編み具の鍼と考えられる自然石を利用した打欠き石鍼15個がある(Fig. 18, 19)。対をなすには1個不足するが、これは発掘時に気づかず1個失った可能性がある。

1は長さ9.4cm、幅3.1cm、厚さ1.3cm、重さ63.7gの細長い花崗岩の川原石で、長軸の一辺の中央部にわずかに打ち欠いた部分がある。2は半剖して出土した長さ7.8cm、幅3.1cm、厚さ

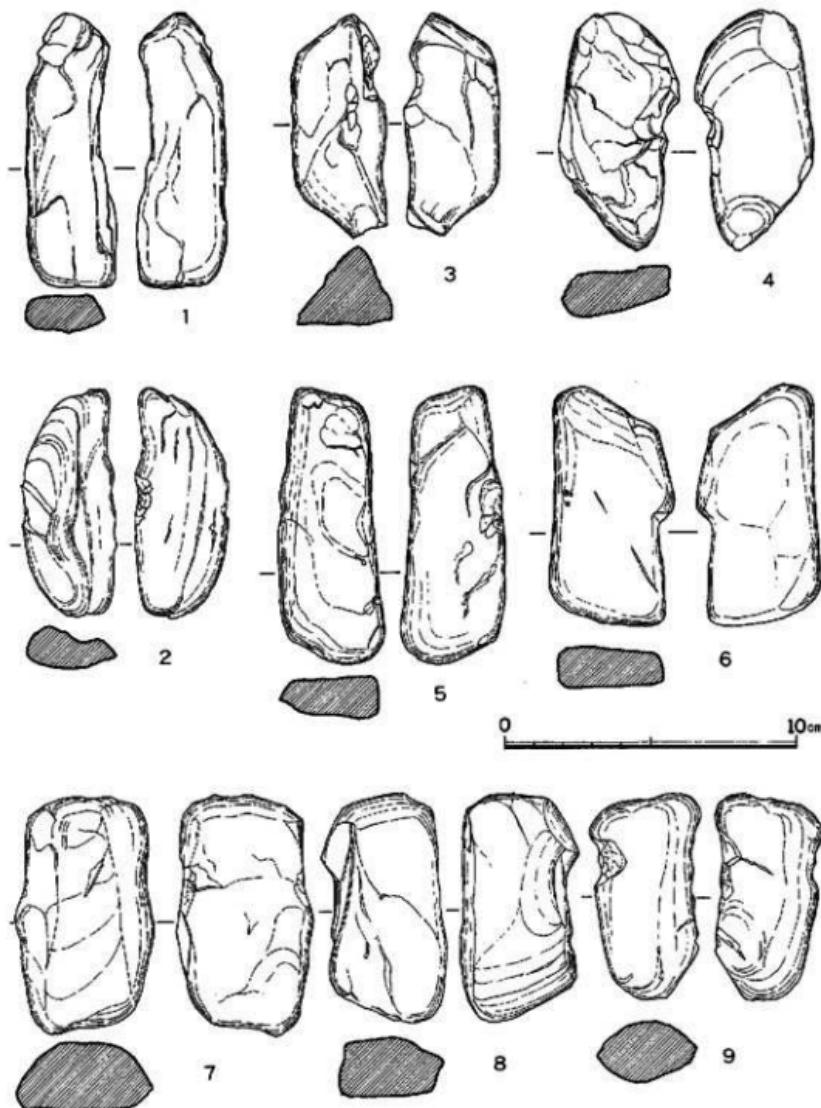


Fig. 18 第18号住居址(SC-18)出土遺物実測図 II

6. 第18号住居址 (SC-18)

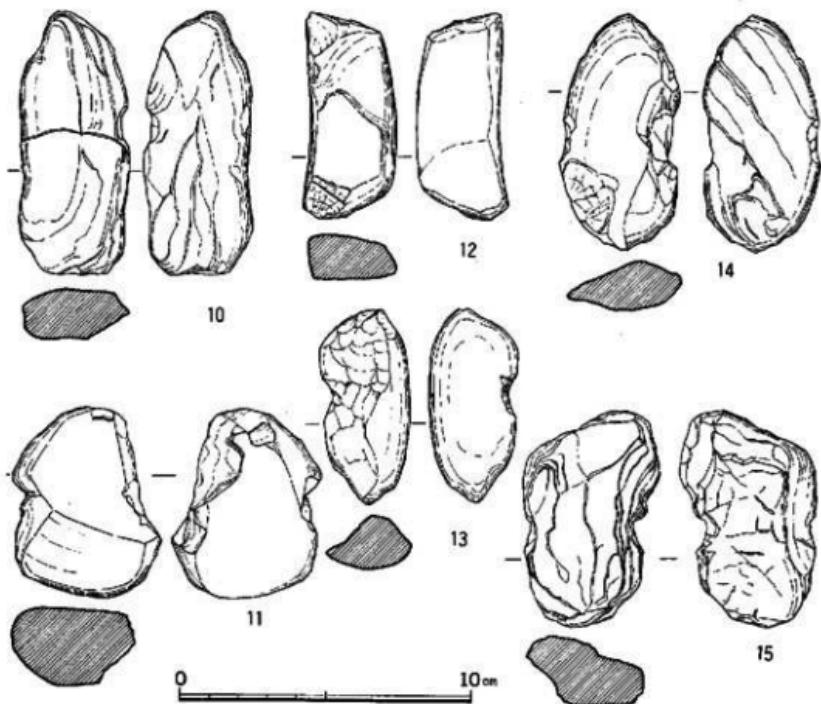


Fig. 19 第18号住居址 (SC-18) 出土遺物実測図 III

1.4cm、重さ56.3gの砂岩を利用し、長軸の二辺の中央部を打ち欠き紐かけ部をつくり出す。3は長さ7.6cm、幅3.2cm、厚さ2.7cm、重さ77.2gの花崗岩系の川原石を利用し、長軸の三辺の中央よりやや片寄って打ち欠き部分がある。4は長さ8.3cm、幅3.9cm、厚さ1.5cm、重さ73.1gの花崗岩系の川原石を利用し、長軸の一辺の中央部に打ち欠き部がみられる。5は長さ9.6cm、幅3.3cm、厚さ1.5cm、重さ89.7gの花崗岩系の川原石を利用し長軸の一辺の中央部分に打ち欠き部分がある。6は長さ8.1cm、幅4.1cm、厚さ1.5cm、重さ92.8gの花崗岩の川原石を利用する。人為的加工はないが長軸の一辺に自然のくびれ部分がある。7は長さ8.2cm、幅4.7cm、厚さ2.3cm、重さ161.0gの花崗岩系の川原石を利用する。長軸の二辺の中央部よりやや片寄って打ち欠きの部分がある。8は長さ7.9cm、幅3.9cm、厚さ2cm、重さ100.7gの花崗岩系の川原

石を利用する。人為的加工は認められないが一辺の中央よりやや片寄ってくびれがあり、紐かけに利用できる。9は長さ7.1cm、幅3.2cm、厚さ2.1cm、重さ76.6gの花崗岩の川原石を利用する。長軸の二辺、中央部よりやや片寄って打ち欠き部分がある。10は長さ9cm、幅3.6cm、厚さ1.7cm、重さ80.4gの片岩系の川原石を利用する。長軸の一辺の中央部に打ち欠き部分がある。11は長さ6.5cm、幅5cm、厚さ2.6cm、重さ101.7gの砂岩の川原石を利用する。長軸の一辺に打ち欠き部分と自然のくびれがある。12は長さ7.1cm、幅3cm、厚さ1.6cm、重さ57.1gの片岩系の川原石を利用する。人為的な加工はみられないが、長軸の一辺の中央部よりやや片寄って自然のくびれがあり紐かけ部分として利用できる。13は長さ6.7cm、幅3cm、厚さ1.9cm、重さ41.4gの片岩系の川原石を利用する。長軸の一辺の中央部に打ち欠き部分がある。15は長さ7.4cm、幅4.7cm、厚さ2.3cm、重さ88.9gの片岩系の川原石を利用する。長軸の二辺の中央部に打ち欠き部分がある。

以上の石錘は最小41.4g、最大101.7g、平均82.6gとやや重さに幅があるが、対となるものはほぼ同じくらいの重さである。出土状況から対となるものを示せば、1-2、3-5、4-7、6-12、13-14、9-10、8-11の組み合せができる。

7. 第19号住居址(SC-19)

(1) 住居址 (Fig.20, 21)

B-0区北東隅に検出した住居址である。SC-18、SC-20、SC-25との重複関係があり、いずれの住居址にも切られ、この中では最も古い住居址である。

北東側壁長4.45m、南西側壁長4.75m、南東側壁長3.7m、北西側壁長3.45mの南東に長軸をとる長方形プランを有する。壁の現存高は20cm~45cmであるが、重複が激しいため他の住居址によって破壊される部分が多い。

南東・北西壁にそって削り出しのベッド状遺構が存在する。南東側のベッド状遺構は南西壁にそって張り出し部がありL字形をなす。幅1m~1.2m、張り出し部は0.4m×0.45mである。ベッド状遺構の高さは15cm前後である。北西側のベッド状遺構は幅1.07m~1.3m、高さは南東側と比較し低く5cm前後である。いずれも地山削り出しである。

壁に沿って周溝がめぐるが、部分的に欠落するところがある。周溝は幅10cm前後で、深さ5cm前後である。この周溝はSC-13等にみられた板材を壁に沿ってたてたものではなく、後述するようにカヤ等をめぐらしたものであることは炭化物の遺存からわかる。

炉址は住居址のほぼ中央にある。50cm×60cmの円形の浅い(0.7cm)皿状の凹みを持った地床である。地床は赤く焼けたまっている。炉内には焼土、炭、灰が充填している。炉を中心として60cm×60cmの範囲で炭、灰層の拡がりがみられる。

南西壁の中央よりやや西に片寄ったところの壁に接して東西70cm×南北50cmの隅丸長方形ア

7. 第19号住居址 (SC-19)

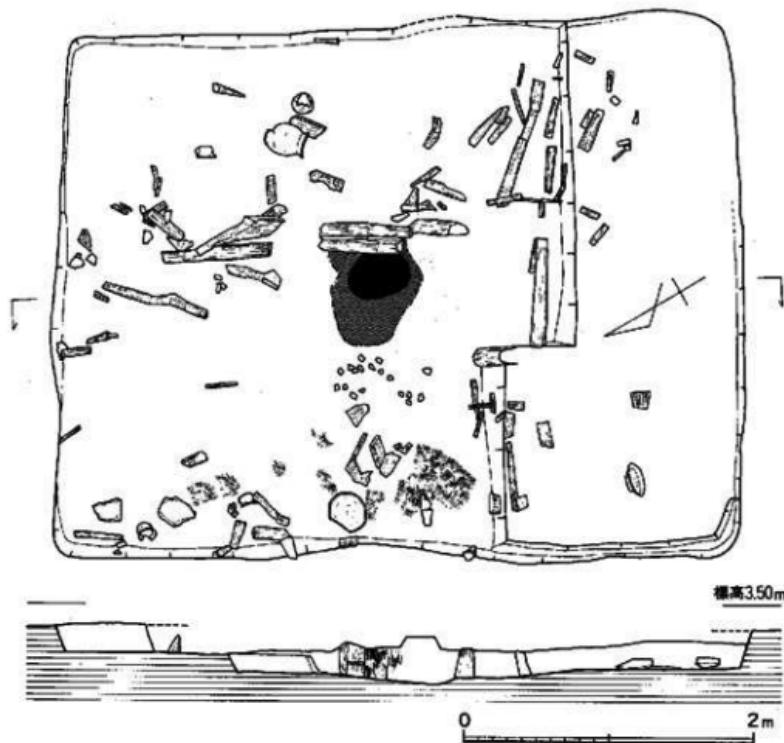


Fig. 20 第19号住居址 (SC-19) 遺物出土状況

ランで深さ10cmの掘り込み部があり、他例よりみて出入口の可能性がある。

床面にはピットが10ヶ所ある。南東のベッド状構造に3ヶ所、ベッド間に挟まれた床面に7ヶ所ある。径20cm~35cm、深さ10cm~25cmである。柱痕跡は検出できなかったが、ピットの状態、配置からみて、炉を挟んで長軸に平行して対する2個のピットが主柱穴と考えができる。

以上が本住居址の遺構面からみた住居址の説明であるが、この住居址は幸いにも火災にあったと考えられ、竪穴全域が炭化材、炭化物、焼土、灰によっておおわれていて、建築材等の上屋の状態を推測できる資料を記録することができた。以下、遺物の出土状況から家屋部分を考えてみる。(Fig. 20)

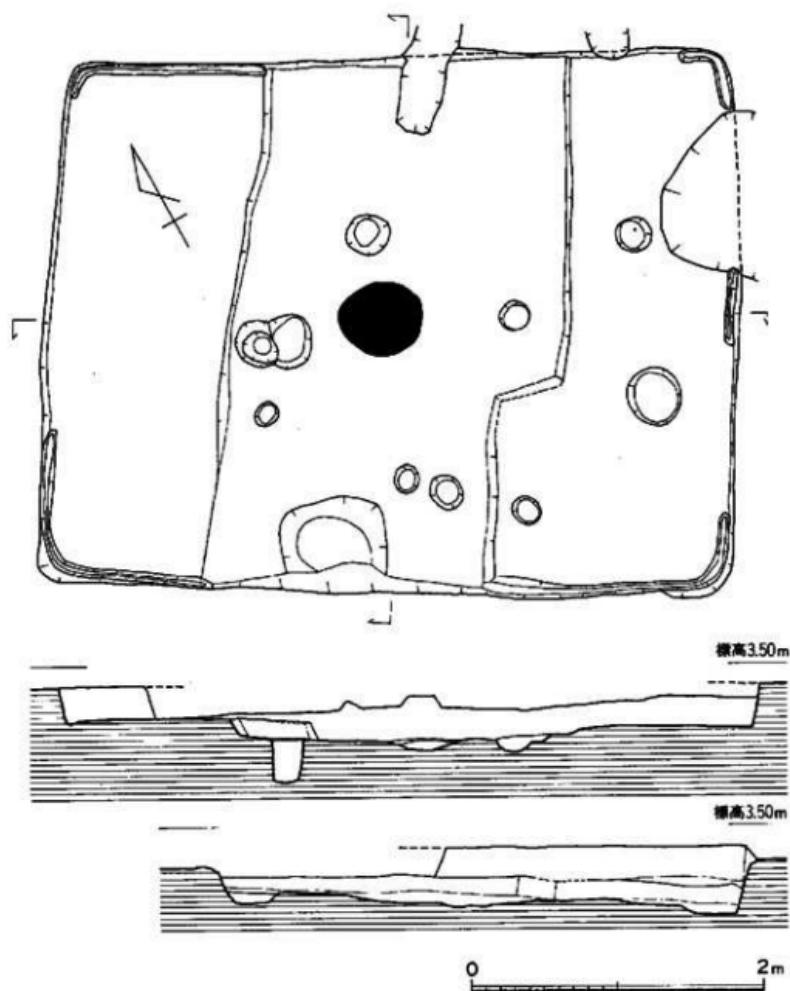


Fig. 21 第19号住居址 (SC-19) 実測図

火災の全般的な状況をその遺存物から考えれば最も火を強く受けた部分は炉の周辺と南東壁にそった出入口と考えた隅丸長方形の掘込み部とその周囲の壁の部分で、床、壁面まで焼土となり赤く変色していた。この状況は火災発生が炉を原因としており、以後の火の勢いは出入

口と考える部分にふき出したと想定することができ、またたく間に焼け落ちたものであろう。炭化物、炭化材の間に介在する地山を中心とする純粋な砂、土は消化作業として投げ込まれ、より炭化物の遺存状態を良くしたものであろう。

床面は通常の住居址のように固くしまった土間の床面の状態は示さず、普通の地山と何ら変化はない。このことは床に何らかの施設、あるいは敷物の存在が想定できることである。今回はその現物を具体的には把握したと言えないが、炭化建築材の下やそれを覆うかたちで、カヤ、ワラが幾重にも存在した。このうちの大部分は屋根にふいたものが焼け落ちたと考えができるが、原位置と考える土器の下や石の下まで炭化物を認めるので、カヤ、ワラの一部が床に敷かれていたと考えることができる。

壁面は周溝の存在である程度はその構造が明確にできたが、本住居址では、その具体的な姿をみることができた。出入口部と考える壁が特に焼けていることは前述したが、この部分が最もその姿をとどめている部所である。壁は先ず、周溝内にカヤを幾重にも立て、それをとめる工法として、杭を一定間隔（この部分では40cm、80cmの間隔）で打ち込み、それに横棒をわたして固定する方法がとられている。そして固定したカヤの上にさらに粘土を張って一種の土壁としたものである。この手法は板材のみによる壁の構築と異り、カヤとカヤの間にできる空間に空気を保つことができ、保温率、温度の変化により効率的であったと考えられる。

屋根の構造は炭化した建築材の出土状況より容易に想像できる。竪穴の中央部、炉の北側に竪穴長軸線2本の主柱穴に平行して走る数本の炭化材が2m以上にわたって遺存しているが、これは棟木が落ち込んだものとみることができ、それに直交する形で多くの炭化材が認められる。この材は屋根の垂木とみられる。この材が特に多いのは住居址の東側コーナー付近であり、これは前述の火災状況とも一致する。これら炭化した建築材の遺存状況からは切妻の屋根が想定できる。屋根をふいた材は前述したように住居址全面に厚く残るカヤ、ワラの類であったことは疑いない。

(2) 遺物 (Fig. 22)

遺物出土状況 (Fig. 20)

前節でのべたごとく、本住居址は火災住居であった。しかし、炭化材等の自然遺物は別として、人工遺物はきわめて少なかった。土師器は、壺2個体、高円1個体、壺1個体、小形丸底壺2個体の計6個体が完形あるいはそれに近い状態で遺存していた。各個体の出土位置は高環が南東側ベッド状遺構上に置かれ、壺は出入口と考える掘り込み中に底部がすわっていたが胴上半部より上は屋根の倒壊に伴い破壊されたものと推定され、破片が周囲に散乱していた。この破片中には壺1個体も含まれる。炉の北側、北西側ベッド状遺構の落ちぎわに壺、小形丸底壺各1個が横たわっていた。また、住居址北西コーナー付近に小形丸底壺1個体があった。ただし、小形丸底壺は盗難にあい粉失してしまった。

土師器 (Fig. 22)

図示できるのは甕2個、高环1個、壺1個の4個体である。

1は複形土器の完形品である。器形は小さな平底から立ち上り、長胴の体部に外反する短い口縁部を付するもので、九州の土師器にはない器形である。口径16cm、頸部径12.9cm、胴部最大径は胴中央部にあり20.1cm、底部径4.3cmで中央部が径2cm、0.2cmほど凹みあげ底をなす。土器の整形にあたっては底部および胴下半部と胴下半より上半部さらに口縁部という三段階の工程が読みとれる。まず底部、胴下半の整形では小さな平底に高さ5cm前後の体部をつくり、右あがりの平行タタキ目を底部を上にして右まわりに施し、器形の基礎部分をつくる。この際内面の調整も不定方向のハケ目調整で行う。ついでその上部に体部をつくり、最初のタタキ目と同様の平行タタキ目を水平になるように右まわりに整形、調整する。内面はナデ調整、体部の整形終了後に粘土帯の積みあげによって口縁部をつくる。粘土帯の幅は1cm前後で、その痕跡が明瞭に残っている。口縁部の内外面は共に横ナデ調整である。胴中位にススの付着が著しい。胎土には石英、長石、雲母、赤色鉱物、金雲母、黒色鉱物の砂粒を混入しているが良質。焼成

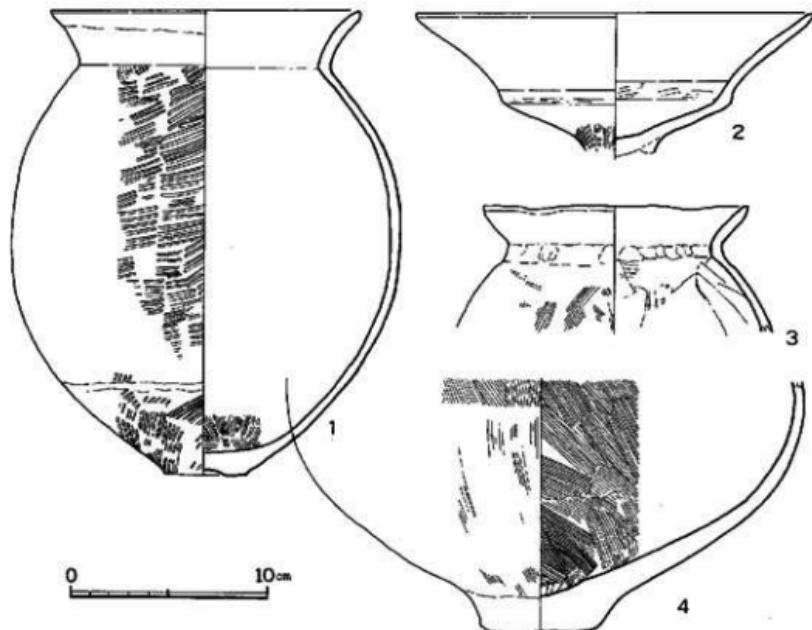


Fig. 22 第19号住居址 (SC-19) 出土遺物実測図

7. 第19号住居址(SC-19)

は良好で、色調は外面が赤褐色～黒灰色、内面が赤褐色である。胎土の質、器形には在地的でない要素が強く認められる。2は高环で脚部を失う。器形は环部中位で屈曲し、ややたちあがり、次に大きく外側に開くもので、脚は下方に拡がるものであろう。脚部との接合は後からの粘土の充填によるものである。口径20.5cm、屈曲部径11.6cm、环部高7cm。外面は縦方向の細いハケ目調整後にヘラ研磨したもので、脚部との接合部、环部のたちあがり部にわずかにハケ目が残る。内面は横方向の丁寧なヘラ磨き調整である。胎土には石英、長石、雲母の砂粒を含むが良質、焼成は良好で、色調は内外面共に赤褐色をなす。口縁の一部に黒斑がみられる。3は變形土器の口縁部、くの字に屈曲する口縁を有するが、整形は粗雑である。復原口径13.8cm、外面は指による荒い調整後に部分的に縦方向のハケ目調整を施す。内面は口縁部が横ナデ調整、胴部は荒々しいヘラ削りを施す。胎土には石英、長石、雲母、赤色鉱物、金雲母の砂粒を含むが良質、焼成堅致、色調は内外面共赤褐色をなす。4は大形の壺形上器の胴下半部である。器形は円筒状に突出した平底の底部から大きく外方へ張り出し球形をなす胴部と考えられる。胴部最大径は26.5cm、底部径6cm、高さ約2m、外面は上半部が縦方向の細いハケ目調整を丁寧に施し、下半部から底部にかけては縦方向のヘラ磨きで消している。内面は外面と同様の細いハケ目を左あがりの斜位に左まわりに丁寧に施す。底部と胴下半部には石英、長石、赤色鉱物の砂粒を含むが良質である。焼成は良好で、色調は内外面共に赤褐色である。底部近くに黒斑がある。

8. 第20号住居址(SC-20)

(1) 住居址(Fig. 23)

C-0,-1区の南西部隅において検出した住居址である。SC-19、SC-21、SC-25との重複関係がありSC-25とほとんど重なりあう。SC-19より新しく、SC-21、SC-25より古い。北東側壁長5.05m、南西側壁長5.3m、南東側壁長4.15m、北西侧壁長3.75mの南東に長軸をとる長方形プランの住居址である。壁高は削平が著しく5cm～20cmである。

南東側壁に沿ってベッド状遺構が存在する。ベッド状遺構は幅0.9m～1.1mで、高さ15cm、地山を削り出してつくったものである。

周溝はベッド状遺構の部分をはずして、他を全周する。南西側壁部では周溝は幅20cm、深さ10cm前後、北西側壁、北東側壁部では、やや大きくなり幅20cm～50cm間隔で幅20cm、深さ10cm前後のピットが6個めぐり、北東側壁周溝ではほぼ中央に20cmの間隔で2個のピットがある。前述したSC-19の杭の穴であるか、建築にかかわるものかは明らかにできない。

南西側壁のほぼ中央部には95cm×95cm、深さ65cmの掘り込みがあり、他例よりみて出入口とすることができます。この中より土師器の變形土器1個体が出土している。

炉はほぼ住居址の中央部に位置し、50cmの円形で、深さ5cmの浅い皿状の凹みをなす地床が

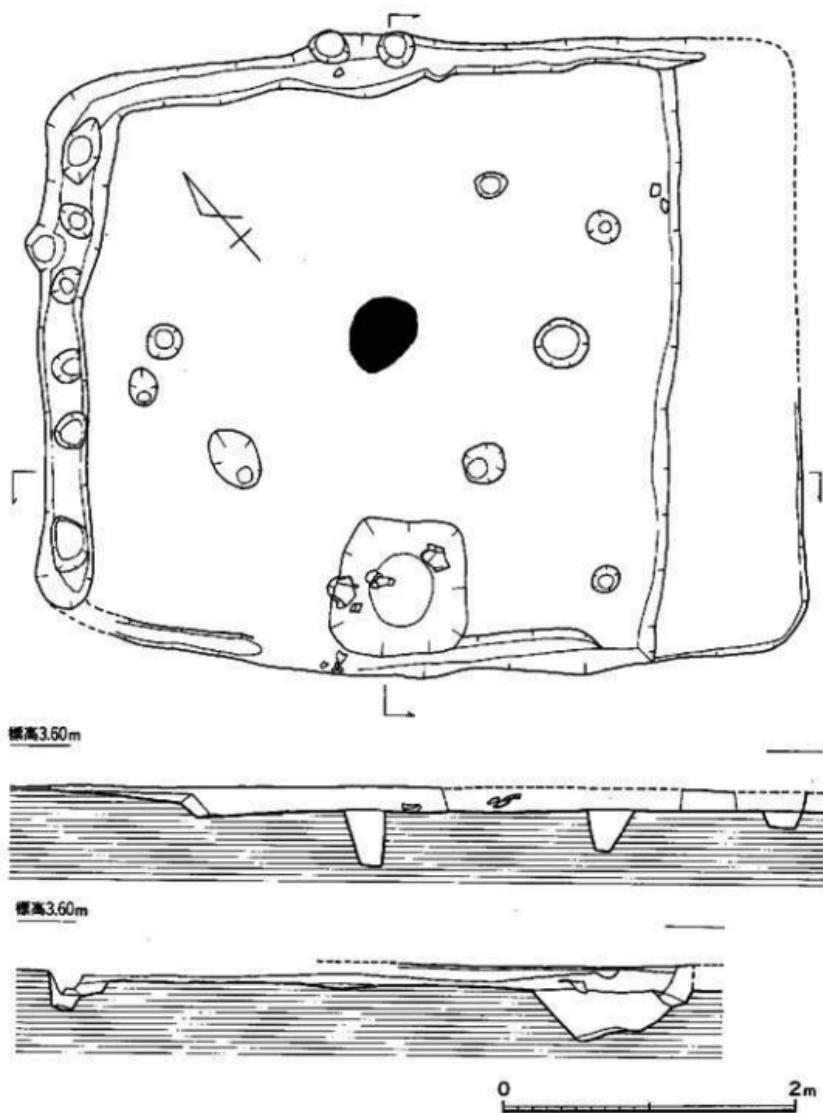


Fig.23 第20号住居址 (S C -20) 実測図

8. 第20号住居址 (S C -20)

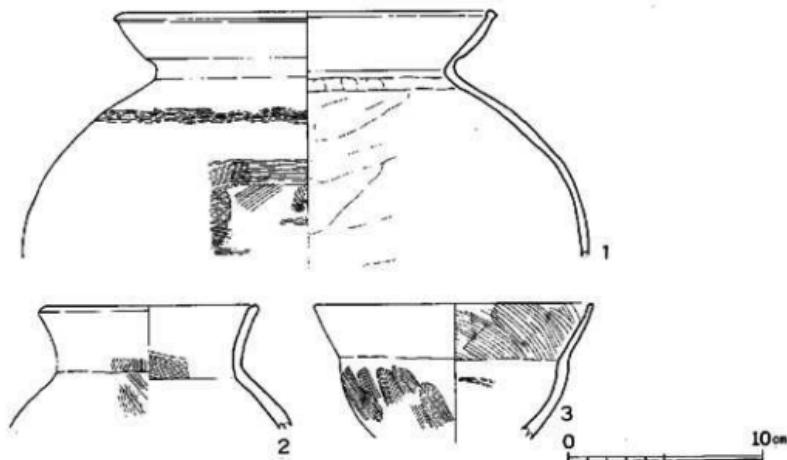


Fig. 24 第20号住居址 (S C -20) 出土遺物実測図

である。炉底は良く焼けている。炉内は焼土、炭、灰がつまり、炉を中心として炭、灰層が拡がる。

ピットはベッド状遺構外の床面に 8 個あり、いずれも径10cm~40cmで深さ10cm~40cmである。このうちこの住居址の主柱穴と考えるのは南東方向で炉をはさんで対する 2 本で、補助的柱穴として、主柱穴に平行し、出入口部と考える方形掘込みに近い対する 2 個の柱穴がある。

(2) 遺物 (Fig. 24)

S C -25とはほとんどが重複するため出土遺物は極めて少い、図示できるのは甕、壺、瓶の 3 個体である。

1 は變形土器で復原口径19.8cm、胴下半部を尖うが球形の胴部にやや同傾しながらたちあがる口縁で腹部にたちあがりがある布留式の甕である。肩部に横目波状文をめぐらす。外面は横方向のハケ目調整、口縁部は内外面共に横ナデ調整、内面は頸部よりやや下って横方向のヘラ削り調査である。胎土には石英、長石、雲母、赤色鉱物、金雲母の砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は内外面共白灰色をなす。2 は直口壺で復原口径11.4cm、口縁部はやや外反しながらたちあがる。保存状態が悪く器面調整は明確にできないが、外面は縦位のハケ目調整、内面は口縁部が横位、胴部が斜位のハケ目調整である。胎土には石英、長石、雲母の砂粒を含む。焼成は良好、色調は内外面共に赤褐色をなす。3 は瓶で胴部で屈曲し、内傾しながらたちあがり口縁となる。口径14.5cm、外面は縦位のハケ目調整後、横ナデ調整。内面は口縁部が斜位の荒いハケ目調整、体部はヘラ研磨で調整する。胎土には石英、長石の砂粒を若干含む。焼成

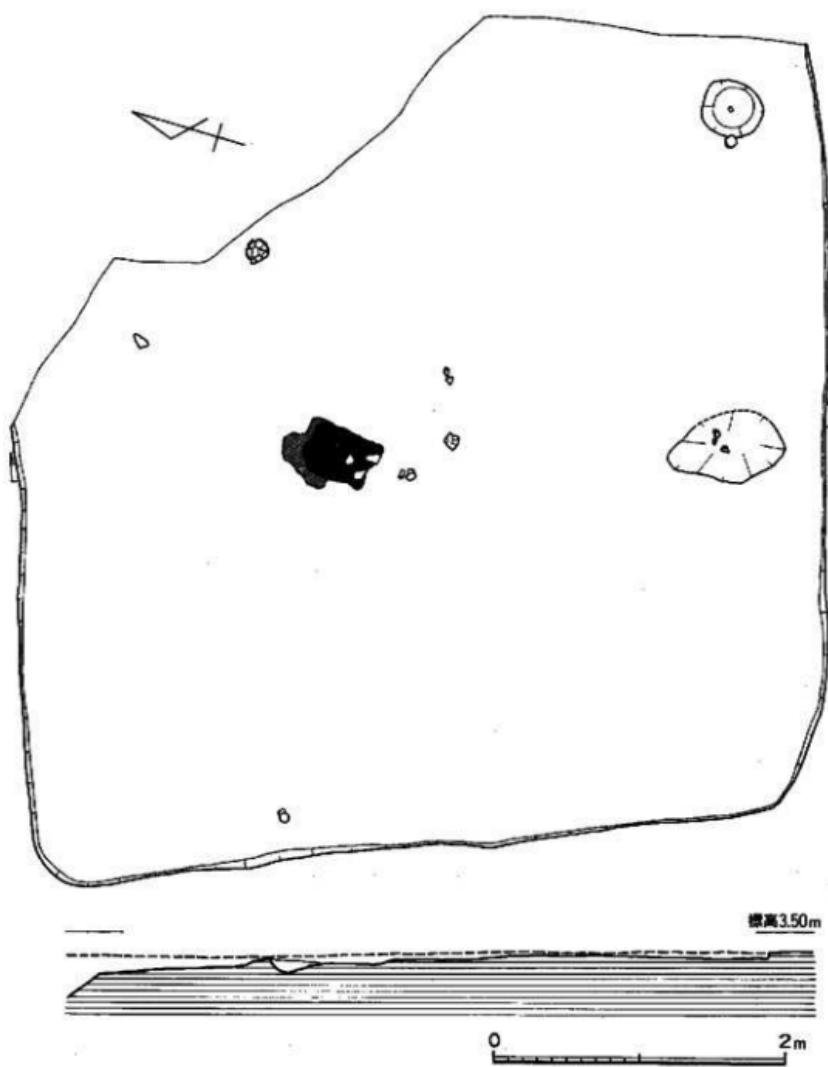


Fig.25 第21号住居址(SC-21)実測図

9. 第21号住居址 (SC-21)

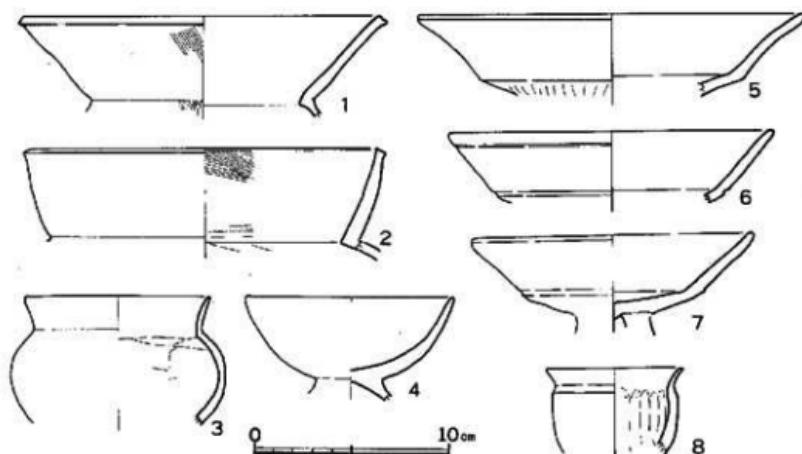


Fig. 26 第21号住居址 (SC-21) 出土遺物実測図

は堅致、色調は内外面共に黄褐色、口縁部に黒斑がある。

9. 第21号住居址 (SC-21)

(1) 住居址 (Fig. 25)

C-0、-1区の西側において検出した住居址である。SC-20、SC-25との重複関係があり、最も新しい。北東部はSD-02により切られる。側壁長が判明するのは西側壁長の5.3mだけである。南側壁は一部近世の暗渠によって切断されるが、その延長に住居址の壁を見出せないので5.3m前後の長さと考えられ、本住居址は方形プランをなすと推測できる。壁は削平され残りが悪く5cm前後である。

住居址の中央部よりやや北側に片寄って炉がある。炉は70cm×40cmの楕円形プランで、深さ10cmの浅い皿状の凹みとなり、周辺は焼土で炉床はあまり焼けていない。炉は焼上、炭、灰によって埋っていた。炉の周囲に若干の土器が検出されているが、いずれも破片である。

床面には南壁にそって2個のピットを検出したが、柱穴とは考え難く、本住居址の主柱穴の位置と数は明らかにできなかった。

(2) 遺物 (Fig. 26)

いずれも小破片で図示できるもの8個体がある。1、2は壺口縁である。1は復原口径19cm、広口壺で口縁は強く外反する。保存状態が悪く調整は不明な点が多いが、外面は斜位のハケ目調整、2は復原口径18.6cm、直口壺で口縁は内湾気味にたちあがる。保存状態が悪く器面調整は明瞭ではないが口縁部内面は斜位のハケ目調整、頸部はヘラ削り。1、2共に胎土には石英、

長石、雲母、赤色鉱物の砂粒を含むが良質、焼成は良好、色調は内外面共に黄褐色をなす。3は小形丸底壺、復原口径9.6cm、胴部最大径11cm、内外面共にスリップが剥落し、調整は不明。胎土には石英、長石、雲母の砂粒を含み、焼成は良好、色調は内外面共に赤褐色をなす。4は小形の脚付椀である。復原口径11cm、楕部の器高4.3cm、脚部は一部を残すのみであるが、あまり高くならず、外へ開くものであろう。内外面共に保存状態が悪く調整痕は不明。胎土には石英、長石、赤色鉱物の砂粒を含むが良質、焼成はややあまい。色調は内外面共に赤褐色をなす。5~7は高环の坏部である。坏部が体部途中で屈曲したちあがり口縁部を形成するものであるが6のように屈曲部に沈線を入れるものもある。5は復原口径20.2cm、屈曲部径13.6cm、内外面は横方向の研磨によって調整する。6は復原口径16.8cm、屈曲部径15.6cm、内外面共横ナデ調整である。7は復原口径14.6cm、屈曲部径9.4cm、屈曲部はあまり明瞭でない。坏部と脚部の接合は粘土をつめる手法をとっている。

10. 第22号住居址 (SC-22)

(1) 住居址 (Fig. 27)

B-(-1)区北東隅に検出した住居址である。SC-18、SC-19、SC-26と重複関係にあり、SC-19、SC-26より新しく、SC-18より古い。北側壁長4.1m、南側壁長3.6m、東側壁長4.4m、西側壁長4.25mの長軸を南北にとる長方形プランを有する。壁の高さ20cmであるが、元々はさらに深いものであったことは推測に難くない。北側壁中央部は試掘において破壊されるが、周溝は遺存した。

北側壁にそってベッド状遺構がある。ベッド状遺構は幅0.9m、高さ10cm、地山削出しである。周溝は東側壁を除く三方の側壁に沿ってめぐる。周溝は幅10cm~15cm、深さ10cm前後である。南側壁にそった周溝では、3ヵ所にピットがある。

東壁の中央部には1m×0.8m、深さ15cmの長方形プランの掘り込みがある。他の住居址と同様に出入口を示すものと考えられる。小形丸底壺、砥石1点の出土がある。

炉は住居址のほぼ中央に位置する。径50cmの円形で、深さ7cmの浅い皿状の凹みで、床は赤く焼けた焼土、中には焼土塊、炭、灰が充填している。炉のまわりは径70cm前後で炭灰層の括がりがみられる。炉を中心とした床面のかなりの部分は粘土をはった貼り床である。

床面にはピット6個を検出した。径10cm~40cmであるが、深さは比較的浅く、柱穴としての機能は認めがたく、本住居址の主柱穴は不明であった。

(2) 遺物 (Fig. 28)

出土遺物は少く、土師器と砥石があるのにである。土師器は5個体が図示でき、砥石は3個ある。

1は小形丸底壺で完形品である。口径11cm、器高8.1cm、胴部最大径7.7cm、口縁は大きくなり

10. 第22号住居址(SC-22)

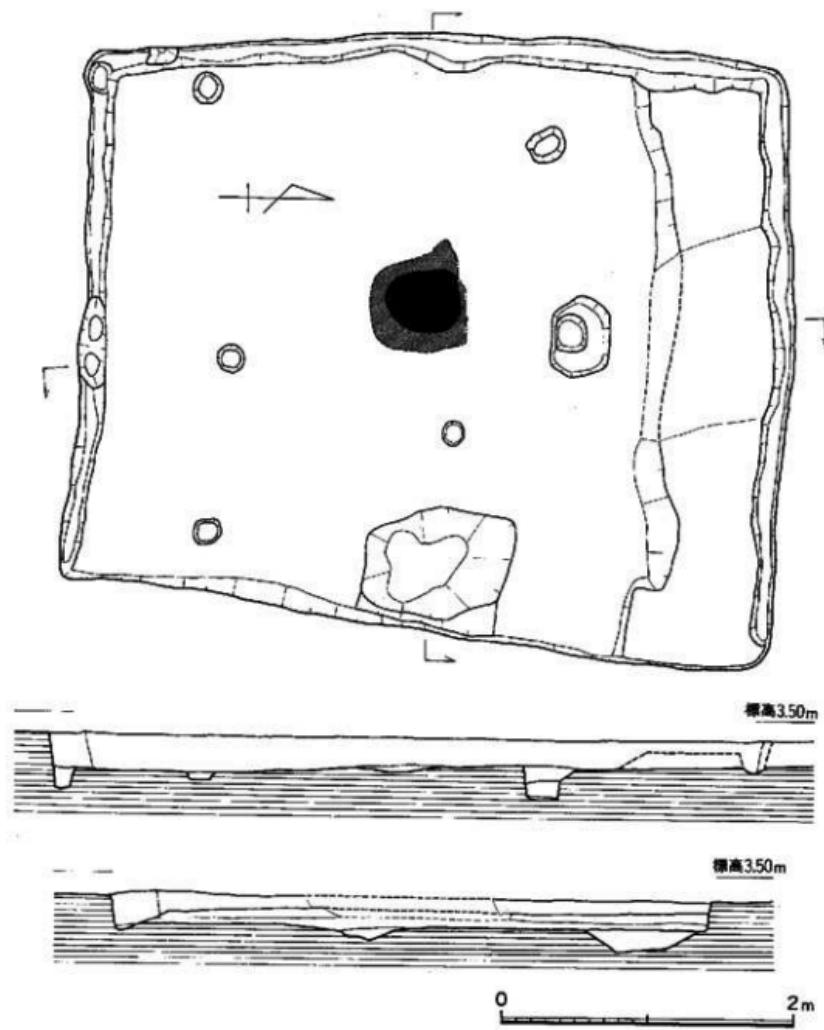


Fig. 27 第22号住居址(SC-22) 実測図

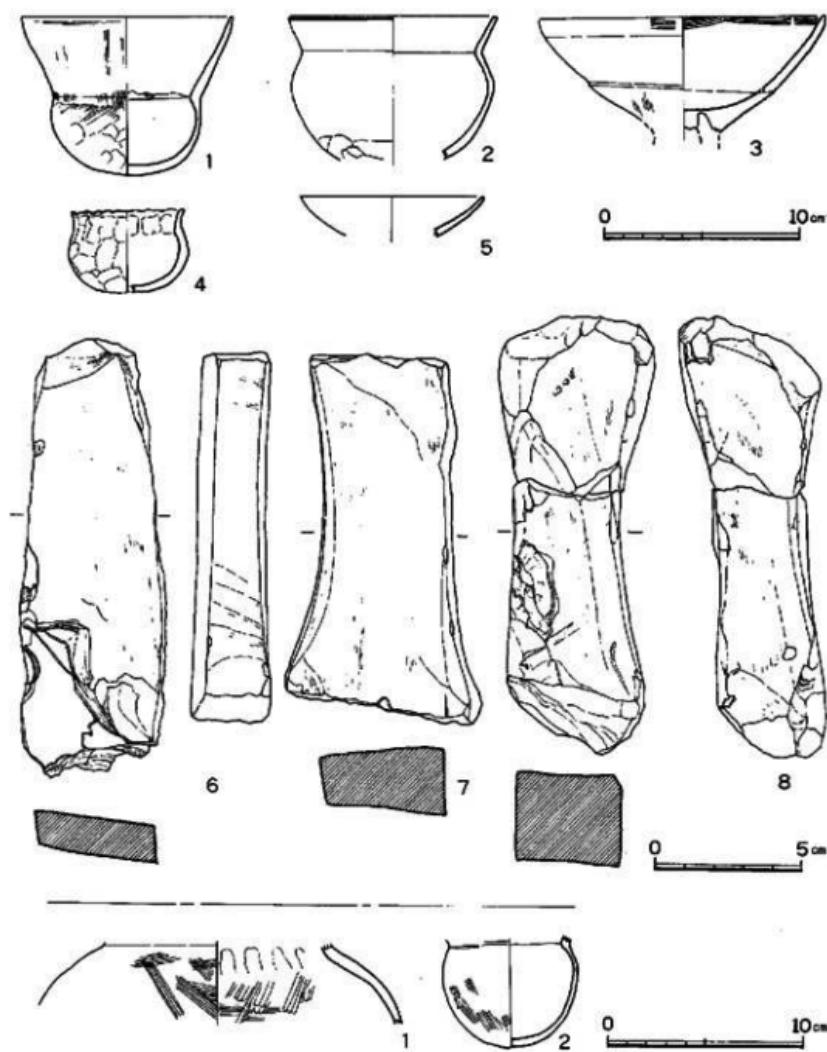


Fig.28 第22・26号住居址 (S C - 22-26) 出土遺物実測図

10. 第22号住居址 (SC-22)

ろがり、口縁部でやや内傾する。頸部は外面ではゆるやかであるが、内面では稜線が明瞭である。胴下半～底部はヘラ削り、上半はハケ目調整、頸部には細い刷毛目痕が残る。口縁部は縦方向のハケ目調整後に横ナデによって消す。内部は体部がヘラ削り状の横ナデ、口縁は横方向のミガキ、胎土は石英、長石の粒子を含むが精製されている。焼成は良好、色調は赤褐色、一部土質の関係で黄褐色をなす部分もある。2は復原口径10.8cm、頸部径9.3cm、胴部最大径10.5cmでやや体部上部にある。推定器高8cm、胎土、焼成、色調は1と同じ、胴部に黒斑がある。胴部下半はヘラ削りによる調整、胴部上半はハケ目調整の上をナデしている。内面は保存状態が悪く、ヘラ削りによるものであるか明瞭にしがたい。頸部の稜線は鋭い。器壁は薄く0.4cm前後。3は高壺である。壺部径14.8cm、壺部高約6cm、壺部の約2/3を残す破片で脚部は接合部からない。杯部の屈曲部はゆるい段がつくが明瞭でない。屈曲部は粘土接合面で、擬口縁状をなすのは通例どうりである。口縁端部は丸くおさめ脚部との接合部はヘソがある。外面の調整は保存状態が良好でないため判然としないが、縦のハケ目の上を横ミガキしている。丁寧でない。内面は横のハケ目の上をナデ消すが、口縁端部はハケ目が残る。胎土にはやや多くの石英、長石の粒子を含み、1、5と比較し悪い。焼成は良好、赤褐色をなす。口縁の一部に黒斑が残る。4は手づくね土器で約半分が現存する。復原口径5.8cm、器高4.2cm、口縁は指でつまみ出し、口縁端には粘土のひび割れが刻み状に残る。外面は指による調整のため凹凸が著しく指頭痕が各所に残っている。内面の調整は丁寧で指によるナデで凹凸はみられない。胎土には若干の砂粒（石英、長石）を含むが良質。焼成は堅致で、口縁や内底部は灰青色に変色している。外面は赤褐色～青灰色、内面は黒色～赤灰色である。5は壺で復原口径9.4cm、保存状態が悪く、調整等不明。胎土には多量の石英、長石粒を含む、焼成良好、黄赤褐色をなす。

6、7、8は砥石である。6、7は壁の横から重ね合せて出土した（P.L.7-②）。8は出入口の土塗の出土である。6は頁岩製で2面に使用痕がある。7は砂岩製で4面に使用痕があり、かなり使いこまれている。8は2片に分れていたが接合できる。頁岩製で4面に使用痕があり、かなり使いこまれている。7が中砥、6、8は仕上げ砥であるが8はよりきめが細かい。

11. 第23号住居址 (SC-23)

(1) 住居址 (Fig. 29)

C-0区中央部に検出した。SC-12と重複し、SC-12より新しい。南側は農業用水路によって破壊された北側コーナーを含む一部を検出したにとどまる。現存で北東側壁長3.1m、南西側壁長3.9m、壁高20cm、平面プランは不明。床面に柱穴1個がある。周溝はめぐらない。

(2) 遺物 (Fig. 30)

遺物量は少く、器形の判明するのは1点のみで、他は胴部破片のみである。

1は二重口縁の壺形上器で胴部以下を失う。口縁部の形態は、頸部から直立し短い首をつく

り出し、さらに外へひろがり、鋭い棱線をもって屈曲し、外反する口縁部へと移行する典型的な器形である。内外面の調整は保存状態が良好でないために明瞭ではないが、横ナデ調整である。胎土には石英、長石、雲母の砂粒を含む。焼成は良好、色調は赤黄色をなす。復原口径20.3cm、頸部径11cmをはかる。2、3は變形土器の肩部破片である。共に右あがりの細い平行タグ目を施す。内面は頸部よりやや下ってヘラ削り調整。器壁は薄い。2は石英、長石、金雲母、赤色鉱物の砂粒を含む。3は石英、長石、赤色鉱物の砂粒を含むが特に赤色鉱物の量が多い。焼成は共に良好、色調は2が赤褐色、3が赤黄色をなす。

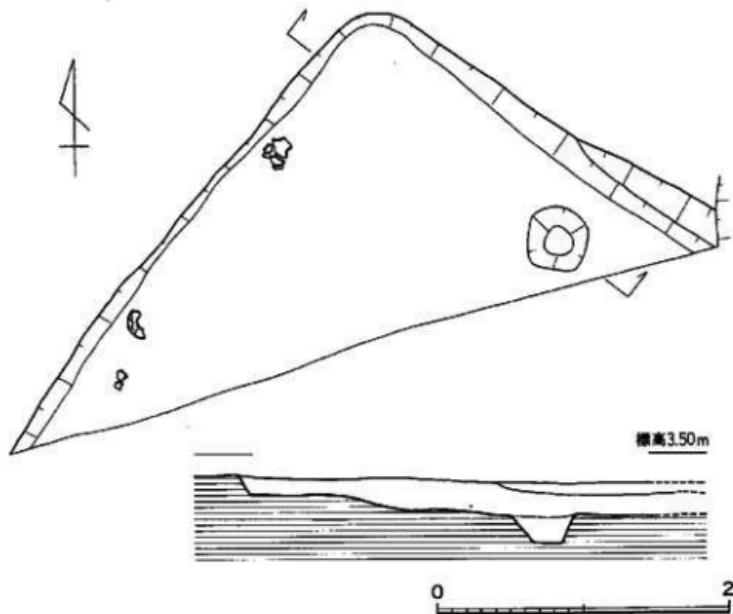


Fig. 29 第23号住居址(SC-23)実測図

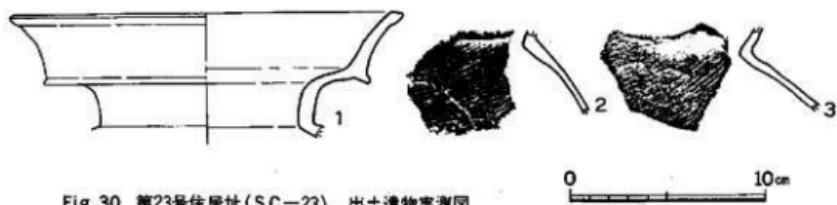


Fig. 30 第23号住居址(SC-23)出土遺物実測図

12. 第24号住居址 (SC-24)

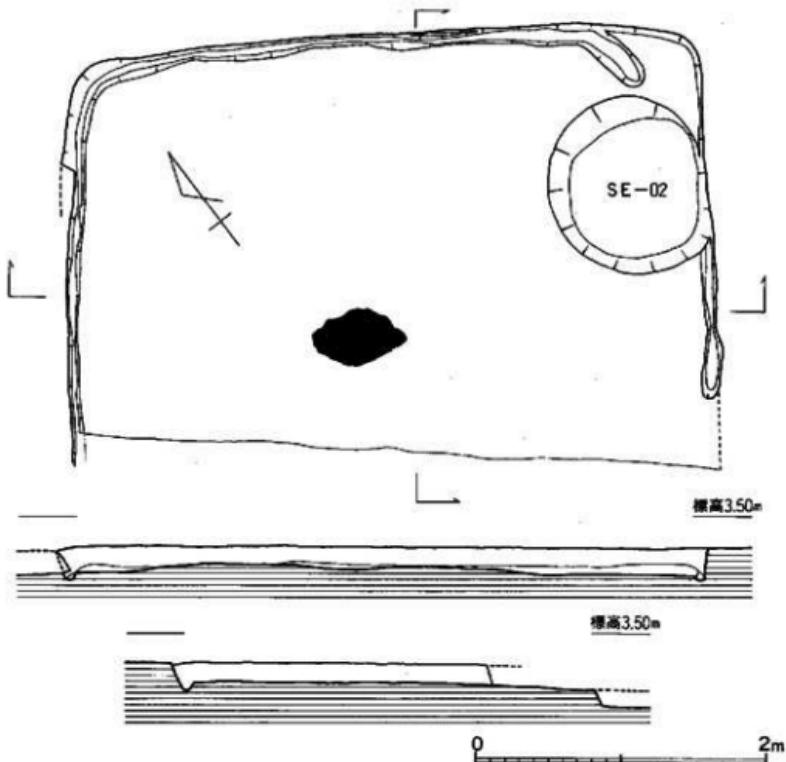


Fig.31 第24号住居址 (SC-24) 実測図

12. 第24号住居址 (SC-24)

(1) 住居址 (Fig. 31)

C-1区中央部に検出した。SD-02によって南西部の約半分を失う。また、この住居址が廃絶した後、SE-02が掘り込まれていて、かなり時期的な限定ができる。

北東側壁長4.2m、南東側壁現存長2.4m、北西側壁現存長2.7mであるが、平面プランは不明。炉が住居址の中心にあると仮定すれば、4m前後の方形プランが考えられる。壁高は20cm、壁にそって周溝がめぐる。周溝の幅は10cm前後で、深さ5cm、炉は40cm×60mの楕円形で浅い皿状の凹みをもつ。

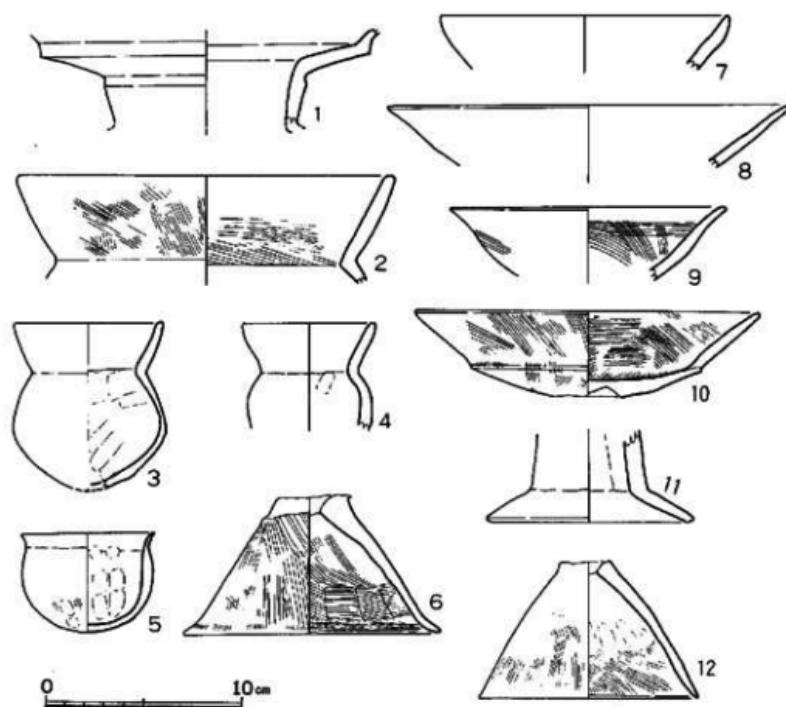


Fig. 32 第24号住居址 (SC-24) 出土遺物実測図

(2) 遺物 (Fig. 32)

図示できるものの12個体がある。1は二重口縁の壺、口縁と胴部を失う。胎土に石英、長石、赤色鉱物の砂粒を多量に含む。焼成は良くない。色調は外側が赤褐色、内側黄褐色である。2は斐形土器口縁部破片、復原径19.5cm、外側に継ぎ位のハケ目調整、口縁部内側は横位のハケ目調整、胴部は浅いヘラ削り調整、胎土には石英、長石、赤色鉱物の砂粒を含む。焼成は良好で白黄色をなす。3、4は小形丸底壺、3は復原口径7.6cm、復原器高8.6cm、胴部最大径は7.8cmで口縁部径とかわらない。外側はヘラ研磨、体部内面横方向のヘラ削溝調整、胴部に黒斑がある。4は復原口径6.8cm、共に胎土に石英、長石、雲母の砂粒を含む。焼成は良好で、色調は4の外側が黒灰色で他は黄褐色をなす。5は口縁部がわずかにつく小形土器で復原口径6.8cm。器高5cm。手づくね土器で頸部および内側に指頭痕の調整が残る。外底部はヘラ削り調整。胎土には石英、長石、雲母の砂粒を含む、焼成は良好で黒灰色をなす。7は壺または椀の口縁部で復

12. 第24号住居址 (SC-24)

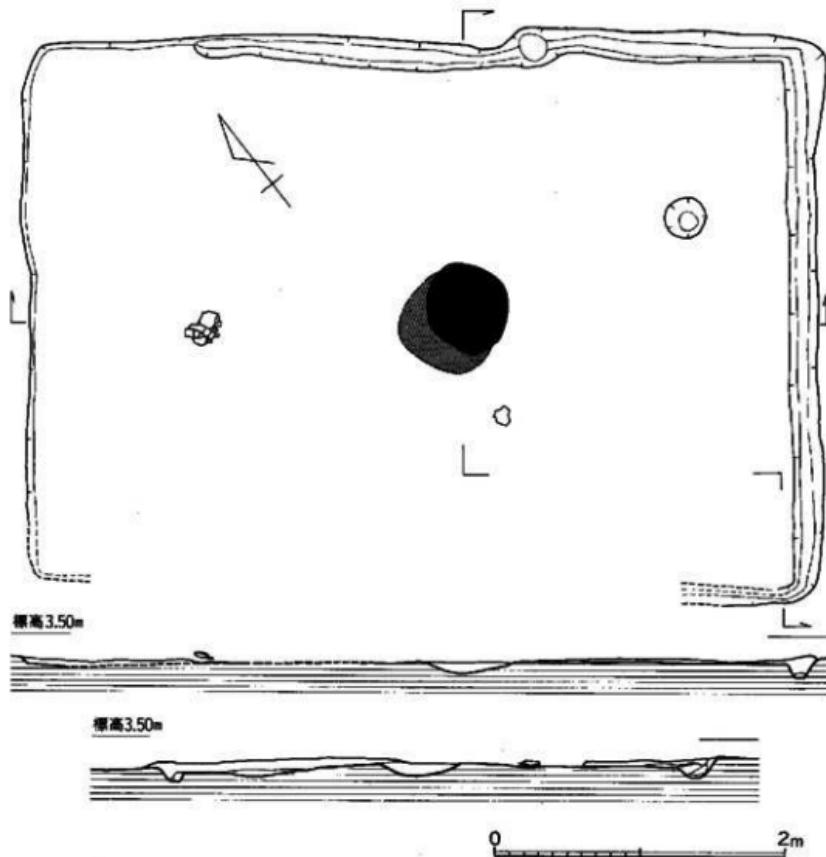


Fig. 33 第25号住居址 (SC-25) 実測図

原口径14.8cm、8~11は高坏で、11は脚部破片である。復原口径は8が20.8cm、9が14cm、10が17.7cmである。8は内外面共ナデ調整。9は外面が横ナデ調整、内面が横、斜位のハケ目調整。10は屈曲部、脚部との接合面が明瞭に残る。口縁部外面は縦位のハケ目調整。内面は横、斜位のハケ目調整。11は強い屈曲で広がる脚で、脚端径11.2cm、7~11は共に胎土に石英、長石、雲母の砂粒を含む。焼成は良好で色調は7が赤褐色、8が黄灰色、9~11は赤黄色をなす。6、12は器台の脚で共に受部を失っている。6は脚端径13.2cm、現存高7.1cm、脚端部がわずかに屈曲しひろがる。外面は縦位の細いハケ目調整、内面は斜、横位のハケ目調整を右まわりに施

す。胎土に石英、長石、金雲母、赤色鉱物の砂量を含むが良質。焼成は堅致で色調は赤褐色をなす。12は脚端径11.2cm、現存高7cm、外面は縦位のハケ目調整の上にナデ調整を施し、内面は斜位のハケ目調整。胎土に石英、長石、雲母の砂粒を含む。焼成は良好で白黄色をなす。

13. 第25号住居址 (SC-25)

(1) 住居址 (Fig. 33)

C-1区北西隅に検出した住居址で、SC-19、SC-20、SC-21と重複関係にあり、SC-19・20より新しく、SC-21より古いことを確認した。

北東壁長5.5m、南東壁長3.8m、北西壁長3.2m+α、南西壁は大部分を失うが、わずかに南コーナーが残っているので、平面プランが長方形であることは推測できる。壁高は削平が著しいため、わずか5cm前後が残るのみである。壁にそって周溝が掘り込まれる。周溝は幅20cm前後、深さ10cmで、南東壁、北東壁の大部分に認められるが、他では検出できなかった。

床面のほぼ中央に炉が存在する。炉は径60cm、深さ約10cmの浅い皿状をなす。炉内は焼土、灰、炭で埋っている。炉の西側20cmに灰、炭層のひろがりがある。

柱穴は径30cm、深さ20cmのピット1個を南東床面にかたよって検出したが、本住居址の主柱穴とは考えがたい。本住居址の主柱穴については不明である。

遺物は床面に密着して薄手の上師器甕破片が存在したが、胴部破片であるために図示できない。

14. 第26号住居址 (SC-26)

(1) 住居址

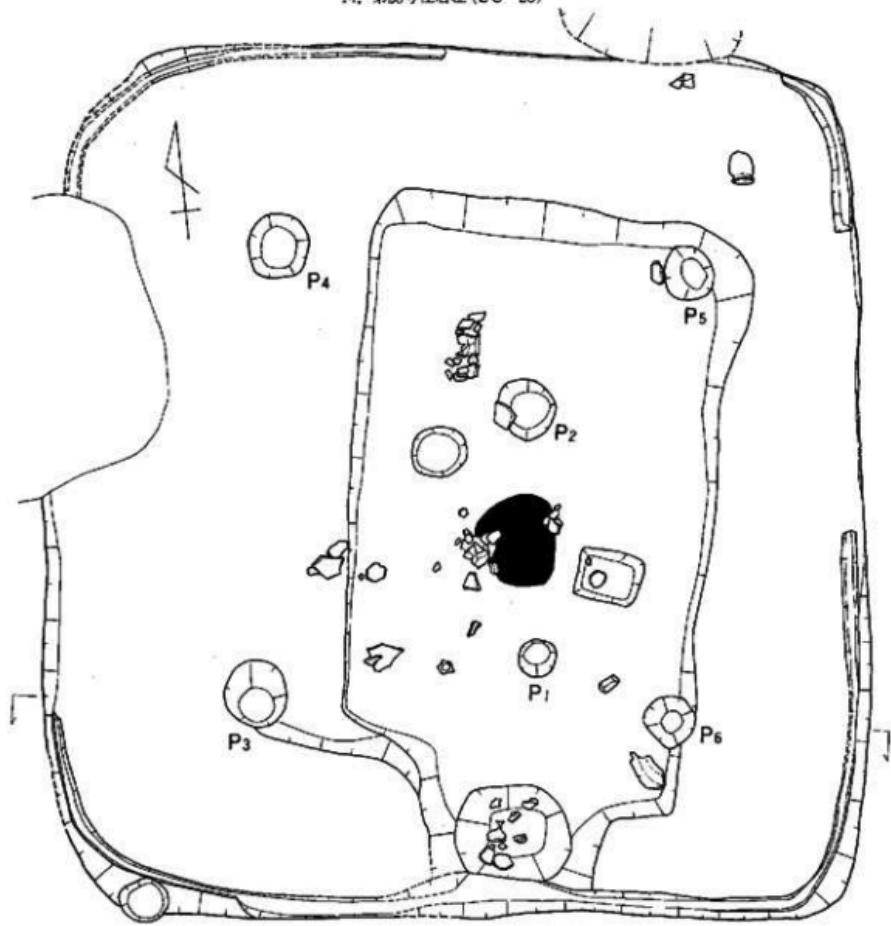
B-1区南東隅に検出した住居址である。SC-22と重複関係にあり、SC-22より古い。大部分をSC-22によって切られているが、3コーナーを完全に残すためプランは明らかにできる。

北東壁長3.9m、南西壁長4.5m、北西壁長3.7m、南東壁長3.5mの方形プランをなす。壁高20cmであるが床面の大部分を失い、炉、その他については不明である。

(2) 遺物 (Fig. 28-1, 2)

壺2点が図示できる。1は頸部から胴部にかけての破片で全形は明らかにできない。頸部径11.8cm。外面は斜位のハケ目調整で、その上にわずかにヘラ研磨を加える。内面は下半が横位のハケ目調整。上半部さらに縦位のハケ目調整を加え、頸部付近は指による調整。2は口縁部を欠損する小形丸底壺である。頸部径6.2cm、現存高5.7cm、口縁部は大きく外反し、胴部最大径より大きくなるものであろう。外面は胴下半部に縦位のハケ目調整が残るが大部分はヘラ研磨で消す。内面は丁寧なヘラナデ調整。1、2共に胎土には石英、長石、赤色鉱物の砂粒を若干含むが良質である。焼成は堅致、色調は1が黄褐色、2が赤褐色である。

14. 第26号住居址 (SC-26)



標高3.50m



Fig. 34 第27号住居址 (SC-27) 實測図

0

2m

15. 第27号住居址 (SC-27)

(1) 住居址 (Fig.34)

Z-0区、A-0区にわたって検出した住居址である。SC-32と重複関係にあり、SC-32を切っている。西側は一部、現代の攪乱を受けて破壊される。

北壁5.2m、南壁5.5m、東壁5.8m、西壁5.9mの隅丸方形の平面プランをなす。壁の現存高は約30cm。壁にそって周溝がめぐるが、部分的に検出できなかった所がある。周溝は幅10cm、深さ10cm前後である。南壁の中央部よりやや東に片寄って出入口になると想するビットがある。ビットは東西径80cm、南北径60cmの不整橢円形で、深さ35cm前後である。このビットをはさんでベッド状遺構がめぐるが、西壁にそったベッド状遺構は、一部2重の段があり拡張されたことがうかがえるが確証をつかむことはできなかった。南壁のベッド状遺構は東側が幅60cm、西側が120cmと出入口をはさんで大きな違いがある。東壁のベッド状遺構は幅1m～1.35m、高さ8cm前後、北壁のベッド状遺構は幅1.2m、高さ5cm前後、西壁のベッド状遺構は他と比較し特別で幅は他のそれの約2倍の2.1mをはかり、高さ6cm前後である。ベッド遺構はすべてが地山削り出しである。

炉はベッド状遺構に囲まれた床面のほぼ中央に位置し、径60cmの円形で、深さ10cmの浅い皿状の掘り込みがある。炉床は良く焼けている、炉内は焼土、炭、灰が充填する。

柱穴は炉をはさんだP₁とP₂の二本柱とP₃～P₆の四本柱が主柱穴であり、他の柱穴のあり方とは大きく異なる。P₁は径25cm、深さ43cm、P₂は径40cm、深さ37cm、P₃は径35cm、深さ50cm、P₄は径40cm、深さ56cm、P₅は径35cm、深さ60cm、P₆は径35cm、深さ55cmである。

炉の東側には45cm×35cmの長方形プランで深さ40cmの貯蔵穴状の掘り込みがある。

(2) 遺物 (Fig.35～38)

遺物出土状況

本住居址の遺物量は多い。遺物の出土状況としては床面密着土器と埋土中に存在する床面状の固い面をもつ凹みに密着する土器の二種がある。ここでは床面の出土状況についてみていく。

床面の遺物は完形品に近いものが多い。出土位置は炉を中心としたベッド状遺構に囲まれた床面に集中している。ベッド状遺構の上は北東のコーナーに近く、2の蝶形土器と22の高杯があるのみである。炉の横の貯蔵穴内より15の椀、出入口のビット内より19の脚付椀が出土している。本住居址では火災にあった痕跡はないが、遺物の出土状況は火災住居に近い状況を示している。なお、上層の土器にも完形品が多く、固くなつた皿状の床面との関連性がもとめられるが、いかなる理由によるものかは判断できなかった。

遺物 (Fig.35～38)

図示したものは55点で、土鍤1点、タコ壺2点の他は容器類で、瓶、壺、高杯、鉢、椀、脚

付梢、器台等がある。

床面出土は1、2、7、13、15、17、19、20、22の9点で他は上層の出土である。

1、2、7は甕形土器。1は口径14.4cm、器高18.5cm、底部径4.5cm、口縁部はくの字に外反し、胴部はやや長い球形で底部ではまり、小さな平底になる。口縁部は横ナテ調整、胴外面は上半部が、やや右あがりの平行タタキで下半部はそれを消している。内面は下半部へラ研磨調整、頭部に指頭圧痕が残る。胴上半と下半の境に段がある。2もほぼ同様の器形、調整をもつ。口径14.7cm、推定器高16.6cm。1、2共に胎土に石英、長石、赤色鉱物、黒色鉱物の砂粒を含む。焼成は良く、1が赤褐色、2が黒褐色をなす。胎土、器形から搬入品と考える。7は球形の胴部に口縁部がややたちあがった器形をなす。外面は頭部に縱位のハケ目、胴部は右あがりの平行タタキを施した後、ナテ消す。内面は粘土帶の痕跡が明瞭で、一部、荒い削り調整、胎土には石英、長石、雲母の砂粒を多量に含む。焼成は良好、色調は外面が白黄色、内面が黒褐色をなす、口径14.6cm、胴部最大径22.8cm。13、15、17は楕で、13は口径10.6cm、器高3.4cm、15は口径12cm、器高5.1cm、共に型づくりと考えられ、外面は型おしのままで、15の底部付近は不定方向のヘラケズリが加えられる。内面は斜位のハケ目調整で丁寧に仕上げる。17は口径6.8cm。13、15は胎土に石英、長石、雲母の砂粒を含む。17は石英、長石、金雲母の砂粒を含む。共に焼成は良く、13、15は黄褐色で15は底部に黒斑がある。17は赤褐色をなす。19、20は脚付楕で、19は口縁部が外反し、20は内傾する。脚の筒部は共に中実である。19は口径10.4cm、器高10.5cm、脚端径4cm、全体に手びくね的で口縁は指頭圧痕が顕著、胴外面はケズリ状のヘラナテ、脚は指による調整。20は口径12.3cm、脚端部を失う、外面は縱位のハケ目調整で、口縁部はその後横ナテ調整、内面はヘラ研磨調整。22は高壺の壺部で、口径17.9cm、壺部の屈曲は明瞭で、口縁は外反する。外面に縱位のハケ目調整がわずかに残る。内面はヘラ研磨調整。19、20、22は共に胎土に石英、長石、赤色鉱物の砂粒を含み、焼成は良好、赤褐色をなす。

上層出土の土器は甕が3~6、8~10、29、32~34、36~40の16個体、壺が11、30、31、43の4個体、鉢が12、41の2個体、高壺が21、23、35、42の4個体、器台が24、25の2個体、楕が14、16、48~50、55の5個体、小形の鉢ないしは壺18、44~47の5個体、甕の胴部破片3個体、タコ壺が27、28の2個体、土錐が26の1点を示した。

甕は在地系のものと外来系のものの二種に分類できる。在地系の甕は口縁がくの字に屈曲し、端部はやや尖るか丸くおさめ、胴部はあまりふくらみをもたない器形をなす。外面は胴部が縱位のハケ目調整。口縁部は横方向のハケ目ないしはナテ調整。胴部内面はヘラ削りのもの、筋による調整、横位のハケ目調整、削りとハケ目の両者の併用などの調整がみられる。胴と口縁の境は鋭い棱線をなすものが多い。胎土には石英、長石、雲母の砂粒を含み、焼成は良好、色調は赤褐色をなすものが多い。3~6、8~10、36~40が在地系の甕と考えるものである。外来系と考えるものは29、33のように、口縁部外面に凹線を入れ、口縁をさらに一段たしたような器

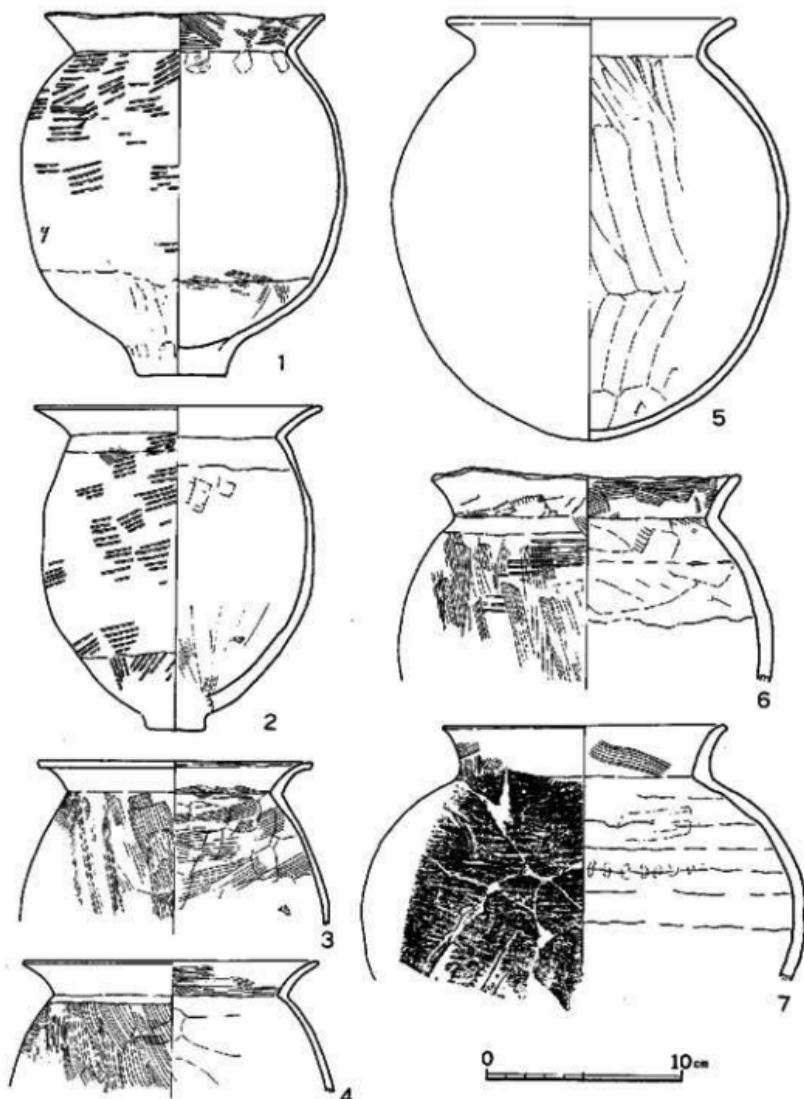


Fig. 35 第27号住居址 (SC-27) 出土遺物実測図 I

15. 第27号住居址 (SC-27)

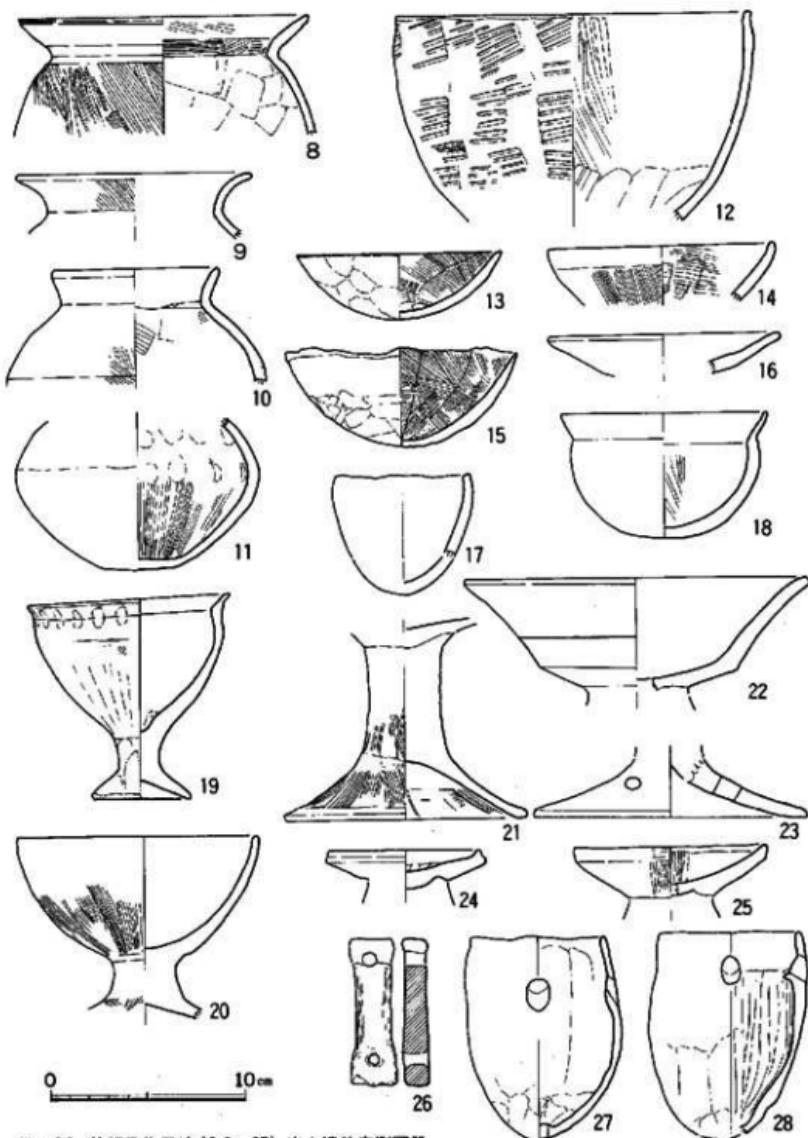


Fig. 36 第27号住居址 (SC-27) 出土遺物実測図II

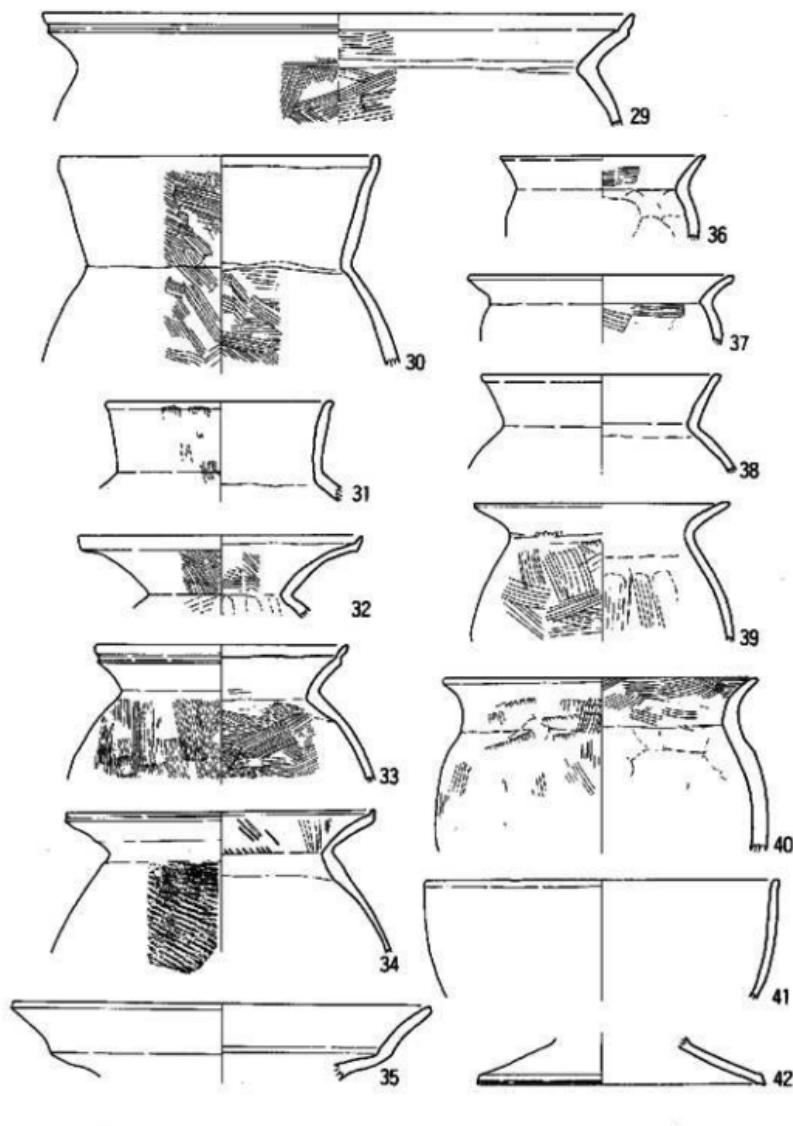


Fig. 37 第27号住居址 (SC-27) 出土遺物実測図III

0 10 cm

15. 第27号住居址 (SC-27)

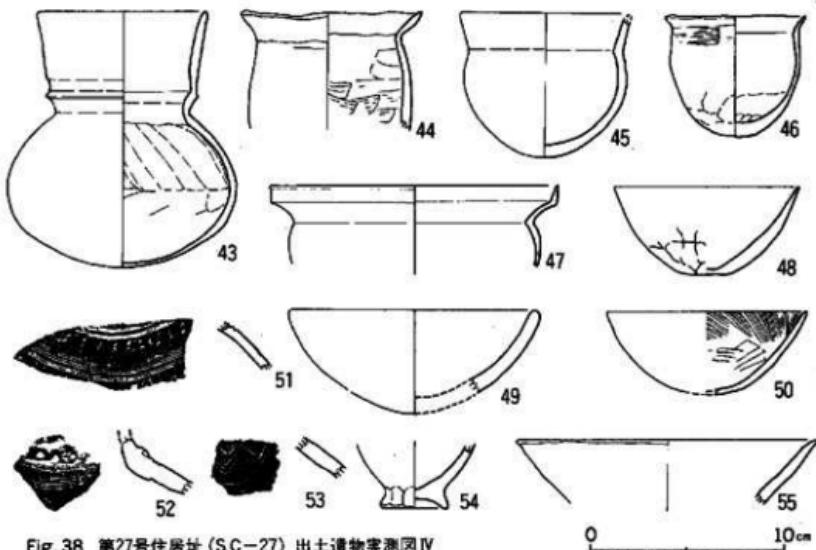


Fig. 38 第27号住居址 (SC-27) 出土遺物実測図 IV

形をもつものと、34のように口縁端部がつまみあげられ、外面に細いタタキをもつ、いわゆる庄内系の土器と、32のように口縁端部を極端につまみあげたものと、51~53のように肩部に櫛描波状文、刺突文等の文様をもつものがある。胎土、色調は在地系とは明らかな違いをみせる。

壺は11が小さな平底で扁球形の胴部をなす。口頭部を失うが、長首壺であろうか。30、31は直口縁を有する。特に30は内外面共に多方向のハケ日調整を加え整形しているが、胎土等に在地系土器と異なる要素が認められる。43はいわゆる山陰系の二重口縁の小形壺である。外面は丹塗りである。胎土は精製され、石英、長石、金雲母の砂粒を若干含む。

鉢(12)は外面に粗いタタキをもつ、内面はヘラ研磨調整である。他例よりやや小さい。

高壺は脚部と壺部があるが全形の判明するものはない。21の脚部は筒部は中実である。23は脚に円形孔の透しが3個ある。壺部として35があるが、口縁の短いものである。

器台24、25がある。いずれも受部で脚を欠く。口端のたちあがりはなく、器面はヘラで丁寧に研磨されている。

楕は床面で説明をえたものと大差ない。小形の鉢では口縁が外反し、丸底壺に近いものと、端部だけを折り上げるものがある。44は、壺の小形品と考えられるものである。47は外来系の土器で、口縁端部がたちあがり二重になり、頭部でしまり体部に移行する。器壁は薄い。胎土は精製され良質である。

タコ壺は口縁下に一孔をうがつもので手づくね。26の上鍾は棒状の両端に孔をあけたもの。

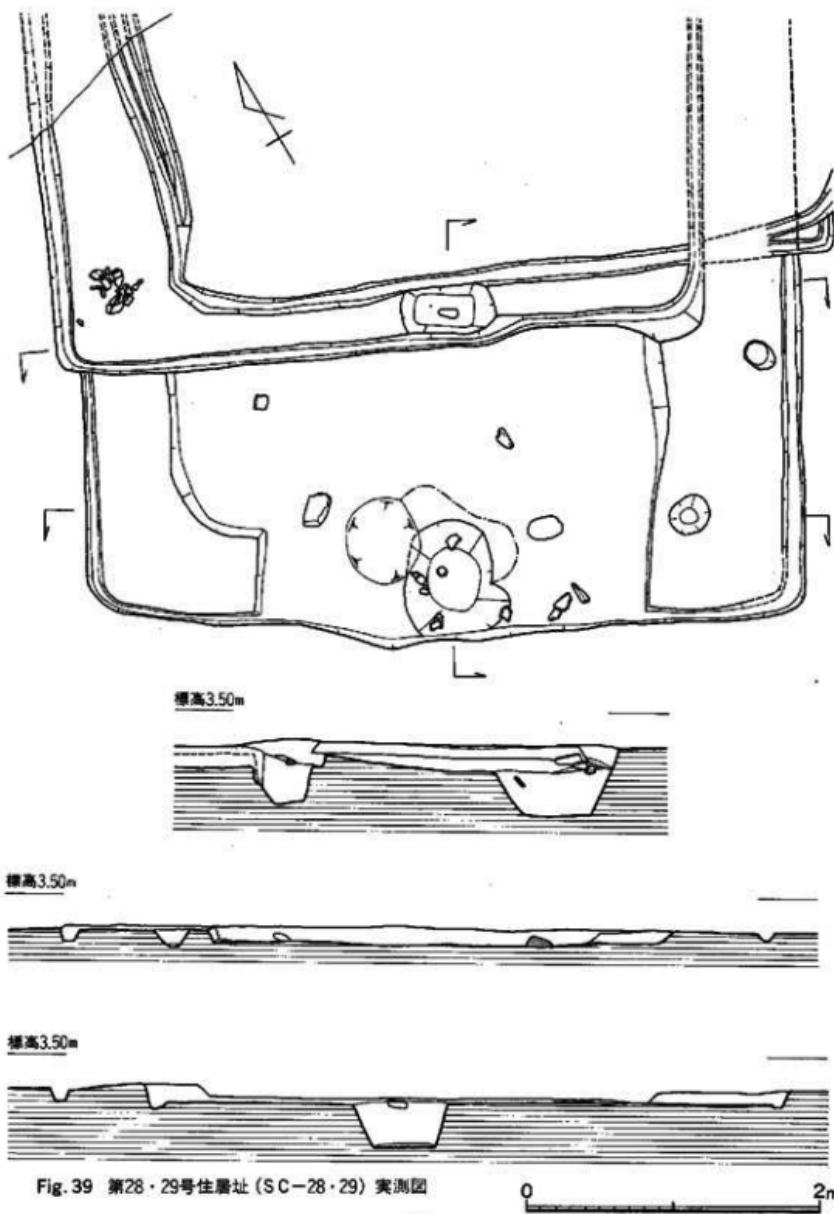


Fig. 39 第28・29号住居址 (SC-28・29) 實測図

16. 第28号住居址 (SC-28)

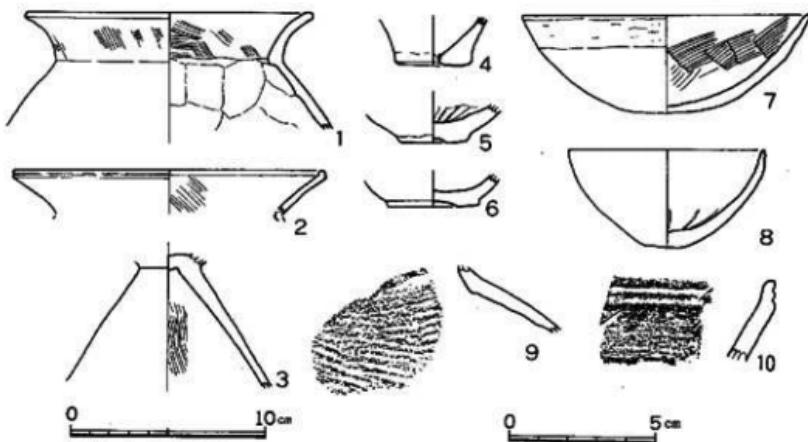


Fig. 40 第28号住居址 (SC-28) 出土遺物実測図

16. 第28号住居址 (SC-28)

(1) 住居址 (Fig. 39)

Z-1区北西隅に検出した住居址で、SC-29、SC-30と重複関係にあり、この中では最も先行するものである。北東壁は完全にないが、南西壁と北西、南東壁の一部が残存している。南西壁長4.9m、北西壁現存長1.6m、南東壁現存長2.4mであるが、平面プランは明らかにしがたい。壁の高さは15cm前後である。南西壁中央部に出入りと考えるピットが付設される。ピットは60cm×80cmの楕円形プランで北東に長い。深さ30cm。南西壁と北西壁、南西壁の一部にそってベッド状遺構が付設される。南西側のベッド状遺構は幅90cm、高さ10cm、北西側のベッド状遺構は幅60cm、高さ10cmで南西側ベッドと連接しL字形をなす。ベッド状遺構は地山の削り出しである。ベッド状遺構と壁の間には周溝があげられる。周溝の幅は10cm前後で、深さ5cmである。床面には炉、主柱穴は検出していない。共に他の住居址によって破壊されている。ただし、主柱穴はその配置から2本である可能性が強い。

(2) 遺物 (Fig. 40)

遺物量は少く、図示できるのは10点である。1、2、4～6、9、10は甕で、1は口縁が強く外反し、内側の頸部の稜線は鋭い。口縁部は内外面共ハケ目調整、胴部内面はヘラ削り、2、9は庄内系の甕、2は口縁部、9は胴部で内面の削りは頸部よりやや下ったところより始まる。4～6は底部で、共に小さな平底で中央部をややあげ底状にする。胎土は在地のものと同様である。10は甕の口縁で口端部がたちあがり、2本の沈線を入れる。3は器台の脚部と考えるも

ので、内面に輜方向のハケ目調整がある。7、8は椀で7は口径14.8cm、器高5cm、内面は斜位のハケ目調整、外面は口縁部近くが横ナデでそれ以下は型づくりのままと考えられる。型づくりを証明するものとして、本例には底部から胴部にかけて木葉模があることは貴重である。8はやや小形の椀である。

17. 第29号住居址 (SC-29)

(1) 住居址 (Fig. 39)

Z-1区に検出した住居址で、SC-28、SC-29と重複関係にあり、SC-28を切り、SC-30からは切られている。残存状態はそのほとんどをSC-30に切られているために悪い。南

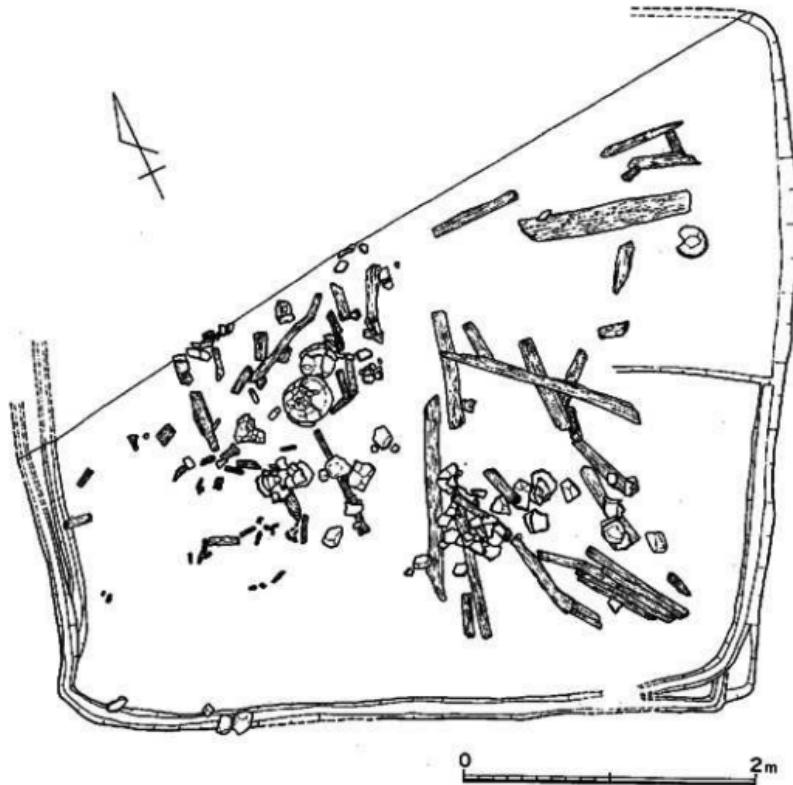
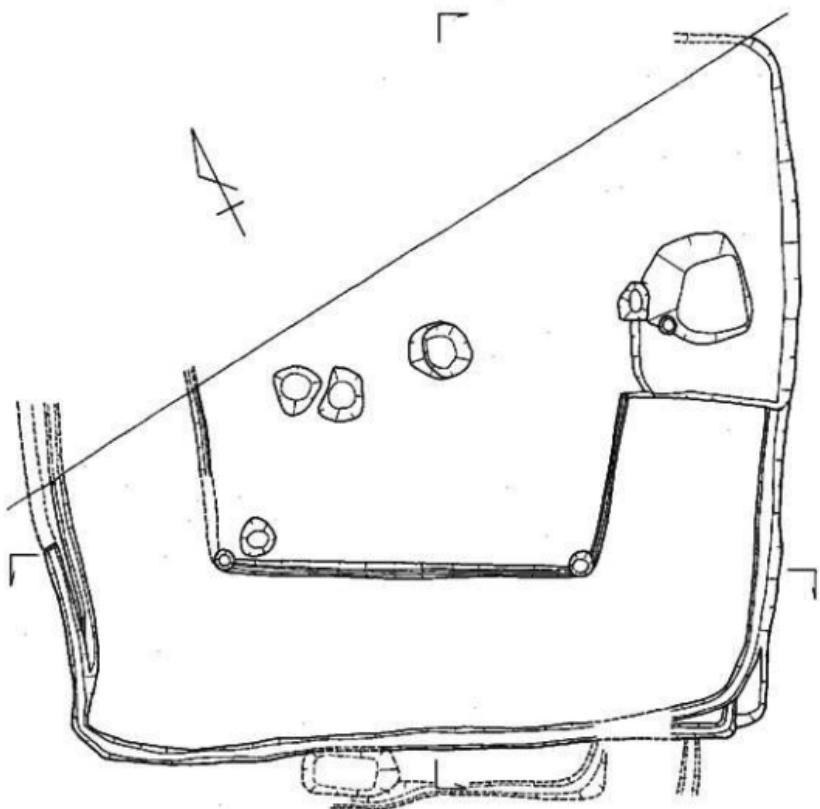
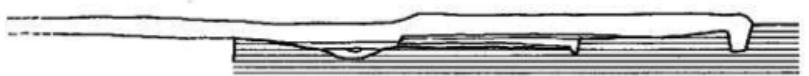


Fig. 41 第30号住居址 (SC-30) 遺物出土状況実測図

17. 第29号住居址 (SC-29)



標高3.50m



標高3.50m

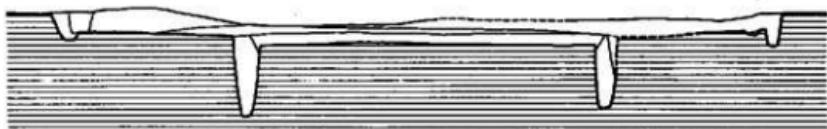


Fig. 42 第30号住居址 (SC-30) 実測図

0

2m

西壁長4.4m、南東壁長0.4m+ α 、北西壁長1.7m+ α で平面プランは明確でない。壁の高さは約10cmである。壁にそって周溝がめぐる。周溝は幅15cm、深さ5cmである。南西壁のほぼ中央に出入口と考えるピットがある。ピットは65cm×30cmの長方形プランで、深さ30cmである。

(2) 遺物

床面に若干の土器片が出土しているが、図示できるものはない。

18. 第30号住居址 (SC-30)

(1) 住居址 (Fig. 41, 42)

Z-1区に検出した住居址である。SC-28、SC-29、SC-31と重複関係にあり、この中で最も新しい住居址である。住居址の北半部が現用水路にかかり全掘していない。

南西壁長4.25m、南東壁長4.75m、北西壁長1.8m+ α をはかり、ほぼ方形をなす平面プランである。壁の高さは10cm前後である。壁にそって周溝がめぐるが、周溝がずれて2~3本になる部分があり、数回の建替えが考えられる。また、周溝の存在する部分はベッド状遺構のあるところで、それ以外には検出していない。周溝は幅10cm、深さ10cm前後である。

壁にそってベッド状遺構が付設されるが、南東壁では途中で切れて一部分にとどまり、また、北東壁では発掘区内では検出してないので、コの字形にめぐるものと考えられる。ベッド状遺構は幅約1.1m、高さ約5cmで、地山の削り出しである。しかし、ベッド状遺構の下端にそつて幅5cm、深さ5cmの溝がめぐらされており、この溝に板材をたてベッド状遺構の補強につとめたと考えれば、元々は盛土のベッド状遺構の存在が考えられるが、建替えを考慮に入れれば最終的には現状の高さでのベッド状遺構となつたものであろう。

南西壁の中央よりやや北寄りの床面に出入口を考えるピットがある。ピットは75cm×70cmの不整形プランで、深さ25cmである。

炉は住居址のほぼ中央に位置し、径40cm、深さ5cmの浅い皿状の凹みの地床炉である。

柱穴はベッド遺構のコーナーにある2個の柱穴が主柱穴の一部で、他は木掘部に存在すると考えられ、四本柱になるものと考える。柱穴は共に径15cmで深さ10cmである。

(2) 遺物

遺物出土状況 (Fig. 41)

この住居址も火災住居で遺物の残存状態は極めて良好であった。住居址内には建築材である炭化材と土器が炉を中心として出土した。炭化材は住居址中央に向かってその主軸をむけていて上部構造の復原に役立ちそうである。炭化材は長いもので1.5m、径10cm前後である。土器炭化材の下部あるいは一部上にのるものもあるが、ほぼ完形品に近いものが多い。分布的には住居址の南半部に集中し、特に炉の西側に壺2個がおかれていた。なお、出入口のピット内にも完形の壺1個が出土している。

18. 第30号住居址(SC-30)

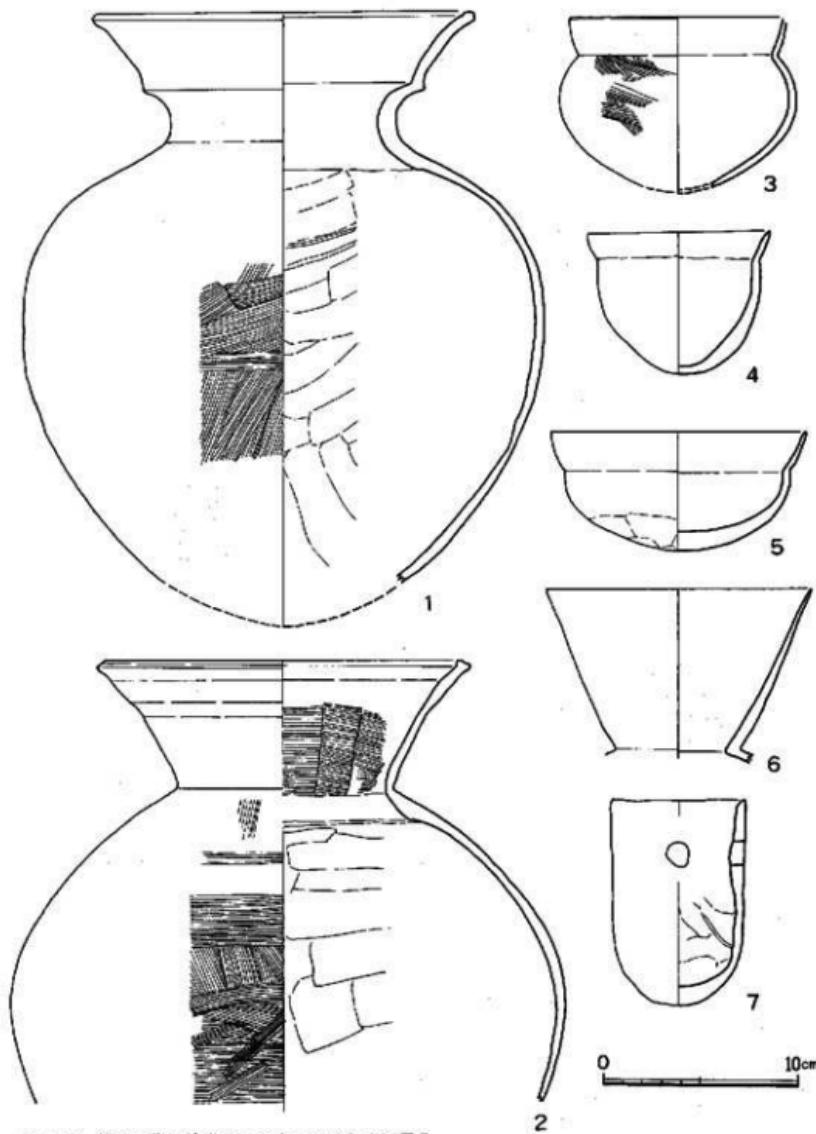


Fig. 43 第30号住居址(SC-30)出土遺物実測図 I

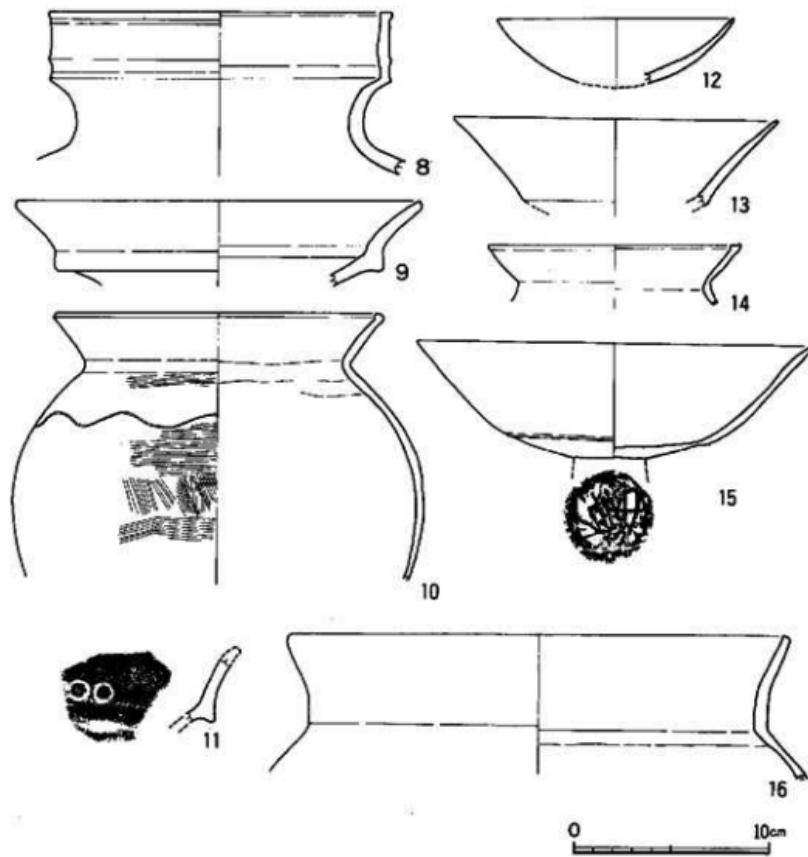


Fig. 44 第30号住居址 (SC-30) 出土遺物実測図II

遺物 (Fig. 43, 44)

壺、小形鉢、甕、高壺、碗、タコ壺があり、16点を図示した。

1、8、9、11は二重口縁をもつ壺形土器である。1はほぼ完形であるが底部を失う。口径19.6cm、推定器高31.5cm、胴部最大径は26.6cmで上半部にあり、胴部はやや肩が張る。頸部はややたちあがり、口縁下半部は外反する。さらにその上に強く外反する上半部を接合する。上半部と下半部の境は稜線が明瞭である。口縁端部は内側でつまみあげられる。器面はやや荒れているが、口縁部は内外面共横ナデ調整。胴部外面は上半部が横位の細いハケ目調整。下半部

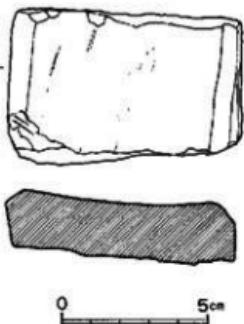
18. 第30号住居址 (SC-31)

は縦位のハケ目調整。肩部に沈線1条を波状にめぐらしている。内面は頸部以下ヘラ削りの調整を施す。8は復原口径17.7cm。口縁部下段は強く外反し、その上に直立した口縁部上段をのせる。口縁端部は平坦で、四線をめぐらす。口縁部上段と下段の境は明瞭な稜線をもつ。内外面共に横ナデ調整。胴部はヘラ削り調整。9は1と類似した口縁形態を有する。口縁部上段と下段の境は粘土が下方に突線状につき、口縁部の外反は強い。端部は丸くおさめる。復原口径20.9cm。11は口縁はあまり外反しない。口縁下段と上段の境は突線状に下がり、上段の下に2個並列した竹管文を配する。2は球形の胴部に外反する直口縁をつけた壺形土器である。口縁端部の内側はつまみあげられる。外面は口縁部が横ナデ調整。胴部が細い丁寧な横位のハケ目調整、胸部は横方向の丁寧なヘラ削り調整を施す。口径19.2cm、胴部最大径28.5cmである。6は直口壺。口縁部はやや内傾しながらあがる。1、2は胎土に石英、長石、雲母、金雲母、赤色鉱物の細い砂粒を含むが精製された良質なものを使用し、焼成は良好、白灰色をなす。8、9、11は胎土に石英、長石、雲母、赤色鉱物を含む。焼成は良好で8が白灰色、9が赤黄色、10が赤褐色をなす。6は致密な胎土で、焼成は良好、赤色をなす。

10、14、16は壺形土器で、10は口縁がくの字に屈曲し外反する。口縁端部内側はつまみあげられている。肩部に沈線一条で波状文を描く。胴は最大径が中位にあり、肩はあまり張らない。口径17cmをはかる。いわゆる布留系の壺である。外面の上半部は横位のハケ目調整で一部ナデによって消される。下半部は縦位のハケ目調整、内面は頸部よりやや下ったところより横方向の丁寧なヘラ削りを施す。14も同様の器形、特徴をもつが小型である。口径13cm。10、14は胎土、焼成、色調は1、2と同じである。16は口縁部が直立し、上半部で外反する大型の壺形土器である。胴は張りが少い。復原口径25.8cm、内面は横位のヘラ削りで調整される。

3～5は小形丸底壺、小形の鉢とされるものである。3は短い口縁部が内傾しながらあがる。復原口径11.3cm、復原器高9cm、外面は細い横位のハケ目調整、内面はヘラ研磨調整、口径は胴部最大径より小さい。4は口縁部が直線的に外へひらく。口径9.4cm、器高7.4cm。5は完形品で、口縁は頸部から大きく外へひらく。口径13.1cm、器高6.1cm、内外面共丁寧なヘラ研磨調整、外底部は不定方向のヘラ削り後、棒状工具で研磨を加えている。3、4は、胎土に石英、長石、雲母、赤色鉱物の砂粒を含む。焼成は良好で共に黄褐色をなす。5は胎土に石英、長石、雲母、赤色鉱物、金雲母の砂粒を含むが精製されて良質、焼成は堅致で赤褐色をなす。

13、15は高环、13は復原口径16.7cm、环底部と体部の段は明瞭でない。外面は縦位のハケ目

Fig. 45 第30号住居址 (SC-30)
出土遺物実測図III

第五章 調査の記録—古墳時代の遺構と遺物—

調整後ヘラ研磨、内面はヘラ研磨調整。15は口径20.4cm、环部高5.9cm、段は不明瞭、内外面の調整は器面が荒れているため明確にできない。脚との接合部は、接着良くするための配慮がみ

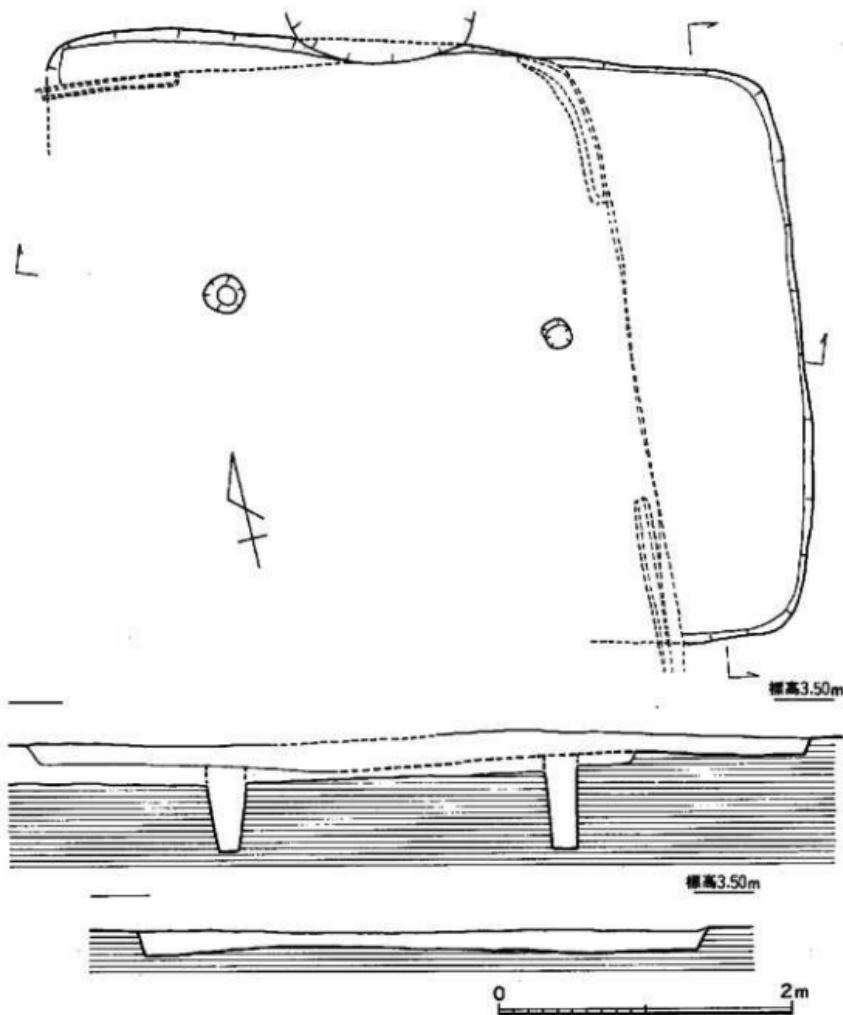


Fig. 46 第32号住居址 (SC-32) 実測図

19. 第31号住居址 (SC-31)

られる。13、15共に胎土には石英、長石、雲母、赤色鉱物の砂粒を含む。焼成は良く、赤褐色をなす。

12は楕円形復原口径12.2cm、復原器高3.6cmをはかる。内外面共ヘラ研磨調整、胎土には石英、長石、雲母、赤色鉱物の砂粒を含むが良質、焼成は良好で、色調は赤褐色をなす。

7はタコ窓で口径6.8cm、器高10.6cm、口縁からやっ下って孔があけられる。

砥石 (Fig.45) 砂岩製の砥石、幅8cm、長5.3cm、厚さ2cm、途中で折れている。中砥である。

19. 第31号住居址 (SC-31)

(1) 住居址

Z-(-1)区南半部中央に検出した住居址である。SC

-30と重複関係があり、SC-30によって切られる。

南東のコーナーを残すのみで平面プラン等については

不明。南東側壁長3.25m、北東側壁長2.2m、壁の高さ3cm前後で削平が著しい。南東壁のコーナーから2.2mのところに接して65cm×60cmの不整円形アランのピットがある。ピットの深さ15cm前後。出入口部にあたると考える。

(2) 遺物

床面に若干の遺物が存在したが、図示できるものはない。

20. 第32号住居址 (SC-32)

(1) 住居址 (Fig.46)

A-0区北西隅に検出した住居址である。SC-27と重複関係にあり、SC-27によって切られている。北側壁、東側壁を残し、3つのコーナーが残っているが床面の大部はSC-27によって失われる。北側壁長4.9m、東側壁長3.8mで東西に主軸をとる長方形プランの住居址である。壁の高さ約10cmをはかる。固溝はない。柱穴は2個で長軸に平行に対している。共に径20cm、深さは現存で55cmであるが元来は65cm程度の深さとなる。

(2) 遺物 (Fig.47)

遺物数は少いが、注目すべき遺物が出上している。3点を図示した。

1は器台と考えられる破片で、比較的厚手の土器である。受部にあたる部分であるが、底端に外反している。2は夔形土器で柄部に把手をもつ。口縁部は外反するものと考えるが全体的に

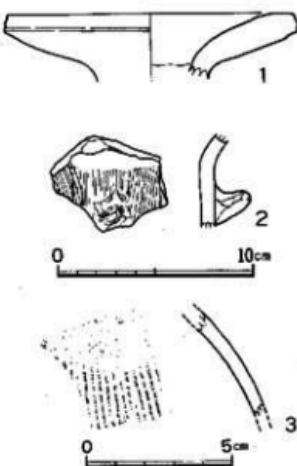


Fig. 47 第32号住居址 (SC-32)
出土遺物実測図

な器形は不明、外面は縱方向のハケ目調整で、内面はヘラ削り。把手は長さ2.2cm、先端が尖る。胎土に石英、長石、雲母、金雲母、赤色鉱物の砂粒を含む。焼成は良好で、色調は赤褐色をなす。外面にススが付着する。3は朝鮮半島からの移入土器と考えられる。瓦質土器で外面は繩文文がある。胎土は致密で焼成は良好、灰色をなす。

21. 第33号住居址 (SC-33)

(1) 住居址 (Fig. 48)

A-0区、B-0区にわたって検出した住居址である。SD-04に切られている。住居址のプランはやや乱れている。北東側壁長4mで、壁がやくずれてひろがる。北西側壁長2.8m+ α である。長方形ないしは方形のプランをもった住居址であろう。壁の高さ約10cm。柱穴は上層から掘り込まれたものがあるが、主柱穴となるのは、北東壁に平行して相対する2個で、共に径40cm、深さ55cm、25cmである。柱痕跡があり径20cmである。炉、周溝等は検出していない。

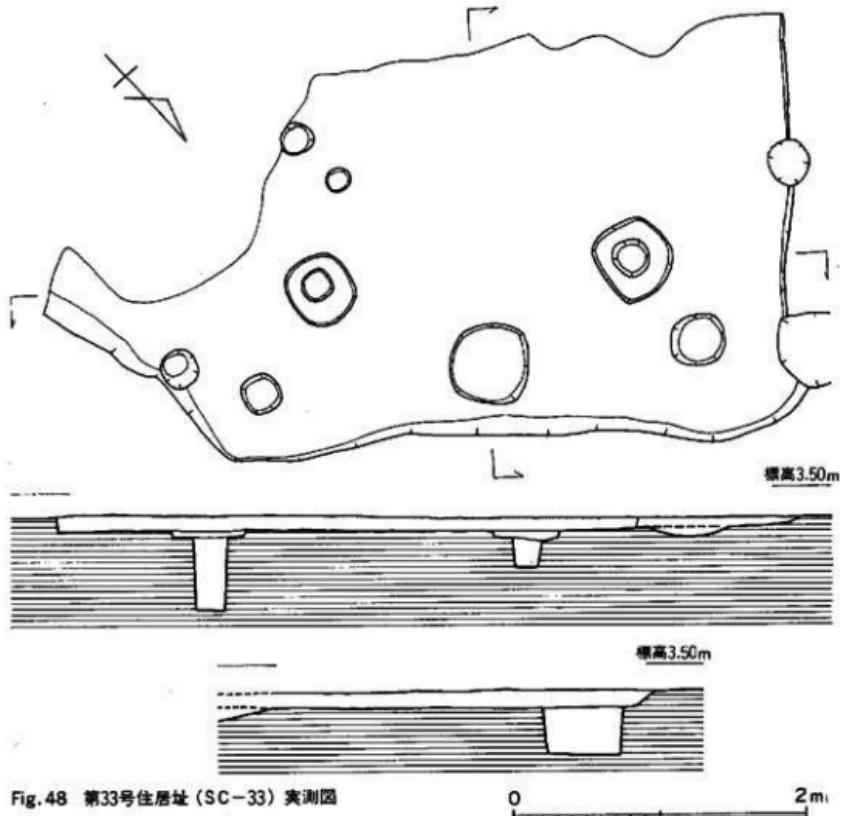


Fig. 48 第33号住居址 (SC-33) 実測図

21. 第33号住居址 (SC-33)

20

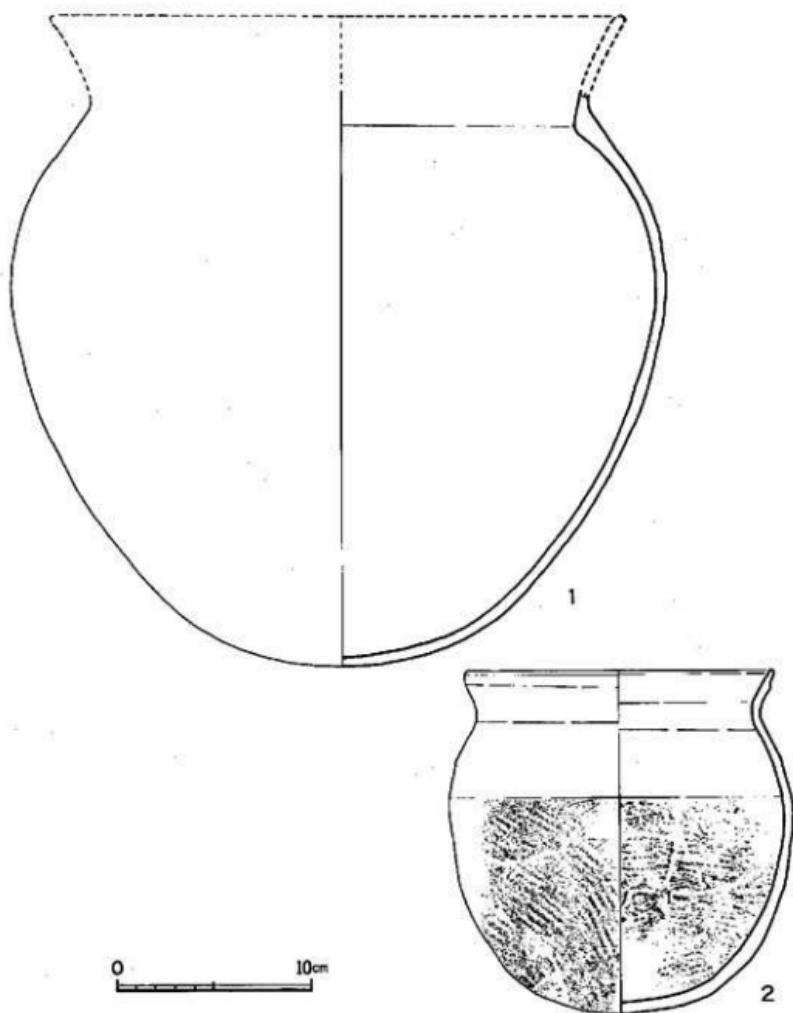


Fig. 49 第33号住居址 (SC-33) 出土遺物実測図

(2) 遺物 (Fig. 49)

床面に密着して2個体の土器が出土した。1は大形の夔形土器で約半分を失う。やや長胴の体部にわずかに外反する口縁部をつけたものと考えられるが、口縁部を失う。外面は擬格子のタタキで、内面は平行のあて具文様がつく。復原頭部径25.8cm、推定器高33.3cmをはかる。2は1を小形にしたような夔形土器ではほぼ完形である。口径15.9cm、頭部径14.5cm、器高17.7cm、胴の張りは少く、底部は丸底である。口縁部は凹線をめぐらしている。胴部外面は擬格子のタタキで、内面、平行なあて具文様がつく。全体に須恵器のつくりに近い。外面にススが付着していて、二次加熱による変色がみられる。内面刷上半部にもススが付着している。1、2共に胎土には石英、長石、雲母、赤色鉱物の砂粒を含み粗である。焼成は良好で、色調は赤褐色をなす。

22. 第27号掘立柱建物 (SB-27) (Fig. 50)

S-0区西側中央に検出した建物である。桁行2間、梁行1間の南北棟で主軸をN-35°-Eにとる。桁行は300cm、梁行216cm、柱間は150cmである。柱穴掘り方はP₁が径30cm、深さ34cm、P₂が径40cm、やや方形に近い。深さ28cm、P₃は径34cmで径10cmの柱痕跡がある。深さ35cm。P₄は径50cm、中央部に径12cmの柱痕跡がある。深さ36cm、P₅は径44cm、中央部に径14cmの柱痕跡がある。深さ25cm。P₆は45cm×30cmの隅丸長方形で西に片寄って径12cmの柱痕跡がある。深さ32cm。柱穴掘り方内からは古式土師器細片が数点出土しているが器形の判明するものはない。堅穴住居址と組むもので、高床の倉庫と考えられる。

23. 第28号掘立柱建物 (SB-28) (Fig. 51, 52)

A-0区中央部に検出した建物でSB-15と重複関係にある。桁行2間、梁行1間の南北棟で主軸をN-30°-Eにとる。桁行400cm、梁行400cm、柱間は200cmである。柱穴掘り方は非常に大きく、P₁は116cm×108cmの隅丸長方形プランで深さ72cm、埋土は1、黄灰色土層、2、黄褐色土層、3、灰黄褐色土層、4、灰褐色土層、5、暗黄褐色土層、6、暗灰褐色土層、7、黒灰褐色土層、8、暗灰色土層、9、灰色砂層の互層となっていて版築状に固めている。以下、各柱穴は同様である。P₂は140cm×90cmの長方形プランで、深さ80cm、埋土は1、明黄色土、

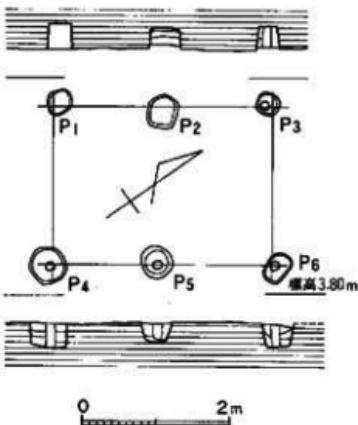


Fig. 50 第27号掘立柱建物 (SB-27)
(倉庫)

23. 第28号掘立柱建物 (SB-28)

2、明黄色土（1より若干黒い）、
 3、黄色黒褐色土、4、砂、5、暗褐色土（粘質）、6、暗茶褐色土、
 7、黒褐色土層、8、黒褐色土層（7よりやや明るい）、9、黒褐色土上（8より明るい）、10、黄褐色土の互層である。柱痕跡があり径20cmである。
 P_3 は150cm×100cmの隅丸長方形プランで、深さ71cm、埋土は、1、暗灰黒褐色土、2、黄褐色土、3、砂質土の互層である。 P_4 は160cm×90cmの不整楕円形プランで、深さ86cm。埋土は、1、明黄灰色土、2、黄灰色土、3、暗黄灰色土、4、黒褐色土、5、黒灰褐色土、6、暗黄褐色土、7、灰褐色土、8、明灰褐色土、9、黄色土の互層である。 P_5 は140cm×100cmの不整長方形プランで、深さ85cm、埋土は、1、黄褐色土、2、灰褐色土、3、暗黄褐色土、4、黄灰褐色土、5、黑灰褐色土、6、暗黄灰色土、7、黄灰色土、8、暗灰褐色土、9、灰色砂質土の互層である。 P_6 は100cm×70cmの楕円形プランで深さ83cm。埋土は、1、暗黄褐色土（粘質）、2、暗灰褐色土（粘質）、3、暗灰褐色土（砂混入）、4、灰褐色土、5、青灰色土（粘質）、6、黄灰色土、7、黄褐色砂質土の互層である。以上の柱穴掘り方からは古式土師器頸片が出土しているが図示できるものはない。SB-27同様に古墳時代の高床倉庫とみることができる。

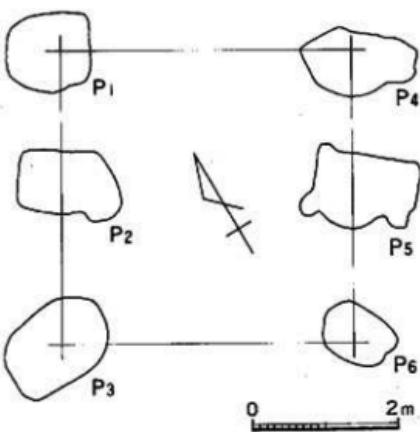


Fig. 51 第28号掘立柱建物 (SB-28) (倉庫)

24. 第2号井戸 (SE-02)

(1) 井戸

C-(-1)区中央部に検出した遺構である。SC-24と重複関係にあり、SC-24が埋没した後にSC-24の南東壁に接して掘り込まれている。径120cm×100cmの円形で、深さ115cm。底は平坦でやや袋状に拡がる部分がある。下層の砂層まで達していく現在の湧水点と一致している。埋土の堆積は一層で、黒褐色土が埋っていた。底部近くに植物の炭化したものが出土したが製品ではない。埋土中、底部から土師器が出土している。

(2) 遺物

図示していないがかなりの土師器が出土した。大部分が胴部破片である。外面にハケ目調整を施し、内面ヘラ削りのものがほとんどである。器形がわかるものとして、小形の壺があり、

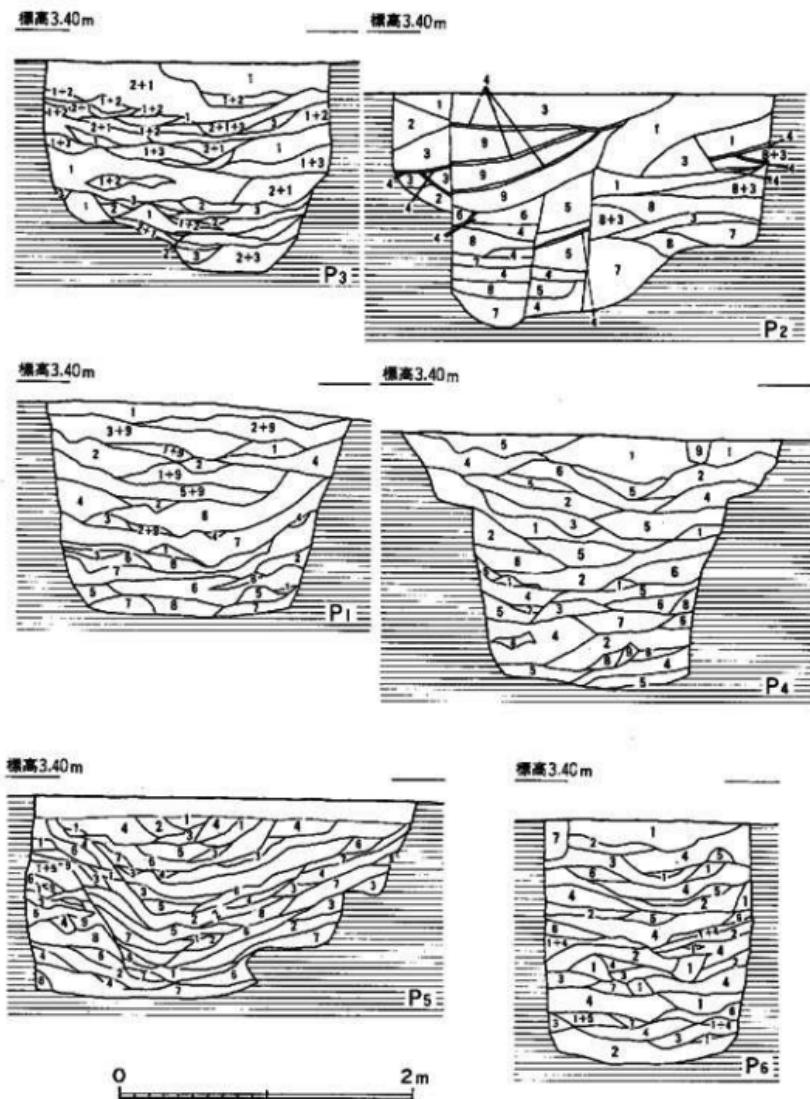


Fig. 52 第28号埴立柱建物(SB-28)柱穴断面図

25. 第28号土塙 (SK-28)

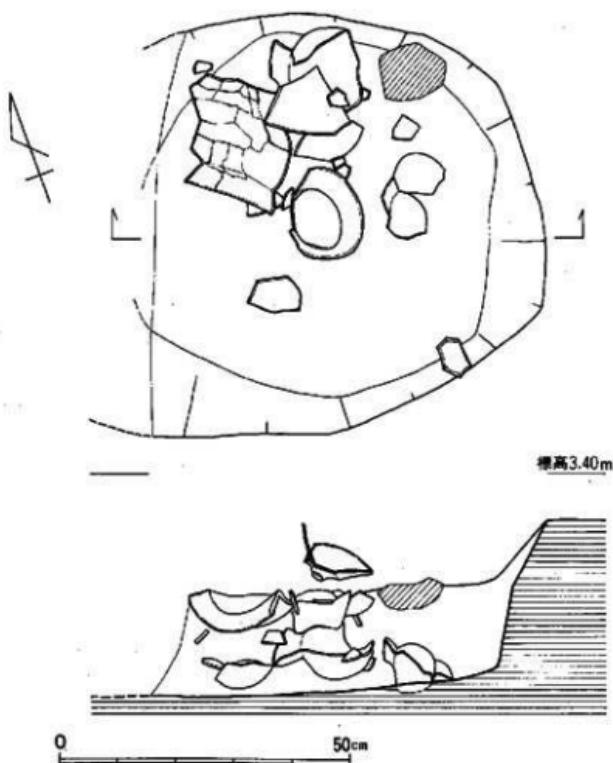


Fig. 53 第28号土塙 (SK-28) 遺物出土状況実測図

頭部の形態から二重口縁になると考えられる。

25. 第28号土塙 (SK-28)

(1) 土塙 (Fig. 53)

C-(-1), D-(-1)区の接する中央部に位置し、段丘面の落ちぎわに検出した土塙である。一部、トレンチで破壊したが、ほぼ全形プランは把握できる。検出面は $135\text{cm} + \alpha \times 145\text{cm}$ の橢円形プランで、底は $114\text{cm} + \alpha \times 120\text{cm}$ の円形プランである。深さ約50cmである。中より夔形土器2個体、壺1個体、高环2個体が一括して出土した。また焼土等もあり、何らかの祭祀行為後、一括埋納されたものと考えることができる。

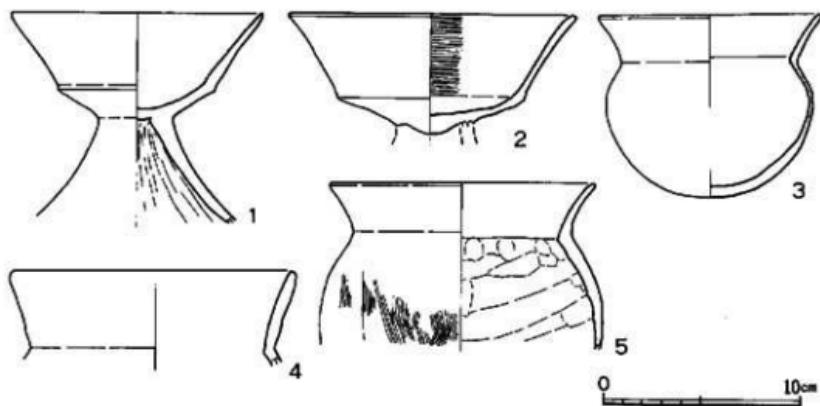


Fig. 54 第28号土塚 (SK-28) 出土遺物実測図

(2) 遺物 (Fig. 54)

1、2は高環である。1は口径13cm、環部は環底部と体部の境に段をもち、口縁は外傾しながらたちあがる。脚はラッパ状にひらくもので脚端部を欠く。脚内面はヘラ削りで他は保存状態が悪く不明。2は口径14.8cm、環部高5.7cm、器形は1と同様である。外面はヘラ研磨調整、内面は口縁が横方向のハケ目調整である。1、2共に胎土に石英、長石、雲母、赤色鉱物の砂粒を含む。焼成は良好で、色調は赤褐色をなす。

3は小形丸底壺である。口径13.4cm、器高9.4cm、口縁部は短く、わずかに外反する。内外面共に保存状態が悪く調整痕は不明。胎土には石英、長石、雲母、赤色鉱物を含む、焼成は良好で、赤褐色をなす。

4、5は斐形土器である。4は復原口径14.8cm、口縁は直立ぎみで端部は丸くおさめる。5は口径13.5cm、口縁はくの字に折れ外反する。外面は口縁部が横ナデ調整、胸部は縱位のハケ目調整、内面は口縁部が横位のハケ目調整がわずかに残り、胸部はヘラ削り調整、外面にススが付着する。4、5共に胎土に石英、長石、雲母、赤色鉱物を含み、焼成は良好、4は赤褐色、5は黄褐色をなす。

26. 第29号土塚 (SK-29)

(1) 土塚 (Fig. 55)

A-0区北東部に検出した土塚である。SB-15、SB-28と重複関係にあり、SB-15の柱穴によって一部切られている。SB-28とは直接的な切り合い関係ではなく先後関係は明らか

にできないが、大きな時間差はなく、SB-28に対する祭祀土塙とも考えられる。

土塙は径80cm~85cmの円形プランをなす。底は78cm×68cmの不整円形プランで平坦である。深さ19cm。中より壺口縁部破片と胴部破片が出土している。

(2) 遺物 (Fig. 55)

二重口縁の壺形土器
1個体がある。口径18.4cm、頸部径13.5cm、口縁部形体は頸部から口縁下段が外反し、その上に口縁上段を直立させたもので、口縁下段と上段の境はあまり明確でない。口縁端部は平坦で凹線一条をめぐらす。外面口縁部上段は横ナデ調整、下段は縦位のハケ目調整、胴部は縦位と横位のハケ目調整、内面は口縁部が横位のハケ目調整後横ナデ調整、胴部はヘラ削り調整である。胎土には石英、長石、雲母、赤色鉱物の砂粒を含み、焼成は良

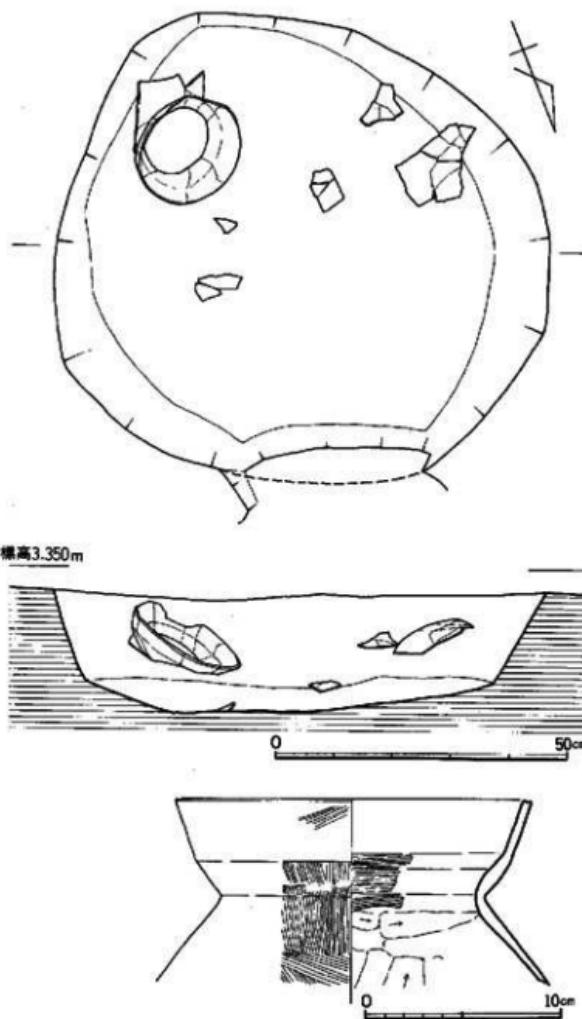


Fig. 55 第29号土塙 (SK-29) 遺物出土状況、遺物実測図

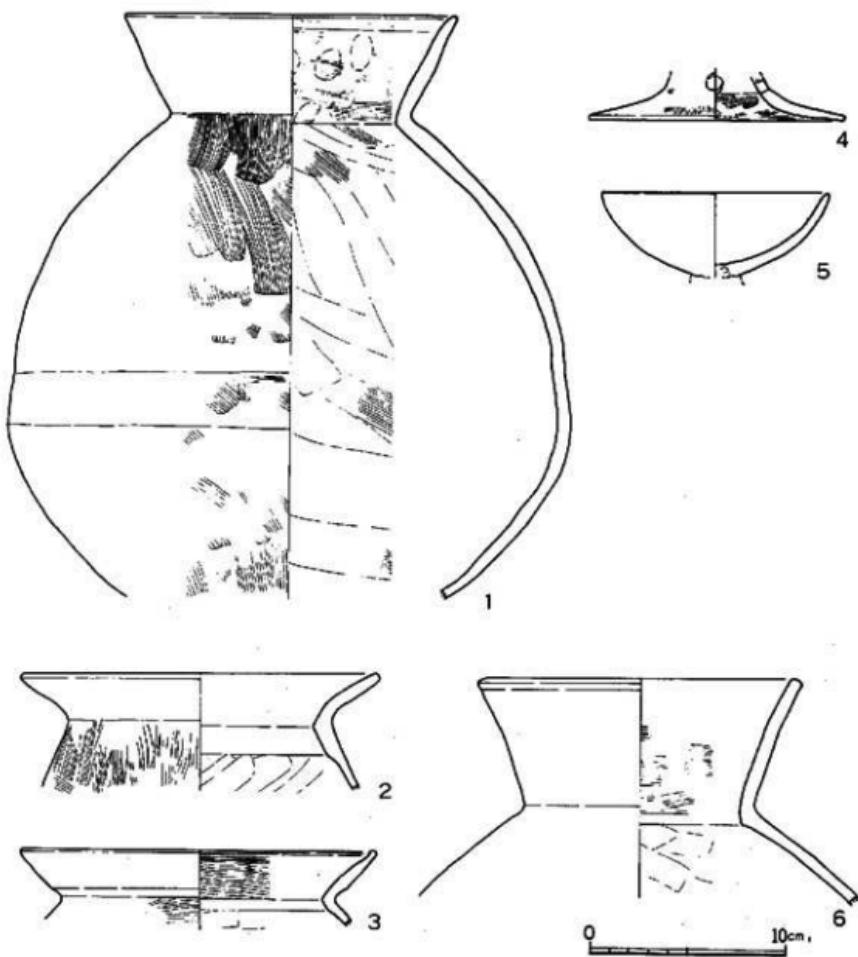


Fig. 56 溝（SD-01）出土土器実測図

27. 第1号溝 (SD-01)

好、赤黄色をなす。

27. 第1号溝 (SD-01)

(1) 溝

C-(-1)区、D-(-1)区に検出した遺構で溝というよりも旧多々良川の氾濫源にあたり、序に東にむかって深さを増す。土器の他に多数の流木を検したが、加工痕のあるものは皆無であった。

(2) 遺物

土師器多数があるが、いずれも破片である、7点を図示した。

1、6は壺形土器である。1は直口縁で胴部最大径は下にあり、しもぶくれの胴部を有する。口縁部には若干二重口縁の名ごりがみられ、わずかな稜線をもつ。外面は口縁部が横ナデ調整、胴部は縦位のハケ目調整で胴中位はヘラ削り状のナデによってハケ目痕を消す。胴中位から下にススの付着が著しい。内面は口縁部が横位のハケ目調整。胴部は部分的に粘土接合痕が残るが、全面はやや粗なヘラ削り調整である。復原口径15.8cm、頸部径11.5cm、胴部較大径26.9cmをはかる。2も直口壺で、復原口径15.4cm、頸部径11cm、口縁部は外反しながらたちあがりやや長い。口縁端部はわずかに肥厚し丸くおさめる。内外面の調整は保存状態が悪く不明瞭であるが、口縁内側は横位のハケ目調整である。1、6は共に胎土に石英、長石、雲母、赤色鉱物の砂粒を含む。焼成は良好で、1は赤褐色、6は黄白色をなす。

3、4は壺形土器である。3は復原口径17cm、口縁部はややふくらみながらたちあがり、口縁端部はつまみあげられる。外面は口縁部が横ナデ調整、胴部は細いタタキ、内面は口縁部が横位のハケ目調整、胴部は頸部よりやや下ってヘラ削り調整、胎土は石英、長石、雲母、赤色鉱物、金雲母の細い砂粒を含むが良質、焼成は良好で、黒灰色をなす。3は復原口径17.2cm、口縁部はくの字形に屈曲する。外面は口縁部が横ナデ調整、胴部は縦位のハケ目調整、内面は口縁部が横ナデ調整、胴部は粗いヘラ削り調整。胎土には石英、長石、雲母の砂粒を含む。焼成は良好で、外面は赤黄色、内面は黄灰色である。

4は高环の脚部で脚端径12.2cm、筒部に円孔があけられる。5は脚付椀で、口径12cm、4、5共に胎土に石英、長石、雲母、赤色鉱物の砂粒を含む。焼成は良好で、赤黄色をなす。

28. 第2号溝 (SD-02)

(1) 溝

第1～第3次調査区から延長してくる溝でD-(-1)区、C-(-1)区までのび、それより先は不明瞭になって消滅する。深さ30cm前後で、底は平坦、溝には多量の上師器が、ほぼ完形の状態で出土したが保存状態が悪い。埋土中には炭化物が多く、黒褐色土一枚で埋っていた。

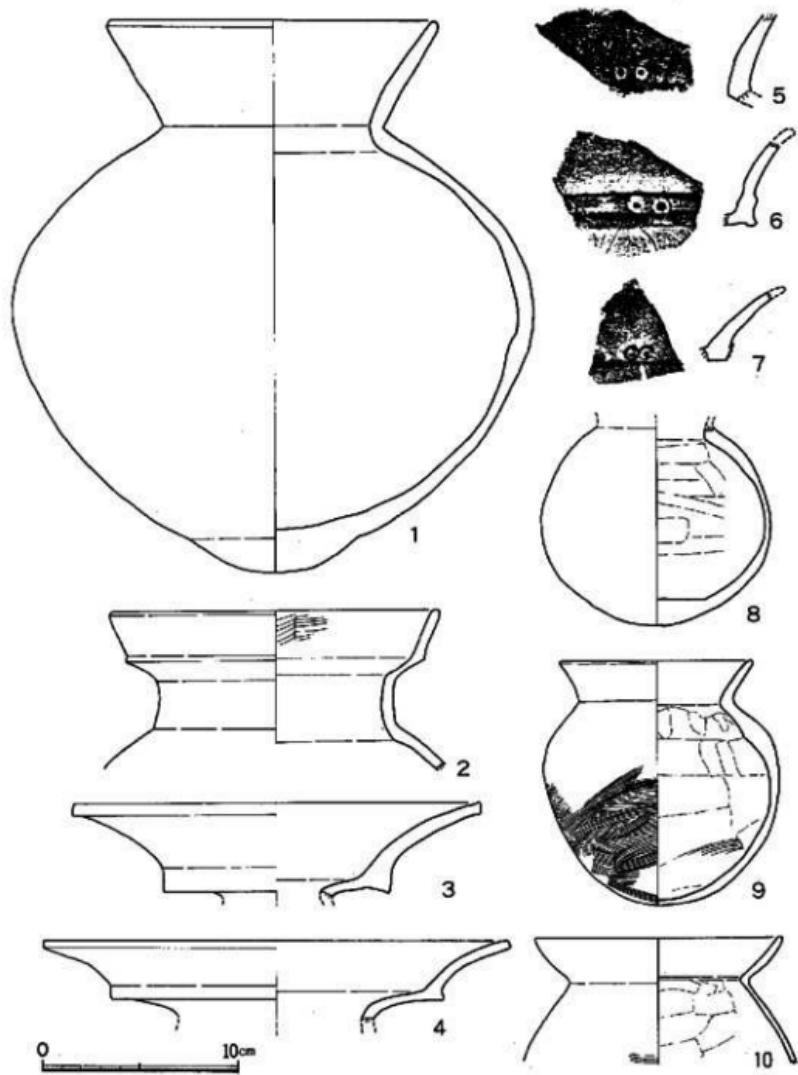


Fig. 57 溝（S D-02）出土土器実測図 I

28. 第2号溝 (SD-02)

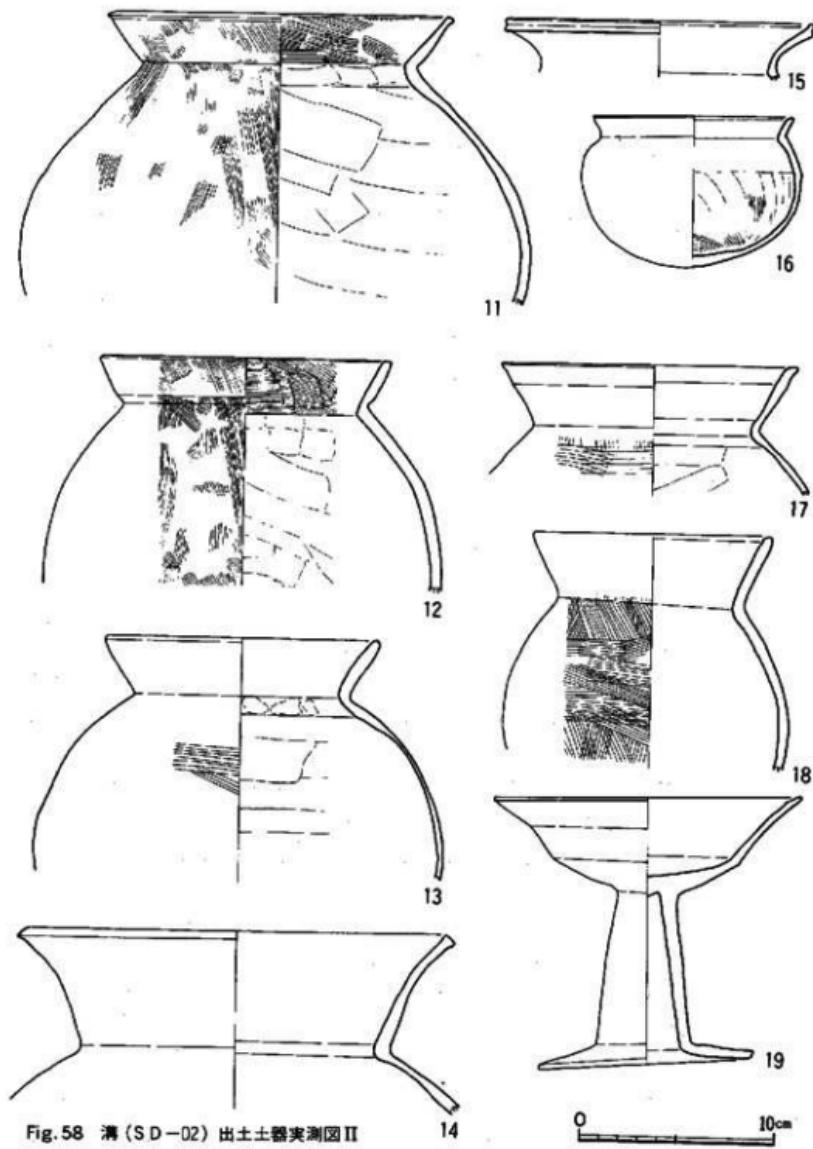


Fig. 58 溝 (SD-02) 出土土器実測図Ⅱ

(2) 遺物 (Fig. 57, 58)

保存状態が悪く未整理分があるが、代表的なものを選んで図示した。壺、甕、高环がある。以下、各個体について説明を加える。

1は直口壺、口径17cm、頸部径11.4cm、器高28.2cm。口縁は外傾しながら直線的にのびる。底部は丸底であるが厚くなり丸く突出する。胴部は球形に張り、胴部最大径は26.8cmである。外面の調整は、口縁部がヘラ研磨調整、胴部は横位のハケ目調整後、ヘラ研磨によってハケ目痕を消している。内面は口縁部がヘラ研磨調整、胴部は縱位のハケ目調整であるが、保存状態が悪く判然としない。胎土には石英、長石、雲母、赤色鉱物の砂粒を含む。焼成は良好で赤褐色をなす。2～4、6、7は二重口縁の壺形土器である。口縁の形状は個体によって若干の差異がある。2は頸部が直立し、その端部が強く外反し口縁下段をなし、その上に直立する口縁上段をのせている。全体的に観さがない。口径17cm。外面はナデ調整、内面は口縁部がハケ目調整後、ナデ調整によってハケ目痕を消す。胴部はヘラ削り調整、胎土には石英、長石、雲母の砂粒を含む。焼成は良好で黄褐色をなす。3は口径20.8cm、口縁下段は横に張り出し平坦な段を形成し、口縁上段は約2cm直く、それから大きく外反する。内外面の調整は器面が荒れていて判然としない。4も3と同様の器形をなすが口縁上段と下段の境が突線状になる。口径24cm、器面調整は不明。6は口縁上段はあまり外反しない。上段と下段の境に幅1.4cmの平たい突帯をめぐらし竹管文2を配している。7は4の器形に類似し、上段と下段の境2個一組みになった円形浮文を2列に配している。器面は内外面共にヘラ研磨調整である。5は二重口縁の壺ではないが、頸部に竹管文2個を並列させている。直口壺であろう。3、4、5、7は胎土に石英、長石、雲母の砂粒を含む。6はさらに金雲母、赤色鉱物が含まれる。焼成は共に良好、3、6、7は赤黄色、4、5は黄褐色をなす。8、9、16、18はいわゆる小形丸底壺である。8は口縁部を欠く、頸部径5.9cm、現存器高10.2cm、胴部は球形で胴部最大径は11.8cm。内面はヘラ研磨調整、内面はヘラ状工具によるナデ調整。底部には特別に粘土をはり厚く、器体の安定をはかっている。9は完形品、口径9.8cm、頸部径7.9cm、器高12.5cm、胴部最大径は上にあり、11.6cm、外面は口縁部から肩部までがハケ目調整後、ヘラ研磨でハケ目痕を消す。胴下半部は横位の細いハケ目調整、内面は口縁部が横位のハケ目調整後、横ナデによってハケ目痕を消している。胴部はヘラ削り調整。外面にはススが付着し、肩部から口縁にかけてとその対象面の胴部に黒斑がある。16は完形品である。口縁部は短くわずかに外

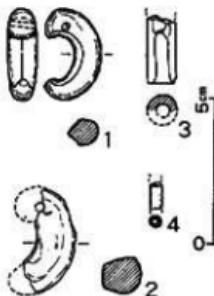


Fig. 59 玉類実測図

傾する。口径10.4cm、頸部径9.5cm、器高7.7cm。肩部はやや扁平で最大径は上にあり11.4cmである。口縁部内側に沈線一条をめぐらす。外面はヘラ研磨調整、内面は底部から右まわりにかかりあげたハケ目調整である。肩部とそれに対象する底部付近に黒斑がある。18は小形丸底壺とするにはやや大きい。胴下半～底部を欠く。口径12.3cm、頸部径9.7cm、外面は口縁部が横ナデ調整、胴部は横位と縱位のハケ目調整、内面は口縁部が横ナデ調整、胴部は不定方向のヘラ削り調整。肩部に黒斑がある。9、16、18は胎土に石英、長石、雲母、赤色鉱物の砂粒を含む。8はさらに金雲母を混入している。焼成は良好で色調は8が黄白色、9、16が赤褐色、18が黄褐色をなす。14は広口の壺形土器、口縁は端部で外反する。端部は平坦で外へわずかに張り出す。復原口径22.5cm、頸部径16cm、内外面共に器面が荒れていて調整痕は判然としないが、外面胴部は縱位のハケ目調整、口縁部内側は横位のハケ目調整で胴部はヘラ削り調整である。胎土に石英、長石、雲母、赤色鉱物、金雲母の細い砂粒を含むが良質。焼成は良く、黒灰色をなす。

19は高环で完形品である。环部口径16cm、脚端径11cm、器高14cm。杯底部と体部の境には段がつくが明瞭ではない。脚は筒部から大きく屈曲して広がる。内外面共にヘラ研磨調整で、脚筒内はヘラ削りである。胎土には、石英、長石、雲母、赤色鉱物の砂粒を含む。焼成は良好で、赤褐色をなす。

10～13、15、17は變形土器である。10は復原口径12.8cm、口縁部はやや内傾ぎみたちあがる。口縁端部は平坦である。口縁部内外面は横ナデ調整、胴部は肩部以下にハケ目調整を施すと考えられる。肩部はナデ消す。胴内面は横方向のヘラ削り調整。11は復原口径17.8cm、胴部最大径は26.2cmである。口縁部は内湾ぎみにたちあがる。口縁端は平坦で凹線一条がめぐり、端がやや張り出す。口縁部内外面は横ナデ調整、胴外面は縱位、横位のハケ目調整。胴内面は横位の丁寧なヘラ削り調整。12は復原口径15cm、胴部最大径20.4cm、口縁端部ナデで平坦にするため両側に粘土の張り出しがみられる。外面は縱位のハケ目調整、内面は口縁部が斜位のハケ目調整、胴部は頸部直下より横位のヘラ削り調整である。13は口径13.6cm、胴部最大径20.9cm、口縁はくの字に屈曲し、端部は丸くおさめる。口縁部内外面は横ナデ調整、胴部は横位のハケ目調整で、肩部はその上をナデ調整しハケ目痕を消している。胴内面は頸部よりやや下って荒い横位のヘラ削り調整、一部、粘土の接合痕が残る。15は復原口径15.9cm、口縁端部に凹線一条をめぐらし、内側はつまみあげられる。口縁内外面共に横ナデ調整、胴部は頸部直下からヘラ削り調整。17は口径15.3cm、口縁上半部で若干屈曲する口縁部で、端部は平坦で外に張り出しがみられる。口縁部内外面は横ナデ調整、胴外面は横位、縱位のハケ目調整、胴内面は頸部よりやや下って横位のハケ目調整。10は胎土に石英、長石の細い砂粒を混入するが、精製された良質なものである。11～13、15、17は胎土に石英、長石、雲母を含む。焼成はすべ良好で、10は赤褐色、他は黄褐色で、11の内面が黒色をなす。

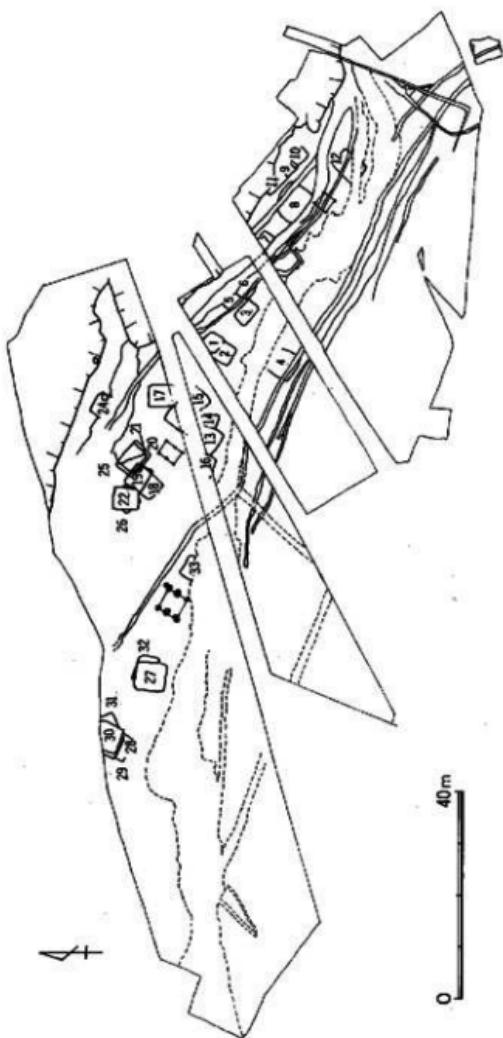


Fig. 60 古墳時代の遺構分布図

29. その他

その他の遺構としてSD-03、SD-05が第1～3次調査区より延長してくるが、古式土器若干を含むのみであり、特記すべき事項はすでにふれてあるのでここでは包含層および各住居址より出土した玉類について説明を加える。

玉類 (Fig. 59)

1はSC-18付近より出土した勾玉である。滑石製で長さ3.1cm、紐孔は片側穿孔である。抉は両側より行いコの字形に近い。2はSC-30床面より出土した土製勾玉で両端部を欠失する。粗糙なつくりで、現存長3.6cmである。3は管玉、碧玉製で大型の玉であるが確損している。穿孔は両端から行う。径1cm、濃い緑色。4は管玉、細身で径0.4cm、碧玉製で黒緑色をなす。

30. 古墳時代のまとめ

第6次調査で検出した古墳時代の遺構は、竪穴住居址21軒+α、溝4条、土塁2基、井戸1基、掘立柱建物2棟である。これに第1～3次調査した遺構を加えると、古墳時代の遺構は竪穴住居址33軒+α（炉址のみがあり住居址と認定できなかったもので、2基がある。）、掘立柱建物3棟、溝13条、土塁2基がある。

溝はすべて南東から北西に向って流れている。古墳時代の住居址はほぼ範囲が限定される。北東側はSD-01によって限られ、南東側は第2、3次調査区で約35mの空白地があるのでSC-12を限界とする。南北側は第1～3次調査分と第6次調査の大部分はSD-10に限られる。北西側は未発掘区にはいるがSC-30を限界として住居址は検出されていないので、ほぼ現状でこの集落を完備したと考えることができる。この集落の範囲は120m×40mにわたって形成される。

住居址は分布的に組合があり、重複ないしは近接いくつかのグループに分割することができる。特に重複関係の著しいSC-18、19、20、21、22、26と近接するSC-24を1グループと考えれば、1グループの住居址は8軒前後と考えることができ、これを基準に分布、重複関係からグルーピングすれば、西から、SC-7～12の6軒、SC-1～6の6軒、SC-13～17、20の6軒、SC-18～22、24、26の8軒、SC-27～33の7軒の5グループに分かつことができる。同時併存は5軒前後の竪穴住居であったことが推測できる。これは、さらに住居址の時期、形体によって検証する必要があるが、第2、3次調査の住居址、出土遺物が未報告であるために詳細は後にゆずりたいと思う。

次に住居址の重複関係、出土土器によって住居址の概略の変遷をながめてみよう。最も先行する住居址はSC-17の弥生時代終末期の住居址である。この住居址は長方形プランで、中央

に炉址があり、長軸に平行して炉をはさんで2本の主柱穴があり、短側にベッド状遺構をもつ。次の段階にくるのが、SC-19に代表される住居址で、プラン、炉、柱穴、ベッド状遺構の配列は同じであるが、ベッド遺構が長軸側に一部のびる傾向があり、長軸壁に接して出入口の土塙が存在する。また、この時期にはほぼ平行して、SC-27のような別系統の住居址もある。この住居址は大型で、方形プランをなし、一辺に出入口の土塙があり、それ以外の壁にそってベッド状遺構が付設される。中央部に炉が位置し、出入口の延長線上に炉をはさんで2本の柱、ベッド状遺構の四隅に柱をもつ住居址である。次の段階にくる住居址はSC-19に上に構築されたSC-22によって代表される。SC-22は基本的にSC-17の住居形態を踏襲するもので、ベッド状遺構が片側なくなり、長軸の中央部に出入口の土塙をもつ。この場合、ベッド遺構は出入口からみて右側にある場合が多い。また、SC-27の系統をひくものとしてSC-30がある。SC-30は完掘していないため全容は不明であるが、方形プランで一辺に出入口が付設され、ベッド状遺構は3辺に付設され、主柱穴は4本柱となる。次の段階はSC-20によって代表される。基本構造はSC-22と変化ないが、出入口に対してさらに2本の柱をもうけている。次の段階はSC-20とほとんど重複して上に構築されたSC-19に代表される。この住居址も長方形プランで、炉、柱穴の配置はSC-17と同じと考えられるが、ベッド状遺構の付設がなくなる。次の段階はSC-22に代表される住居址で、方形プランで、中央に炉をもち、4本柱になると見える住居址である。以下、各住居址の変遷を概観したが、ここで注目されるのは、第5グループに認められる住居址で、明らかに別系統と考える住居址が併存することであろう。概略ながら、北部九州でも住居址のあり方。変遷に若干の権異があることが指摘できる。

本遺跡の出土土器は弥生時代終末期から、初期須恵器出現前までの長期間にわたってみとめられ、また住居址の切り合い関係、遺物の出土状況から、古式土師器の編年を組みたてるには好条件をそなえているが、時間の関係や未報告のものがあり今回は編年についてはふれず、おって集落構造の分析と共に再論したいと思う。

なお、本遺跡出土土器で注目される点を指摘しまとめとしたい。本遺跡出土土器で注目すべきは、外来系土器が多いことであろう。平底でややあげ底状の底部をもつ鏡形土器は瀬戸内以東の地域にもとめられ、祖形は畿内にもとめられる。第1次調査では瀬戸内系の土器も出土している。小型の二重口縁壺は山陰系土器である。庄内系、布留系土器も多数出土している。また朝鮮半島の瓦質土器も破片としてではあるが出土し、外来系土器の多様性がいかなる要素によっておこったのかは今後に残された問題点であろう。

第6章 調査の記録—古代の遺構と遺物—

1. 遺構

(1) 第15号掘立柱建物 (SB-15) (Fig. 61)

A-0区北半中央部に検出した。SB-28、SD-05と重複関係にありいずれより新しい。南北棟建物で主軸をN-19°-Eとする。桁行5間、梁行2間である。桁行10.7m、梁行4.7m、柱間距離は図示した。柱穴はP₁は径47cm、深さ34cm、中央部に径16cmの柱痕跡がある。P₂は径40cm、深さ25cm、中央部に径14cmの柱痕跡。P₃は径52cm、深さ24cm、中央部に径14cmの柱痕跡、P₄は搅乱により消失、P₅は径50cm、深さ38cm、中央部に径17cmの柱痕跡。P₆は径50cm、深さ38cm、中央部に径20cmの柱痕跡。P₇は径46cm、深さ36cm、東に片寄って径14cmの柱痕跡。P₈は径56cm、深さ36cm、中央部に径18cmの柱痕跡。P₉は径60cm、深さ38cm、東に片寄って径14cmの柱痕跡。P₁₀は径50cm、深さ37cm中央部に径14cmの柱痕跡。P₁₁は径48cm、深さ26cm、西に片寄って径16cmの柱痕跡。P₁₂は径56cm、深さ20cm、東に片寄って径14cmの柱痕跡。P₁₃は径50cm、深さ48cm、中央部に径18cmの柱痕跡。P₁₄は径42cm、深さ25cm、中央部に径20cmの柱痕跡がある。

(2) 第16号掘立柱建物 (SB-16) (Fig. 61)

A-0、(-1)区、Z-0、(-1)区にかけて検出した。SB-18、20、SC-27、32と重複する。SB-18、20との前後関係は不明、桁行5間、梁行2間の東西棟で東西の梁間柱の東西1間に床東柱がある。桁行11.7m、梁行4.5m、柱間は図のとおりである。柱穴掘り方はP₁は径36cm、深さ28cm、P₂は径45cm、深さ36cm、中央部に径16cmの柱痕跡、P₃は径50cm、深さ30cm、中央部に径18cmの柱痕跡、P₄は径42cm、深さ26cm、やや西に片寄って径15cmの柱痕跡、P₅は径45cm、深さ30cm、中央部に径16cmの柱痕跡、P₆は径40cm、深さ10cm、南に片寄って径22cmの柱痕跡、P₇、P₈は搅乱のため消滅、P₉は径48cm、深さ26cm、西に片寄って径12cmの柱痕跡、P₁₀は径50cm、深さ24cm、中央部に径16cmの柱痕跡、P₁₁は径50cm、深さ26cm、中央部に径16cmの柱痕跡、P₁₂は径40cm、深さ28cm、北に片寄り径13cmの柱痕跡、P₁₃は径30cm、深さ14cm、P₁₄は径28cm、深さ26cm、中央部に径10cmの柱痕跡、P₁₅は径50cm、深さ26cm、中央部に径16cmの柱痕跡、P₁₆は径60cm、深さ32cm、中央部に径18cmの柱痕跡がある。

(3) 第17号掘立柱建物 (SB-17) (Fig. 62)

A-0区、Z-0区の北半部に検出した。SC-27、SD-04と重複関係にあり、SD-04に切られていて、SD-04よりも古い。桁行5間、梁行2間の東西棟である。桁行12.5m、梁行4m、柱間は図示したとおりである。柱穴掘り方はP₁が径50cm、深さ30cm、P₂は径51cm、深さ30cm、中央部に径11cmの柱痕跡、P₃は径41cm、深さ30cm、P₄は径51cm、深さ28cm、P₅は径51cm、深さ24cm、北に片寄って径10cmの柱痕跡、P₆は径46cm、深さ40cm、ほぼ中央に径10cmの柱痕跡

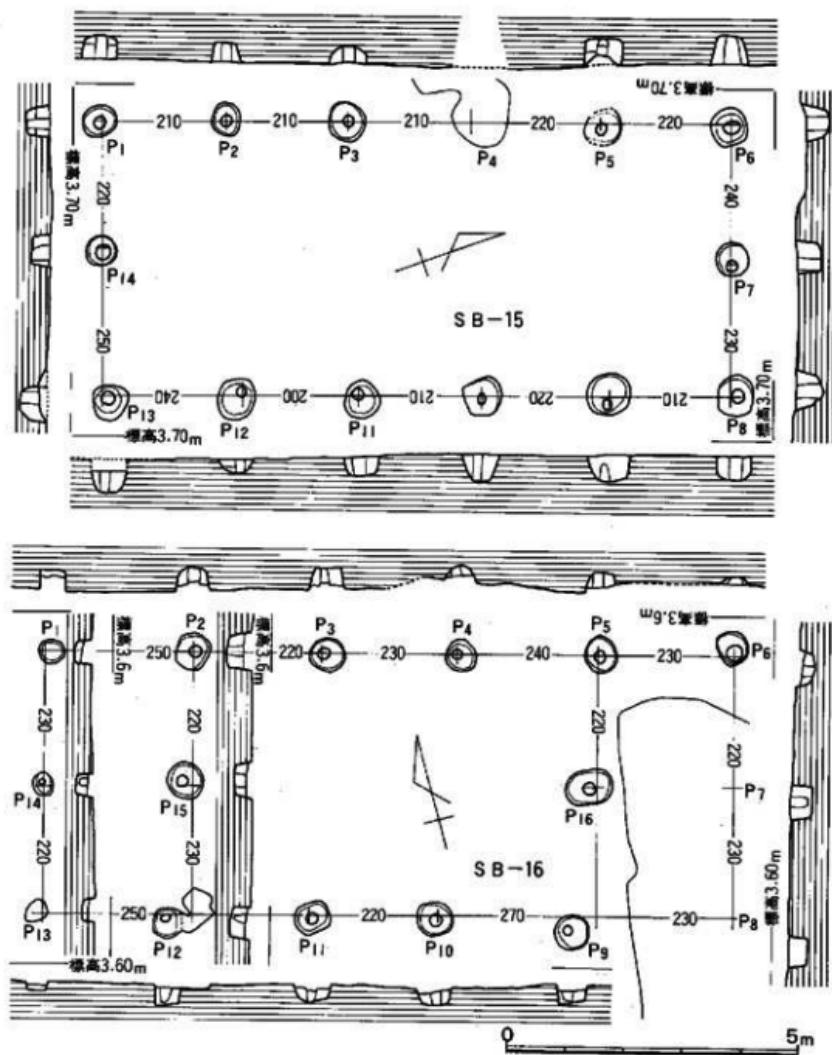


Fig. 61 掘立柱建物(SB-15・16)実測図

1. 造 構

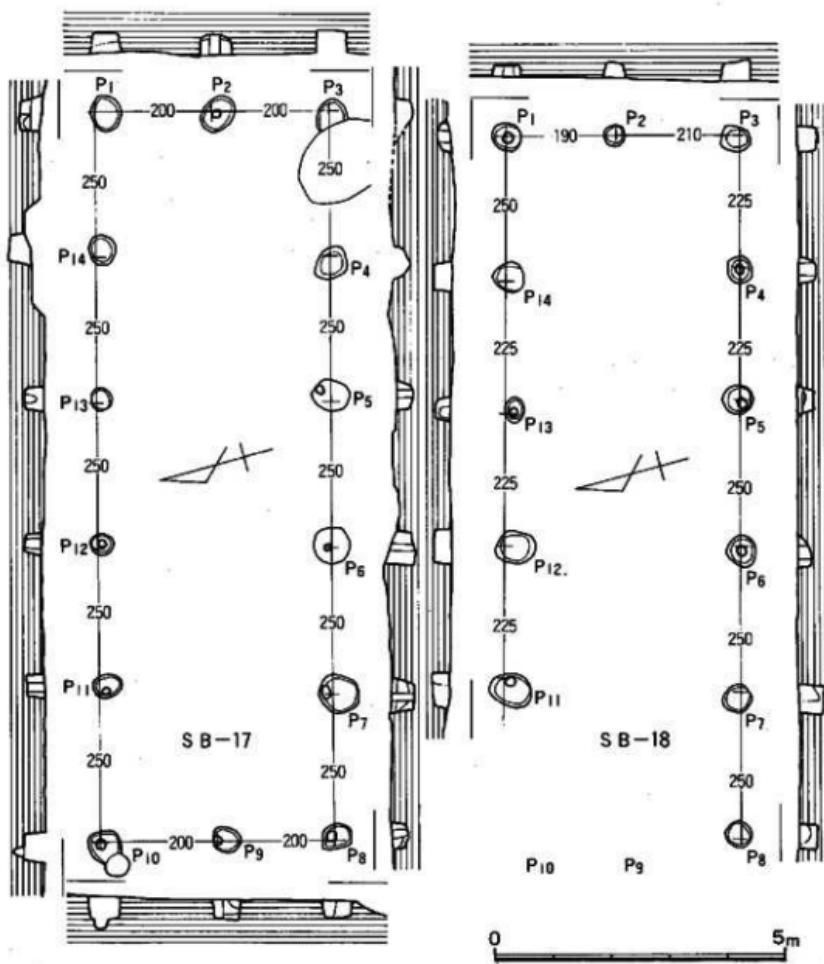


Fig. 62 摂立柱建物 (SB-17, 18) 実測図

跡、P₇は径50cm、深さ32cm、北に片寄って径10cmの柱痕跡、P₈は径36cm、深さ24cm、北に片寄って径11cmの柱痕跡、P₉は径40cm、深さ40cm、北に片寄って径12cmの柱痕跡、P₁₀は径44cm深さ45cm、中央部に径14cmの柱痕跡、P₁₁は径34cm、深さ24cm、西に片寄って径12cmの柱痕跡、P₁₂は

径30cm、深さ22cm、中央部に径12cmの柱痕跡、P₁₃は径34cm、深さ26cm、P₁₄は径40cm、深さ32cmである。

(4) 第18号掘立柱建物 (SB-18) (Fig. 62)

Z-(-1)区南半部、一部Z-0区にかけて検出した。SB-16、SB-19、SB-20、SC-29、SC-30、SC-31と重複関係にある。SB-16、19、20との前後関係は不明。桁行5間、梁行2間の東西棟で、主軸をN-75°Wにとる。桁行9.6m、梁行3.2m、柱間は図示した。各柱穴の掘り方はP₁が径40cm、深さ20cm、中央部に径13cmの柱痕跡、P₂が径30cm、深さ22cm、P₃が径42cm、深さ28cm、P₄が径38cm、深さ24cm、中央部に径12cmの柱痕跡、P₅が径40cm、深さ24cm、西に片寄って径15cmの柱痕跡、P₆が径44cm、深さ20cm、中央部に径15cmの柱痕跡、P₇が径40cm、深さ38cm、P₉、P₁₀はSC-30の埋土中に掘り込まれるために検出できなかった。P₁₁は径50cm、深さ24cm、東に片寄って径12cmの柱痕跡、P₁₂は径46cm、深さ24cm、P₁₃は径36cm、深さ20cm、中央部に径12cmの柱痕跡、P₁₄は径44cm、深さ38cmである。

(5) 第19号掘立柱建物 (SB-19) (Fig. 63)

Z-(-1)区、Y-(-1)区の南半部に検出した。一部発掘区域外にのびる。SB-18、SB-20、SB-22、SB-23、SC-28-31と重複関係にある。掘立柱建物との先後関係は不明。桁行5間、梁行2間の東西棟になると考えられる。主軸方向はN-76°Wである。桁行12m、梁行4.2mで、柱間は図示したとうりである。柱穴掘り方は、P₁が径36cm、深さ14cm、中央部に径10cmの柱痕跡、P₂が径36cm、深さ18cm、中央部に径10cmの柱痕跡、P₃が径38cm、深さ30cm、P₄

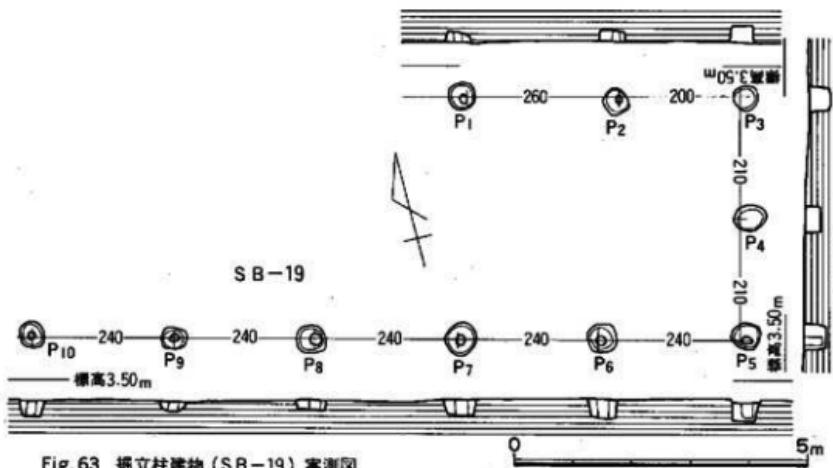


Fig. 63 掘立柱建物 (SB-19) 実測図

1. 造 構

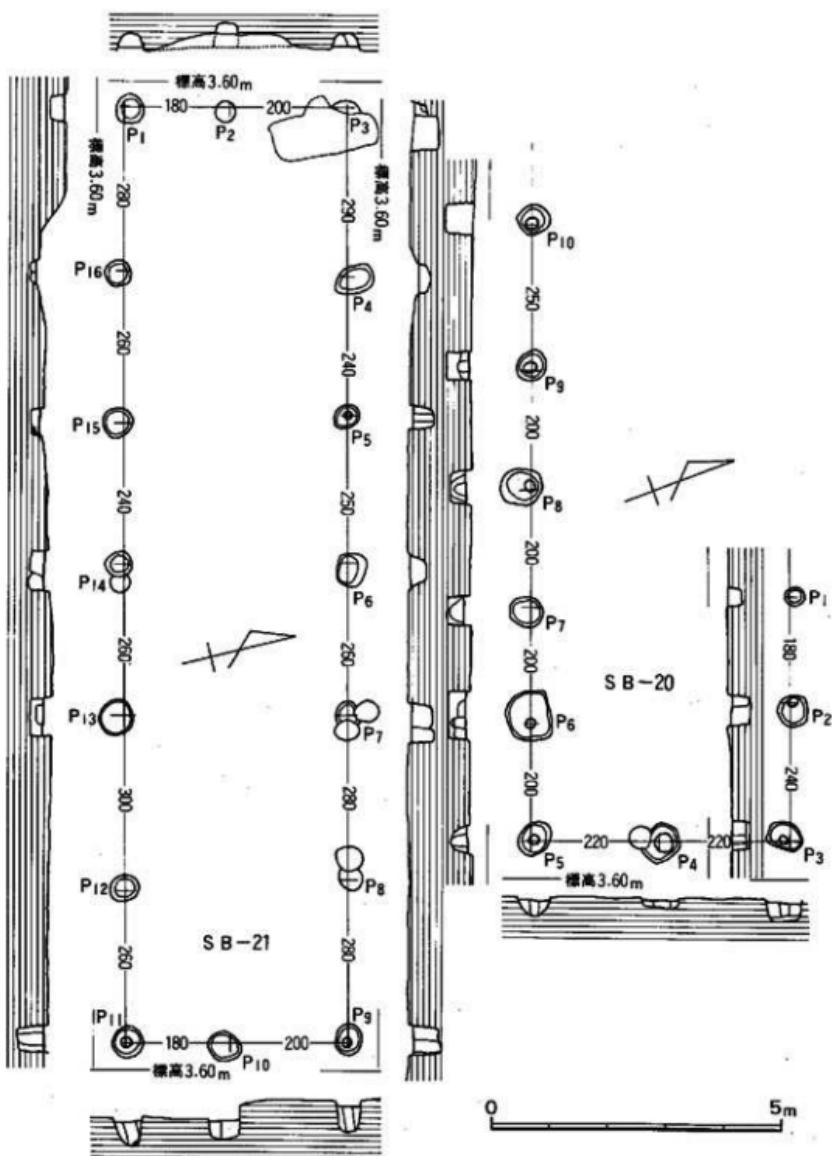


Fig. 64 埋立柱建物 (SB-20・21) 實測図

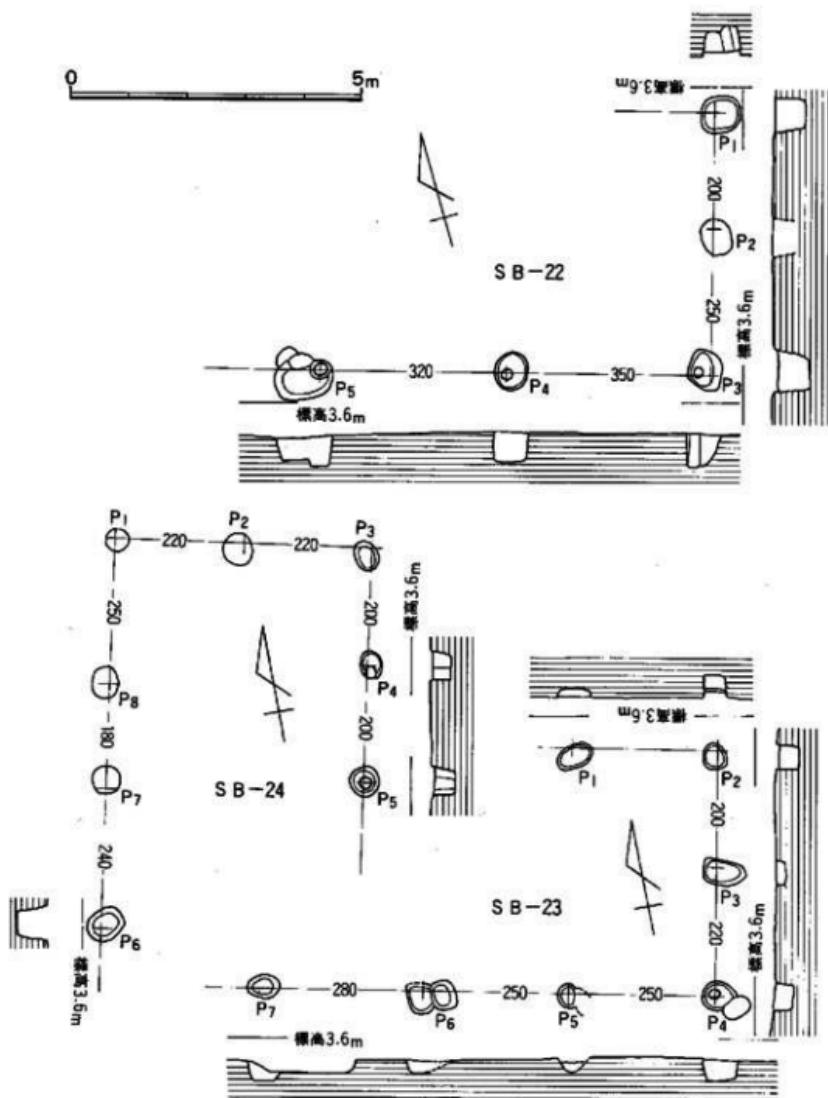


Fig. 65 指立柱建物(SB-22・23・24)実測図

1. 造 構

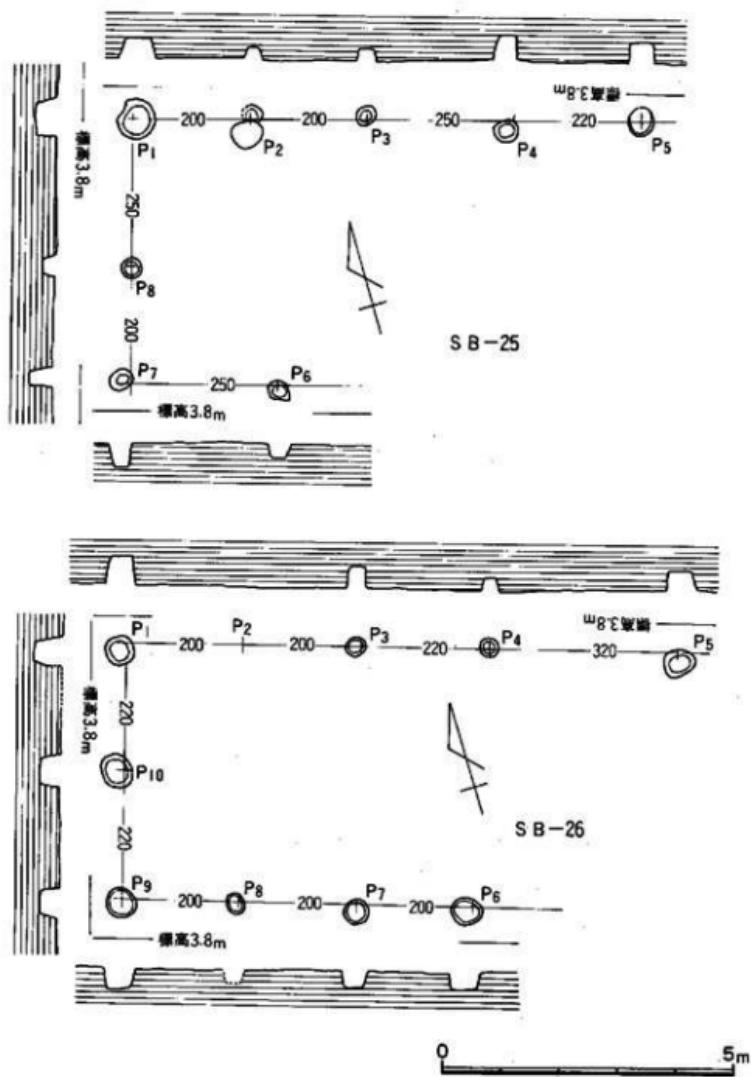


Fig. 66 振立柱建物 (SB-25・26) 実測図

が径46cm、深さ20cm、P₅が径42cm、深さ30cm、南に片寄って径12cmの柱痕跡、P₆が径42cm、深さ28cm、中央部に径18cmの柱痕跡、P₇が径46cm、深さ22cm、中央部に径18cmの柱痕跡、P₈が径44cm、深さ14cm、東に片寄って径16cmの柱痕跡、P₉が径36cm、深さ14cm、中央部に径14cmの柱痕跡、P₁₀が径38cm、深さ22cm、中央部に径12cmの柱痕跡がある。

(6) 第20号掘立柱建物 (SB-20) (Fig. 64)

Z-(−1) 0区にわたって検出した。SB-16、SB-18、19、22、SC-27~31と重複関係にある。柱穴がSC-27~31の埋土中に掘り込まれるため一部検出できなかつたところがある。桁行5間、梁行2間の東西棟になると想られる。主軸方向はN-69°-Wである。桁行10.5m、梁行4.4m、柱間は図示したとおりである。柱穴の掘り方はP₁が径30cm、深さ20cm、P₂が径42cm、深さ24cm、西に片寄って径12cmの柱痕跡、P₃が径50cm、深さ26cm、東に片寄って径14cmの柱痕跡、P₄は径50cm、深さ10cm、中央部に径26cmの柱痕跡、P₅は径50cm、深さ22cm、中央部に径16cmの柱痕跡、P₆は径76cm、深さ25cm、やや東に片寄って径14mの柱痕跡、P₇は径38cm、深さ24cm、P₈は径60cm、深さ22cm、北に片寄って径16cmの柱痕跡、P₉は径46cm、深さ32cm、中央部に径20cmの柱痕跡、P₁₀は径48cm、深さ40cm、北に片寄って径18cmの柱痕跡がある。

(7) 第21号掘立柱建物 (SB-21) (Fig. 64)

Z-0区、Y-0区北半部に検出した。SD-04と重複関係にあり、明らかにSD-04に先行する建物である。桁行6間、梁行2間の東西棟で本遺跡、最大の建物である。主軸方向をN-76.5°-Wにとる。柱穴掘り方は、P₁が径38cm、深さ20cm、P₂が径28cm、深さ15cm、P₃は搅乱にあたり一部を残す、深さ18cm、P₄は径56cm、深さ18cm、P₅は径40cm、深さ30cm、中央部に径10cmの柱痕跡、P₆は径48cm、深さ24cm、P₇は他の柱穴と切り合う。径36cm、深さ30cm、P₈は径32cm、他の柱穴と切り合う。P₉は径44cm、深さ38cm、中央部に径14cmの柱痕跡、P₁₀は径50cm、深さ28cm、P₁₁は径42cm、深さ36cm、中央部に径16cmの柱痕跡、P₁₂は径41cm、P₁₃は径52cm、深さ19cm、P₁₄は径48cm、深さ20cm、他の柱穴と切り合う。P₁₅は径43cm、深さ12cm、P₁₆は径38cm、深さ9cmである。

(8) 第22号掘立柱建物 (SB-22) (Fig. 65)

Z-(−1)区、Y-(−1)区南半部に検出したが、未調査区にのびる。SB-19、SB-20、SB-23、SC-27~30と重複関係にある。SB-19、20、23との先後関係は不明。桁行2間以上、梁行2間の東西棟で、主軸方向をN-73°-Wにとる。桁行6.7m以上、梁行4.5m、柱間は図示したとおりである。柱穴の掘り方は、P₁が径52cm、深さ40cm、P₂が径50cm、深さ32cm、P₃が径61cm、深さ48cm、西に片寄って径12cmの柱痕跡、P₄は径52cm、深さ44cm、西に片寄って径16cmの柱痕跡、P₅は径78cm、深さ44cmである。

(9) 第23号掘立柱建物 (SB-23) (Fig. 65)

Z-0、(−1)区、Y-0、(−1)区にわたって検出した。SB-19、SB-22と重複関係にあ

1. 建 構

るが、先後関係は不明。桁行3間以上、梁行2間の東西棟で、主軸方向をN-78°-Wにとる。桁行7.8m以上、梁行4.2m、柱間は図示のとおりである。柱穴掘り方は、P₁が径53cm、深さ5cm、P₂が径37cm、深さ28cm、P₃が径58cm、深さ14cm、P₄が径50cm、深さ30cm、西に片寄って径16cmの柱痕跡、P₅が径34cm、深さ14cm、P₆が径62cm、深さ18cm、P₇が径44cm、深さ28cmである。

(10) 第24号掘立柱建物 (SB-24) (Fig. 65)

Z-0区北半部に検出した。SD-04と重複関係にあり、SD-04との先後関係は不明。桁行3間以上、梁行2間の南北棟で、主軸方向をN-13°-Eにとる。桁行6.6m以上、梁行4.4m、柱間は図示したとおりである。柱穴掘り方はP₁が径32cm、P₂が径40cm、P₃が径44cm、P₄が径40cm、深さ25cmで南に片寄って径18cmの柱痕跡がある。P₅は径42cm、深さ28cm、中央部に径18cmの柱痕跡、P₆は径54cm、深さ44cm、P₇は径40cm、P₈は径44cmである。

(11) 第25号掘立柱建物 (SB-25) (Fig. 66)

Z-0、1区にわたって検出した。SD-24、SB-26と重複関係にある。SD-24より先行するか同時である。桁行4間以上、梁行2間の東西棟で、主軸方向をN-74°-Wにとる。柱穴掘り方は、P₁が径54cm、深さ30cm、P₂が径24cm、深さ12cm、P₃が径32cm、深さ18cm、P₄が径36cm、深さ36cm、P₅が径41cm、深さ29cm、P₆が径36cm、深さ20cm、P₇が径34cm、深さ32cm、P₈が径29cm、深さ20cmである。

(12) 第26号掘立柱建物 (SB-26) (Fig. 66)

Z-0、1区にわたって検出した。SB-25、SD-25と重複関係にあるが、先後関係は明らかにしがたかった。桁行4間以上、梁行2間の東西棟で主軸方向をN-73°-Wにとる。桁行9.4m以上、梁行4.4m、柱間は図示したとおりである。柱穴掘り方はP₁が径42cm、深さ42cm、P₂は検出できなかった。P₃は径29cm、深さ32cm、P₄は径28cm、深さ20cm、P₅は径45cm、深さ28cm、P₆は径44cm、深さ23cm、P₇は径36cm、深さ24cm、P₈は径31cm、深さ19cm、P₉は径43cm、深さ30cm、P₁₀は径50cm、深さ28cmである。

(13) 第4号溝 (SD-04)

第1～3次調査区より連続し、C-1区、C、B、A、Z、Y、X、W-0区に検出した。溝幅は4m～11.5mを測り、いたる所に括幅部があつて一定しない。深さ40～50cm程度で、溝底は東から西へ傾斜する。溝底には砂層が堆積する。覆土は大別し3層に分けられる。出土遺物は多量で下層が8世紀中頃、上層が10世紀の遺物が多い傾向があるが、流路が変わりながら搅乱堆積するために、はっきりした区別は困難である。また、出土遺物も溝底出土品と上、中層出土品が接合する例が多いことからも、その搅乱が推測される。

(14) 第24号溝 (SD-24)

A、Z、Y-1区、Y、X-0区に検出した。溝幅1.6m～2m、深さ40cm～50cm、溝底は東から西へ傾斜する。断面はU字形であるが、溝底にさらに掘り込みがあり二段掘りになつていて

る。溝底には砂が堆積し、若干の遺物がある。須恵器、土師器、製塙土器で8世紀中～後半のものである。西側でSD-04と重複し、SD-04に切られている。ただし、溝底の痕跡が残る部分とそうでない部分があり、この溝が存続していたときには、SD-04と交差、合流していたものと考えられる。東端は発掘外にのびるが、SD-26と合流するものと考えられ、一つの区画をつくり出している。溝の主軸方向はN-19°-Eで、ほぼ条里の区画線と一致することは注目される。

(15) 第25号溝 (SD-25)

A、Z-1区に検出した。溝幅1m、深さ30cm、断面U字形をなす。東端は搅乱のため不明、西端はSD-04と連接し合流する。土師器、縁釉陶器が出土している。

(16) 第26号溝 (SD-26)

B-1区に検出した。SD-04より分岐し南西に流れる溝で、幅1.5m、深さ40cm～50cm二段に掘り込まれ、形態はSD-24と同様でSD-24に連接するものと考えられる。遺物は少く、小破片で時期的に決定できない。

(17) 第26号土塙 (SK-26)

A-(-1)区に検出した。SB-15の北側約1.5m離れている。3.5m×3mの楕円形プランで深さ15cmの浅い凹みである。白磁器、土師器の小片が出土している。

(18) 第27号土塙 (SK-27)

A、B-(-1)0区に検出した。SK-26と並んでいる。8.5m×4mの不整楕円形プラン。深さ10cmの浅い皿状の凹みであるが、北に片寄って2.85m×1.5mの楕円形プランで深さ20cmの掘り込みがある。土師器、須恵器、白磁器、土塙、瓦等が出土する。遺物の組み合せはSD-04と同じである。

2. 遺物各説

(1) 施釉陶器 (Fig. 67～75)

① 越州窯系青磁器 (Fig. 67～69)

量的に多く、器形は碗、皿、脚付皿、鉢、椀(蓋か)合子、水注と多様である。以下、各器種ごとに説明する。

椀 (Fig. 67, 68)

底部形態によって以下のように分類できる。I類、蛇ノ目高台、II類、幅広の輪高台、III類、輪高台、IV類、平底の5類、さらに精製品と下手物の区別があり、これをA、Bに分け、器形、大きさで小分類し1、2…と分類する。

I類A-1 (1～7) 口径14～15cm、器高4.5～5cmで底部が3直線的にのびる器形、釉は青緑色～緑黄色。全面施釉のもの(1～3、6、7)、外底部に施釉しないもの(4、5)が

2. 遺物各説

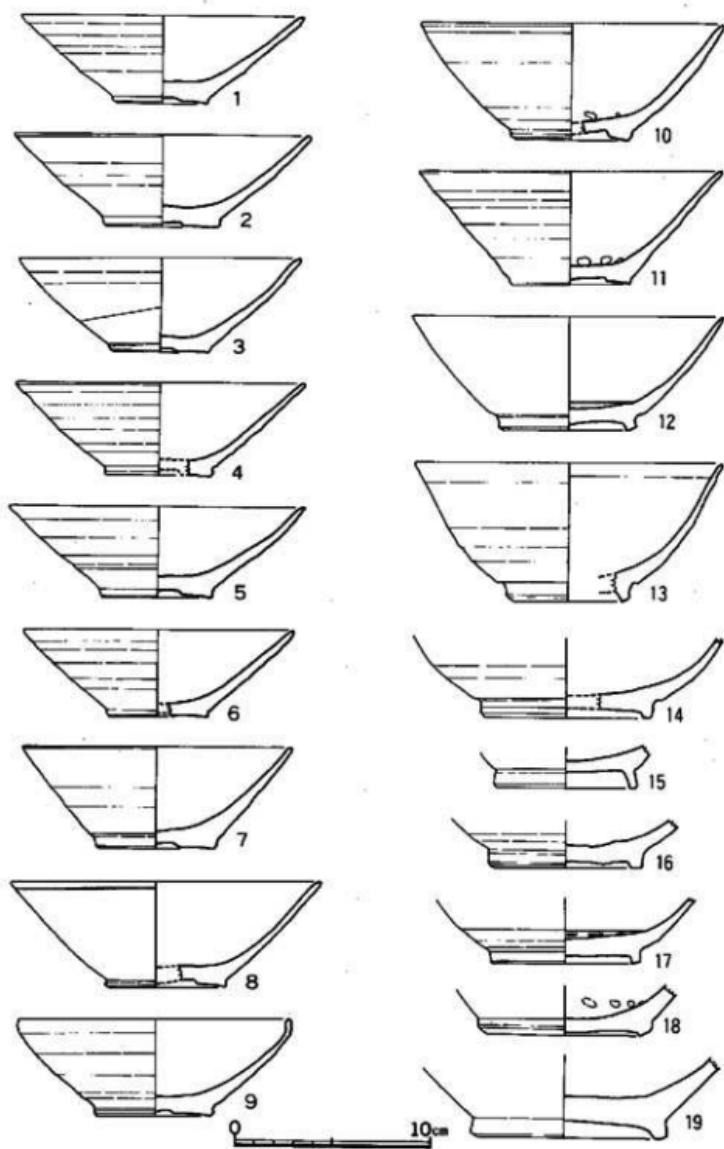


Fig. 67 越州窯系青磁器実測図 I

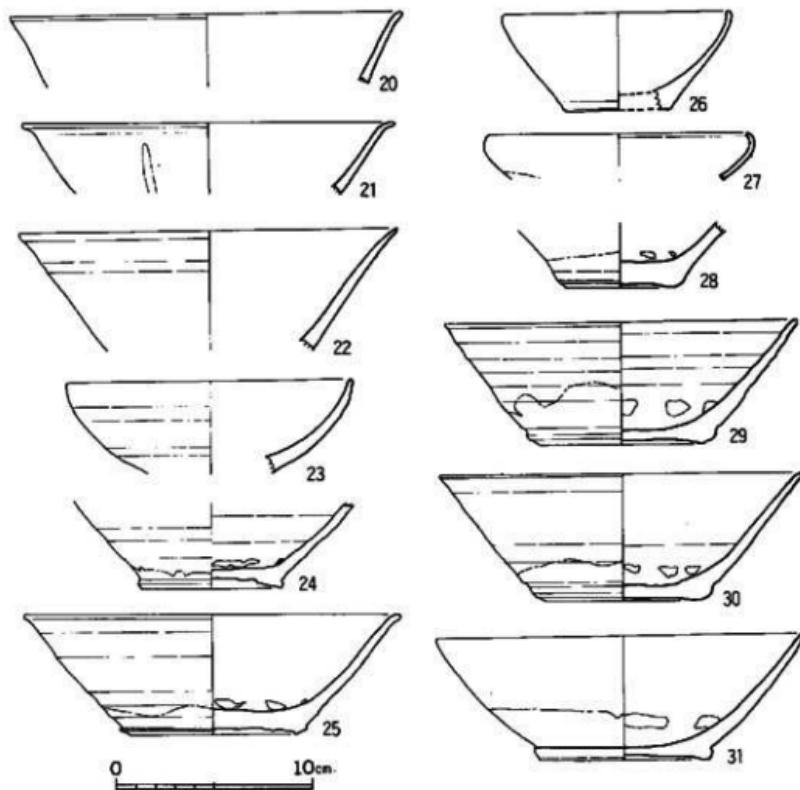


Fig. 68 越州窯系青磁器実測図II

ある。4、5は釉の剥離が著しい。外底部の目跡の数の違いがあり、1は5個、2、3は6個、5、6は7個、7は8個である。

I類A-2(8) 口径16cm、器高5.5cm、とやや大きく、口縁に沈線1条があげぐる。釉は緑黄色、タタミつきに施釉されない。目跡は9個(?)である。

I類A-3(9) 口縁が内傾するもの、全面施釉で、釉色は黄緑色、目跡は7個である。口径14.1cm、器高5cm。

II類A(10、11、24) 1、2類に細別でき1は10、11、全面施釉、内外面に目跡11個をもつ。2は24で底部が糸切りで沈線を入れ高台をつくり出す。底部は無釉、目跡は6個。1、2

2. 遺物各説

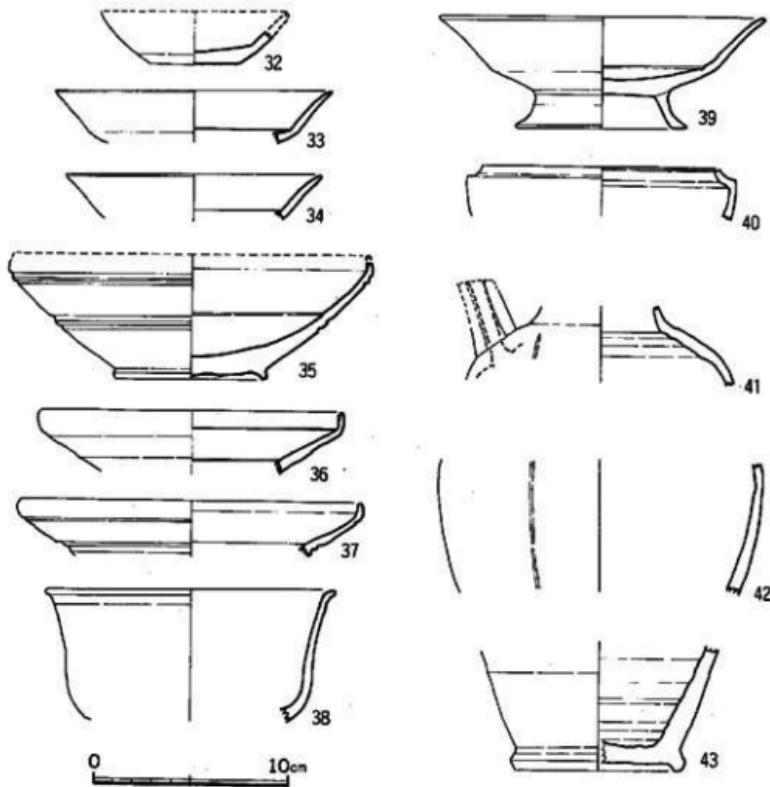


Fig. 69 越州窯系青磁器実測図III

類は釉色は淡黄緑色である。

III類A (12~23) 底部形態より6類に細別できる。1は12、13、2は14、3は15、4は16、5は17、6は18、19である。2は外底高台の内側に目跡があり、5は内、外底に目跡を残す。かなりの大小があり、口縁部の形態は20~22の外反するものと内傾するものがある。

III類B (25) 底部、体部下部に施釉しないで身込みに目跡を残すもの。削り出しの低い高台。

IV類B (26~31) 器形の大小、口縁部形態で6類に細別できる。各個体が代表するものである。体部下半は無釉で、タタミつきおよび、身込みに目跡を残す。釉が剥離するものもある。

III (Fig. 69—32~34, 39)

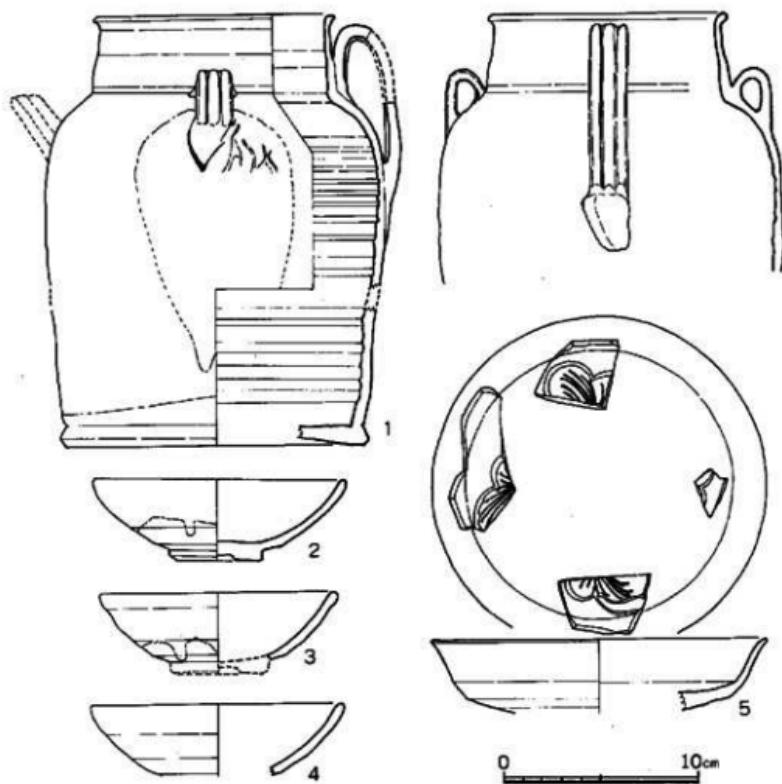


Fig. 70 長沙窯青磁器実測図

形態、大小で3類に細別できる。1類が32、2類が33、34、3類が39で、特に39は珍しい。

蓋（椀）(Fig. 69—35～37)

低い高台をもち、口縁部でたちあがり内傾する。体部、口縁に沈線をめぐらす、蓋か椀になるものと考えられるが確定できない。

鉢 (Fig. 69—38)

体部が直線的にたちあがり、口縁が外反する。底部は失うが、高台をもつものであろう。

合子 (Fig. 69—40)

身の部分の破片、蓋受けのたちあがりは内傾し、端部はヘラ切りで平担にする。蓋なし。

2. 遺物各説

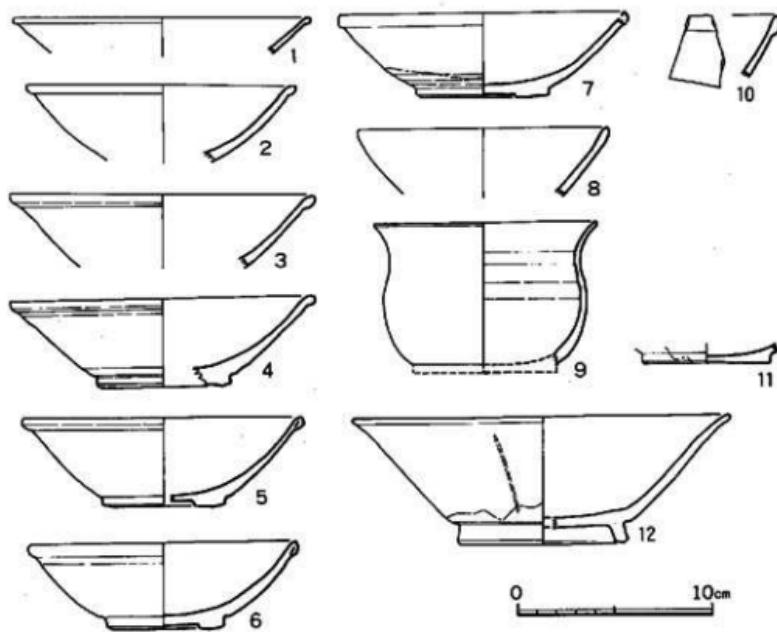


Fig. 71 白磁器実測図

水注 (Fig. 69—41～43)

同一軸体と考えられる。瓜割りの体部で底部は輪高台、注口は八角形に面取りされる。

② 長沙窯産磁器 (Fig. 70)

水注、椀、盤があり、越州窯系青磁器に比べて量は極めて少い。1は水注で、ほぼ1個に復原できる。軸は外面と口縁部内側に施し底部と体部内面に施さない。注口は八角形に面取りするもので、側面に耳をつけ後に把手がつく。貼花文は何をあらわしたか明らかにできないが、注口、耳の下部にあったものと考えられ、その部分は褐釉を施す。褐釉は発色が悪く黒色に近い。他は青緑色である。口径22.4cm、器高22cm、2～4は椀である。口径12～13cm、器高4cm前後の小形品、底部は径5cm前後で高さ0.5cmの粗雑なつくりの蛇ノ目高台である。底部から体部へ移行する部分は水平に近い感じでヘラ削りされる。体部は内傾しながらちあがり、口縁部は若干肥厚し、内傾する。体部下半と底部は無釉である。釉は黄色～青緑色と変化がある。5は盤、口縁部破片と身込み破片がある。底部を欠くが概略の器形はわかる。体部は接線をもつ

て屈曲したちあがる。全面に黄色の強い黄緑色釉をかけ、見込み部分に綠釉で花卉を繪どり、内部に褐釉でおしへ状の細線を描く。いわゆる黄釉褐綠彩花文盤である。

④ 白磁器 (Fig. 71)

かなりの量出土している。器形的には單一的で椀が大部分、一部壺ではないかと考えるものがある。椀は底部が蛇ノ目高台ないしは幅広の輪高台でややふくらみながらたちあがり口縁に玉縁をもつものである。玉縁の形態から4類に細別できる。1類(1)は極めて玉縁が小さく、器壁も薄い。2類(2~4)は1類に比較し玉縁がやや大きくなるもの。3類(5、6)は玉縁の大きさは2類とかわらないが、明らかに折りまげて形成したもので折りまげの痕跡を残す。4類(10)は、玉縁がさらに大きくなり、やや扁平な感じになるものである。以上の4類は釉色に若干の違いがあり、純白のものからやや黄色のまじるような色までさまざまである。施釉は底部を除いた全面にかかる。底部高台は釉かけ後、削られるものがある。8は玉縁がない椀である。9は作図復原したもので壺になると考えるものである。体部がややふくらみ口縁は外反する。11は底部で半底をなす。12は輪高台の椀で底部には釉はかけない。他の白磁よりにごりがあり、青味がかっている。時代的におくれるものかもしれない。

④ 三彩水注(巻頭図版1、Fig. 72)

三彩水注で、口縁部と底部の一部を欠くのみではほぼ完形に近い。平底で、底部からやや外傾気味にたちあがるが、すぐに屈曲し内傾しながらたちあがり頭部にいたる。首は垂直にたちあがり口縁は強く外反する。注口は八角形に面取りする。把手は粘土紐3本を組み合せて貼りつけたものである。口径7.5cm、頸部径5.5cm、胴部最大径は胴下半にあり17.1cm、底部径13cmである。釉は外面の全面と内面は肩部付近の一部を除いて全面に施される。白釉部分は胎上の關係からか発色が悪く、緑がかれている。その上に綠釉を流し文様効果をあげているが、この施釉は注口~把手を軸としてほぼ左右対象になるようにしている。把手部分に褐釉がみられる。口縁内側も四分割する如く綠彩がある。胎上は白色で良質。

製作地は現時点ではきめがたい。日本産である可能性も強い。

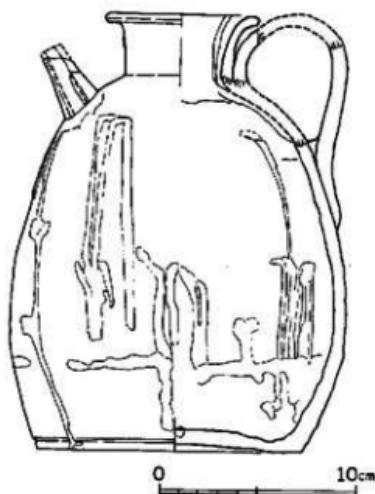


Fig. 72 三彩実測図

2. 遺物各説

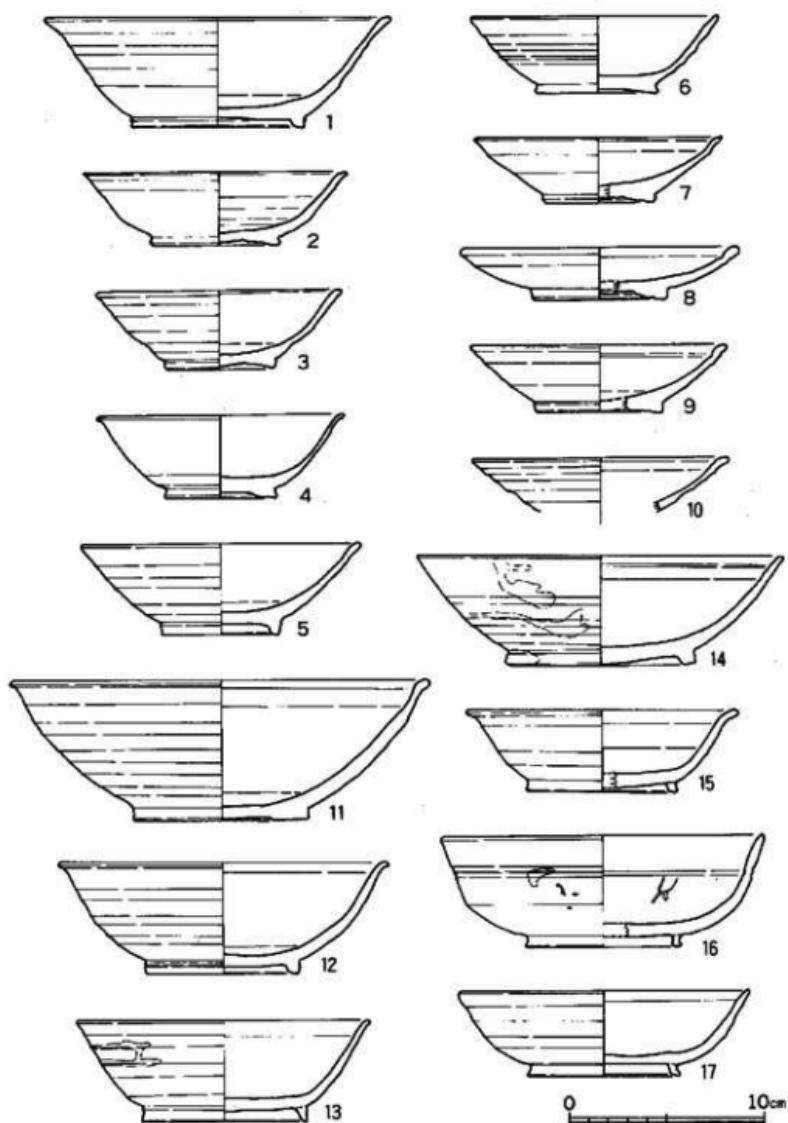


Fig. 73 緑釉陶器実測図 I

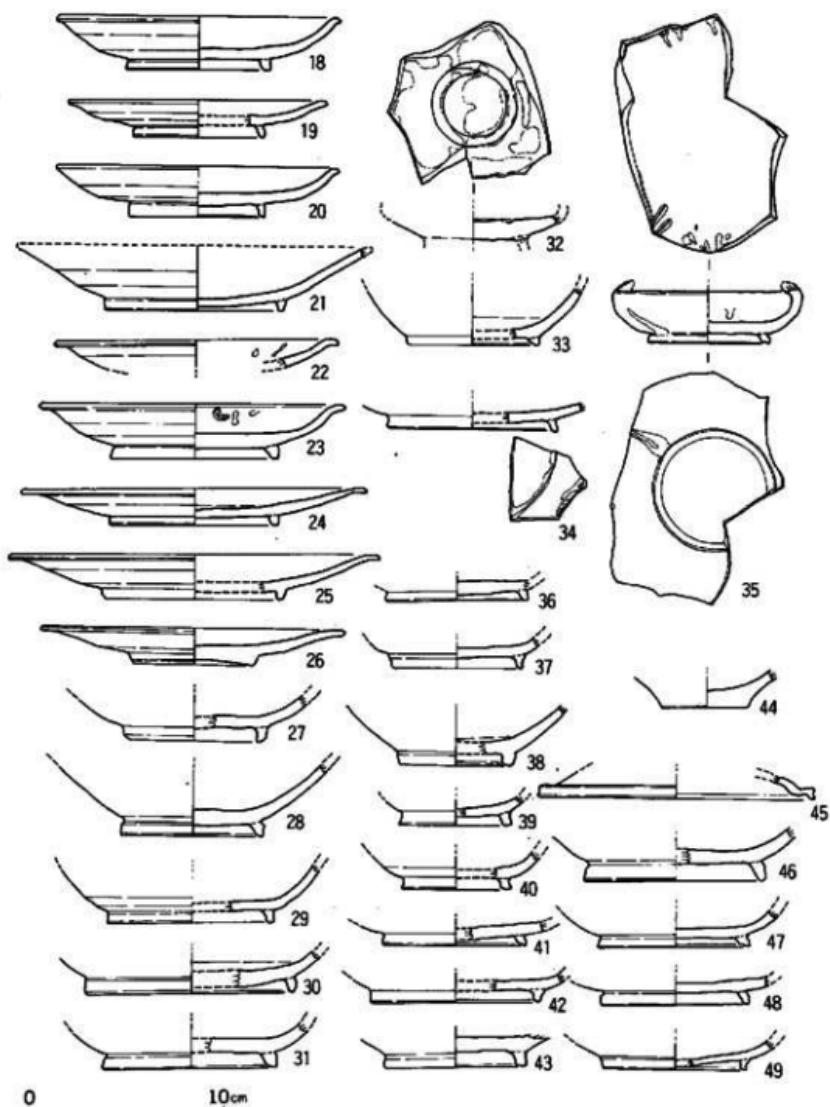


Fig. 74 緑釉陶器実測図II

2. 遺物各説

⑤ 緑釉陶器 (Fig. 73, 74)

施釉陶磁器の中では越州窯系青磁器について量が多い。器種は碗、皿、耳皿、蓋、水注がある。器形的にバラエティに富み、产地が広域にわたっていると考えられる。整理が不充分であるが、概括的に説明する。

1～5、6～10は胎土、焼成が須恵質で硬く焼けている。釉も濃緑色で他の緑釉陶器とは一見して識別できる。1、5は輪高台で口縁が外反する。2、3、4は底部端が外へ張り出し、底部に太い沈線をめぐらし、蛇目高台状にしている。口縁はわずかに外反する。小形品で、外底部には施釉しない。7は前者と同様の底部をもつが、口縁上端部で屈曲したちあがりながら外反する。6は円盤貼付状の底部で、口縁部は直線的で丸くおさめる。8、9は底部は蛇目高台状で、口縁部内面が肥厚する。浅く皿状になる。10は口縁が肥厚せず外反するものである。以上は京都洛北窯産である。

以下の緑釉陶器は焼成は軟質で、胎土は赤褐色～白色までの多種で、釉も白釉に近いものから、淡緑色、緑色と多様である。

11は幅広の削り出し高台で低い、口縁は端部で強く外反する。大形の碗で口径21.2cm、器高7.2cm。全面施釉である。14は削り出しの輪高台、口縁は直線的で丸くおさめる。これも人形の碗で、口径18.6cm、器高5.7cm。11、14は京都洛北窯産である。

12、13、15は口縁部が外反し、底部は輪高台、高台にはそれぞれ異った特徴がある。12は削り出し高台、13、15は貼り付けの高台である。16、17は貼り付け高台で端部が外へ張り出す。口縁は直口する。いずれも長門産の緑釉陶器か。

18～21は皿である、貼りつけの輪高台で口縁はあまり外反しない。やや深みがある。22、23は口縁が外反する。24、25は輪高台の底部で、浅い皿で、口縁は外反し、下にさがる。以上は長門産の可能性が強い。26は円盤貼り付け状の底部で口縁は外反しなく直線的である。京都洛北窯産。

32、35は耳皿である。32は輪高台の底部であるがはずれている。体部を欠損するが、たちあがり状態から耳皿であることがわかる。35は大形の耳皿である。底部は貼り付けの高台で、端部に段をつけている。耳皿端部まで現存していないので耳にひだがあったか無かったかは不明、口縁部に濃緑色の釉と条線状に流し文様効果をあげている。全面施釉である。耳皿はこの2点の他に1点あるが図示していない。いずれも長門産の可能性が強い。

45は蓋で同様の器形をなすものは10数点ある。口縁端部が屈曲し下にさがる。

図示していないが、水注は把手部分のみである。2本の粘土紐を組み合せたもので、薄い釉がかけられる。

他は底部破片である。削り出し高台と貼り付け高台の二種類がある。

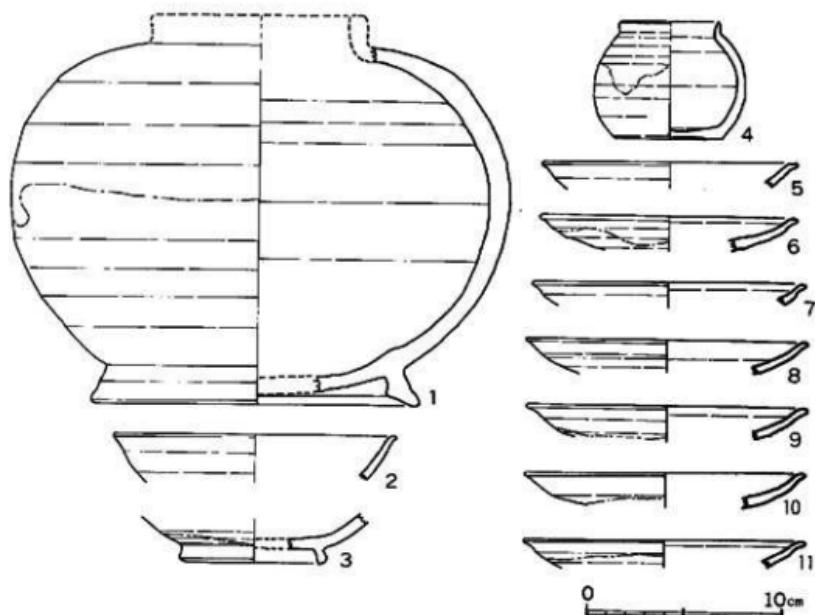


Fig. 75 灰釉陶器実測図

(6) 灰釉陶器 (Fig. 75)

11個体の灰釉陶器があるが、青磁器、白磁器、綠釉陶器に比較し、その量はきわめて少い。器種には壺、椀、皿がある。

1は大形の短頸壺で、口縁がないかほぼ全形は復原できる。口径10.5cm前後、胴部最大径25.5cm、脚台径16cm、胴部はやや扁平な球形をなす。胴上半部に施釉され、一部は釉が垂下している部分がある。

2、3は碗、2は口縁部である。直線的にのび、端部でわずかに外反する。3は底部、やや高い輪高台である。底部付近には施釉していない。

4は小形の壺、%程度を残している。全体に丁寧なつくりである。口縁部はわずかにたちあがり、先端は丸くおさめる。体部は球形で、底部は安定した平底である。釉は胴上半部にかけられる。胎土は精良で焼成は堅致である。口径5.3cm、器高6cm、底部径5.5cmをはかる。

5~11は皿の口縁部破片である。いずれも口縁端部がわずかに外反する。口径14cm~15cmである。外面の釉は口縁のみに施される。

2. 遺物各説

(2) 須恵器 (Fig. 76~81)

SD-04から出土したものが大部分である。量的に非常に多く整理が終了していない。器形は壺、皿、蓋、甕、高壺、壺、三耳壺、長頸瓶、無頭壺等がある。量的に多いのは壺で、甕、壺類は少い。

壺は蓋受けのたちあがりのある6世紀後半を最古とするが、この時期の量は少い。高台付の壺は各時期を含んでいる。また、高台のない壺も量的に多い。蓋も各時期のものがそろっている。甕類は大形品がほとんどであるが、個体数として20個前後である。壺は各種のものがふくまれる。108の瓶はやや焼けひずみがあるが、胴部に擦痕でシグザグ文様を付して新羅焼の可能性もある。

(3) 土師器 (Fig. 82, 83)

SD-04から出土したのが大部分である。膨大な量で、整理が終了していない。数万個体ある。器種として壺、蓋、皿、耳皿、高壺、盤、托、甕がある。甕の量は比較的少い。また、移動式のカマドもあるが、量的には甕と同じ量である。

壺には高台付のものと丸、平底のものがある。最も量的に多い。後出するものに糸切り底をもつものがあるが、量的に少い。胎上も他と違い他より搬入された可能性もある。図示したのは壺のごく一部である。須恵器同様に6世紀後半から、10世紀前半まで各時期そろっているが、量が増加するのは8世紀中頃からである。

皿も大小そろっている。量は壺について多い。高壺、盤は量的に少い。耳皿は数10個体出土している。底部形態に差異があり平底の底部(26)から円筒状に高くなるものまである。時期的な差であるか否かは明らかにできない。

土師器を再利用したものに21に示した紡錘車(紡輪)がある。底部を利用したもので径5.3cm、厚さ1cm、中心に径0.7cmの孔を開ける。

(4) 黒色土器

図示していないが、黒色土器がある。量的には須恵器について多い。すべてが杯で、高台をもつものである。器形、高台の形態に若干の差異がある。内黒の土器と、内外面とも黒色をなすものがある。器面はヘラで研磨しているが、ほとんどが保存状態が悪い。底部外面にヘラ記号をもつもの数点がある。

(5) 砥 (Fig. 84-1~3)

砥は3個体出土している。いずれもSD-04の出土で、2点が円面砥、1点が風字二面砥である。

1は陸と海の境は不明瞭で、陸は丸味をもっている。外堤を貼付することによってからうじて海が形成される。外堤の下位に突帯をめぐらす。圓台部には方形の透しを八個所に入れる。焼けひずみがある。外堤径12.9cm、圓台端部径16.8cm、器高7.6cmをはかる。2は1よりやや

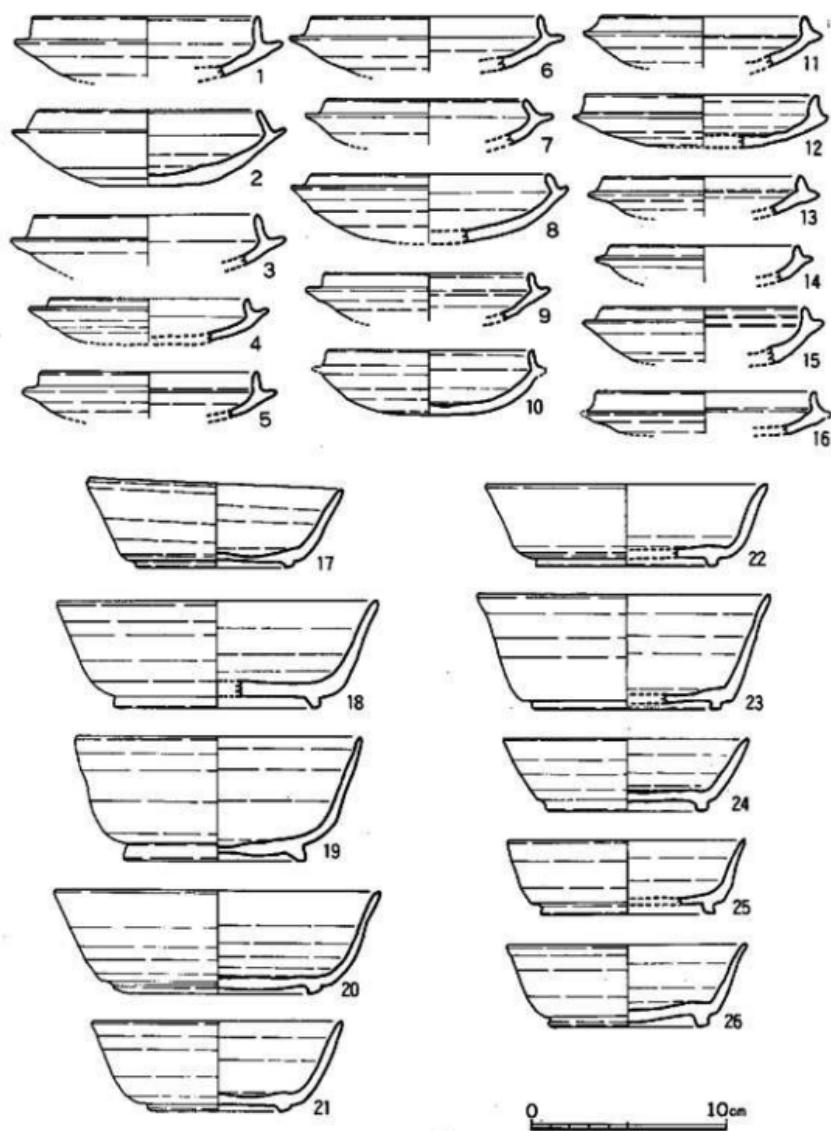


Fig. 76 須恵器実測図 I

2. 遺物各説

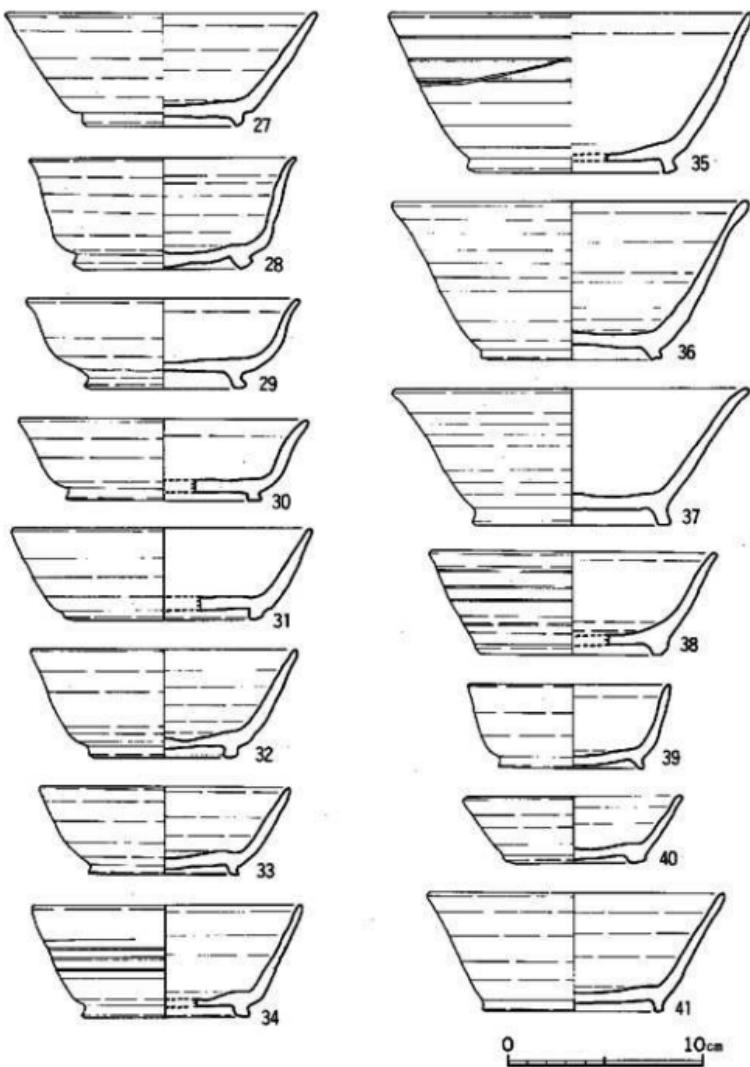


Fig. 77 須恵器実測図II

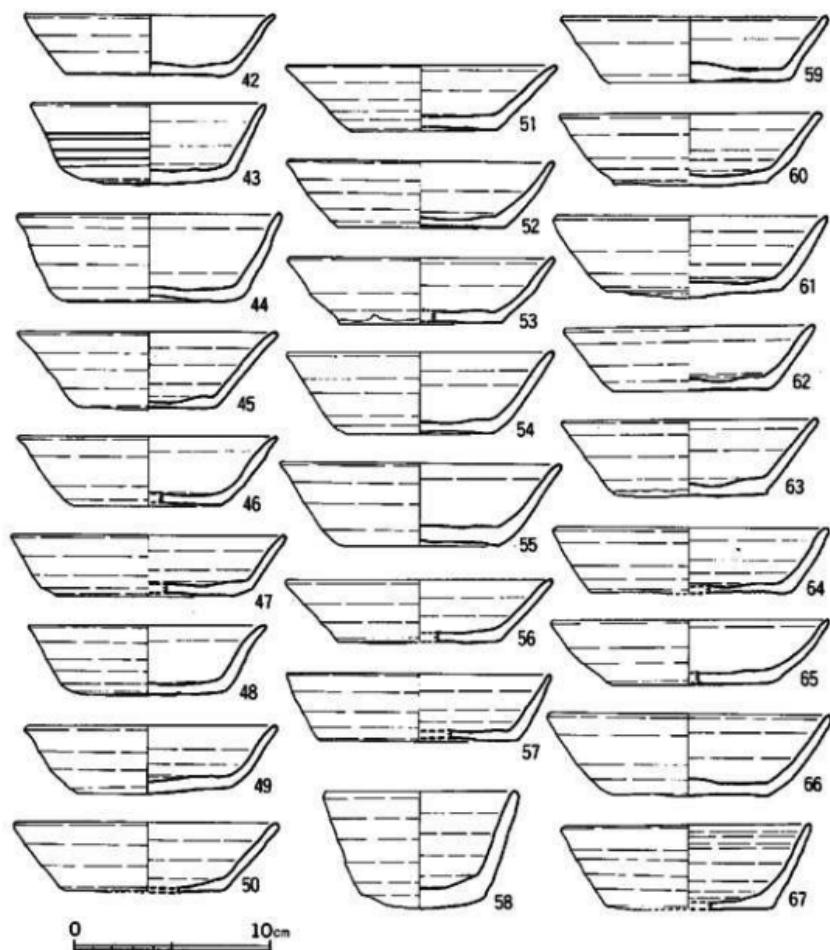


Fig. 78 須恵器実測図III

2. 遺物各説

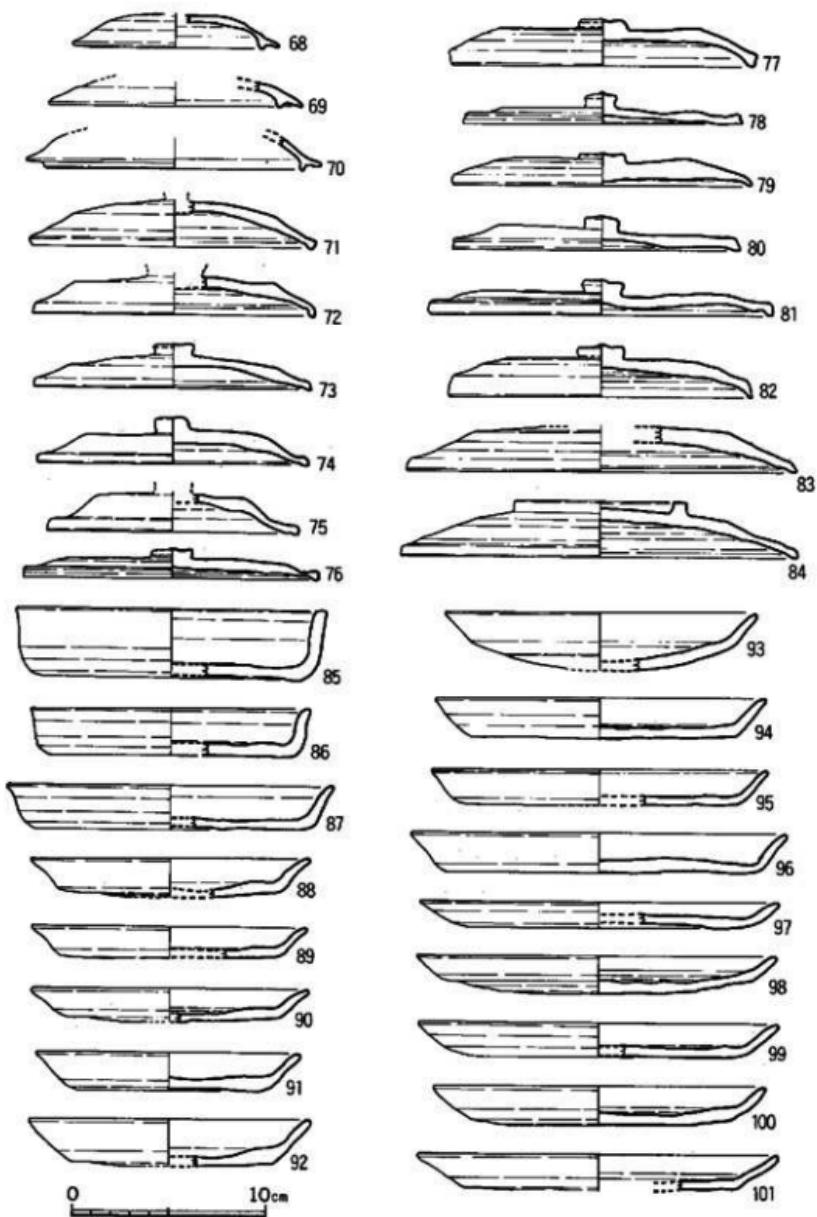


Fig. 79 献器実測図 IV

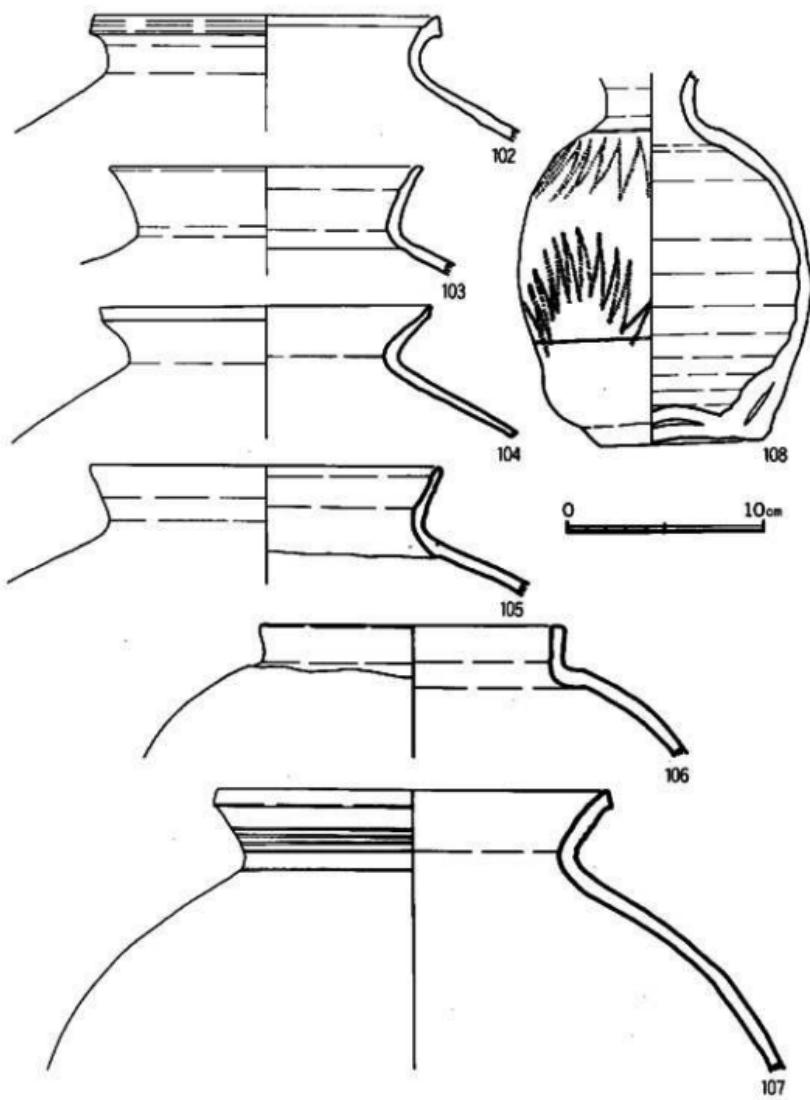


Fig. 80 須恵器実測図V

2. 遺物各説

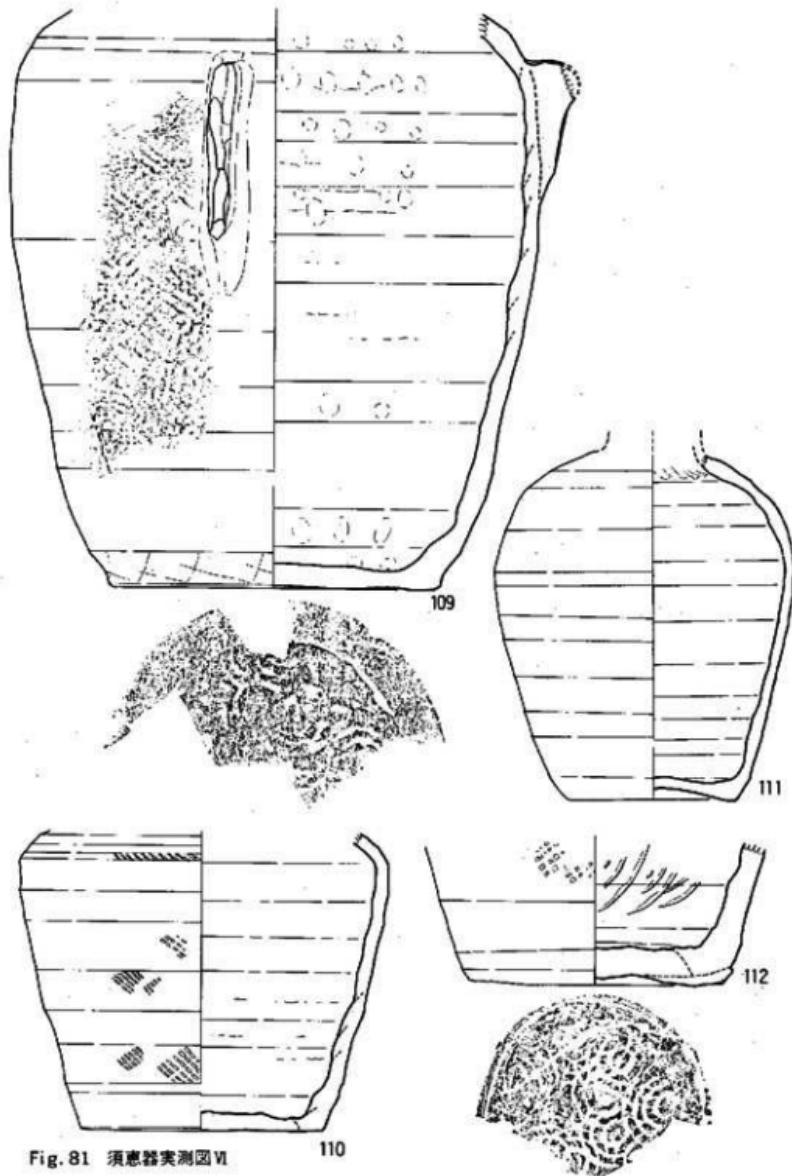


Fig. 81 須恵器実測図VI

110

0 10cm

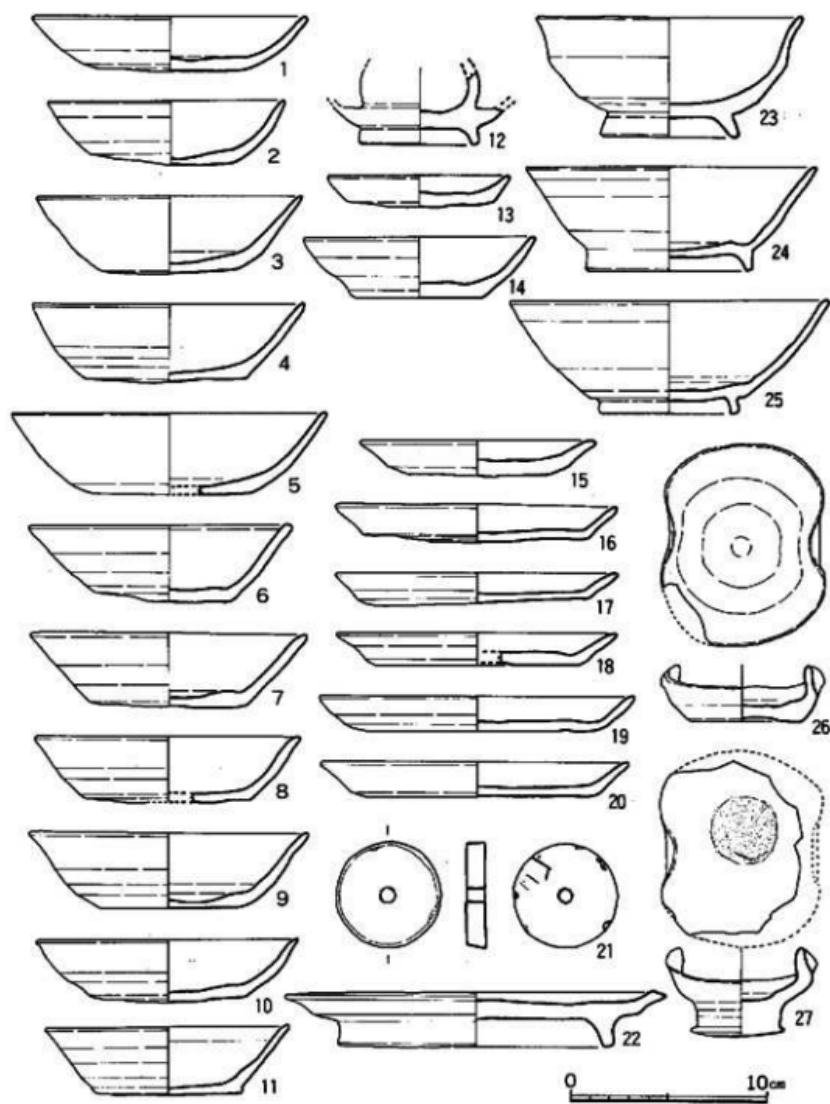


Fig. 82 土器実測図 I

2. 遺物各説

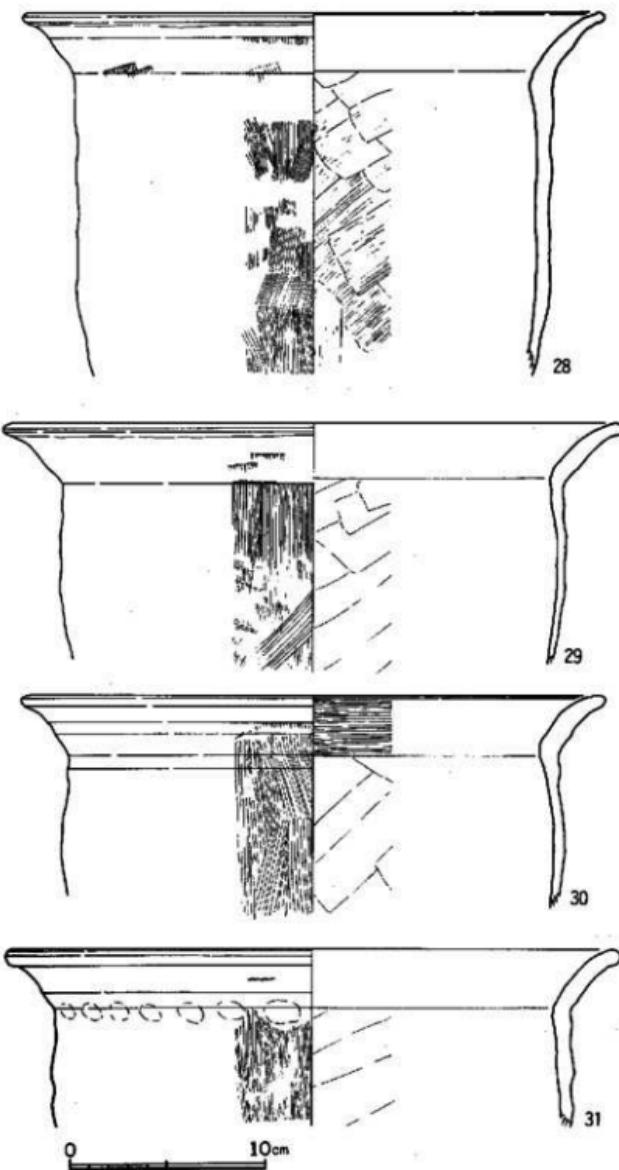


Fig. 83 土器実測図II

小形で外塊径12.5cm、圓台端部径14cm、器高7cmをはかる。陸と海の境は1より明瞭で段がつく。外堤の下位に突帯をめぐらす。圓台部に隅丸長方形の透しを8ヵ所に配する。1、2共に陸部は使用によって磨滅している。3は風字硯で破片2点がある。平面形が長方形をなすと考えられる。中央部に硯面を左右に分割する突帯がある。全体はヘラ削りによって調整している。

(6) 墨書き土器 (Fig. 84-4, 5)

2点存在する。共に土師器の底部に墨書きされたものである。4は高台付の底部で体部は直線的にたちあがる。墨書きは底部中央に書かれたもので「酉」と読める。5は平底の环で4同様に底部中央に墨書きしたもので、一部消えているが、4同様に「酉」という字である。

(7) 石帶、装飾品 (Fig. 85)

石帶、鏡、鈴、飾金具、笄がある。いずれもSD-04出土である。

石帶は6点出土して

いる。1、2は巡方、
1は4.1cm×4.3cmの方
形で厚さ0.6cm、裏面
に4ヵ所のかがり穴が
ある。2は半割する、
4.5cm×3.1- α cm、厚
さ0.6cm、かがり穴は
貫通していて、4ヵ所
が現存するが、元来は
8ヵ所にあったと思わ
れる。3～6は丸柄、
3は幅4.2cm、高さ2.6
cm、厚さ0.6cm、下位
に長方形の透。3、5は青
色と白のしま状の石で
蛇紋岩か、4は黒色の
石で古銅輝石安山岩、
6は白みがかった淡い
青色で石材不明、第3
次調査の石帶と同一個
体の可能性がある。

7は鏡、青銅製で、

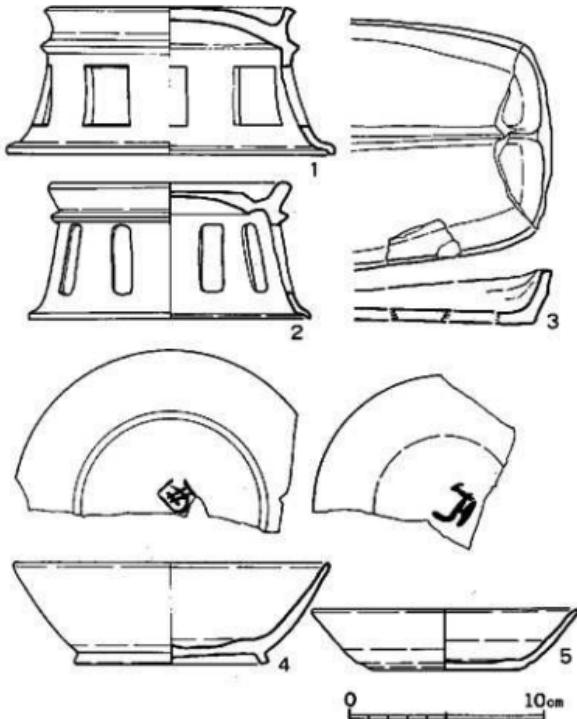


Fig. 84 円面硯・風字硯・墨書き土器実測図

2. 遺物各説

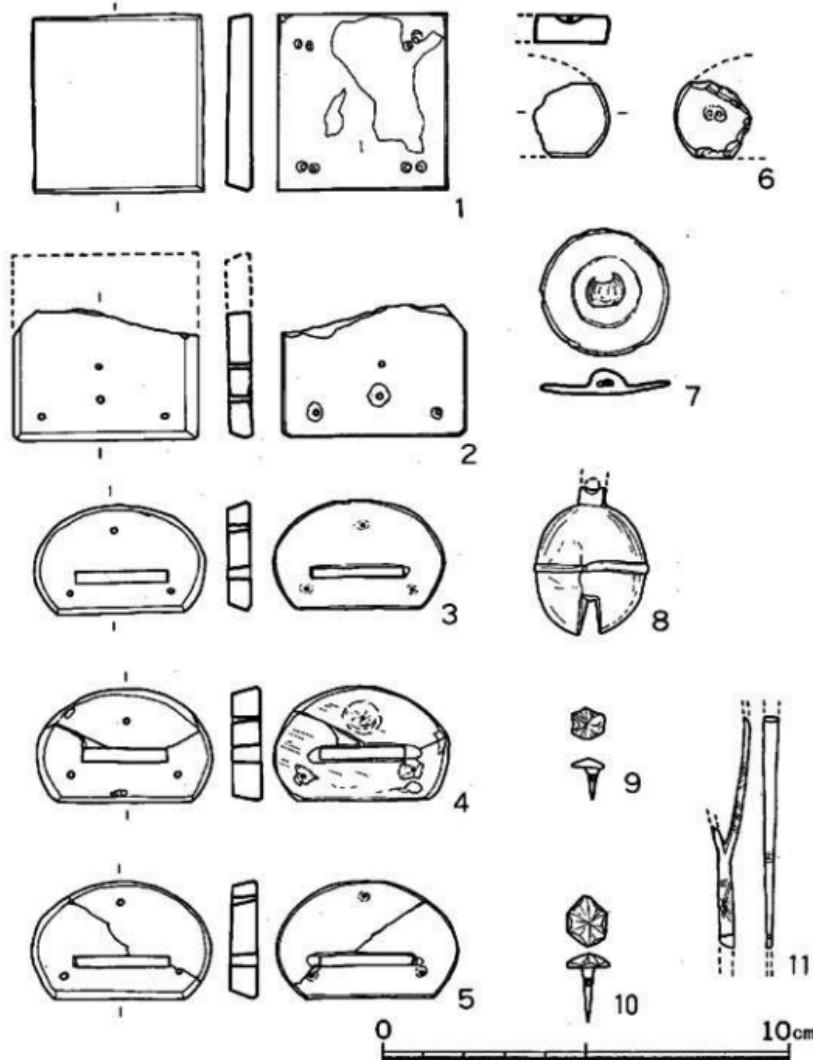


Fig. 85 石帯・鈴・装飾品実測図

面径3.2cm、鋸は丸く高さ0.4cm、内区と縁の区別がある。

8は鉈、青銅製、鋸が一部欠失する。下端に孔があり、体部中央に突線がめぐる。

9、10は飾金具、6角形に整形し花文状をしている。青銅製で、上に銀箔をはる。針部は断面方形である。

11は笄の破片である。銅製で濃緑色をなす。頭部と先端部を欠いて全形は明らかでないが、頭部は木葉状の輪になるものか。表面には細い刻みで文様を入れている。現存長5.6cmである。

装飾品ではないが、この他に貨幣、權がある。図示していないが概略を説明する。

貨幣は4枚ある。開元通宝、乾元重宝各1枚、他の2枚は皇朝十二銭と思われるがはっきりしない。1枚はニセ銭の可能性がある。

權は3点出土した。2点は鉛製、1点は瓦利用のものである。

(8) 製塙土器 (Fig. 86)

玄界灘式製塙土器である。量的に多くコンテナ10箱分ある。いずれも破片で器形を知りうるもののは少い。器形的に若干の違いがある。代表的なものの4点を図示した。

1は口縁部が外反し、頸部はややしまり胴部はやや肩をもってひらく。口縁部内外面は強い横ナデを施し稜線ができる。外面は擬格子のタタキ目、内面は平行タタキ目調整である。器壁が比較的厚く1.2cm前後である。口径19.7cmをはかる。

2は口縁部が外反し、頸部はあまりしまりをみせず、わずかな段をもって胴部へ移行する。内外面の調整は1と同様である。器壁は1と比較して薄い。口径24.5cm、胴部最大径21.7cmで口径が広い。

3は器形的には1と同様であるがより円筒形に近い。口縁端部がわずかに外反する。調整は他と同様である。器壁の厚さは約1cmである、口径30cmでかなりの人形品である。

4は器形がわかる唯一の例である。口縁部は強く外反する。頸部はややしまりでわずかに肩が張り、球形の胴部へ移る。内外面の調整は他のものと同様であるが、内底部はあて具の圧痕が頗著で凹凸が著しい。底部は丸底である。口径15.8cm、頸部径12.2cm、胴部最大径14cm、器高14.3cmをはかる。器壁は0.6cmの厚さである。

1～3は二次的に加熱され使用がうがえるが、4については二次的な加熱を受けていない。製塙土器としての使用はされてなく他の用途、目的が考慮される。

(9) 土鍤 (Fig. 87)

数百個の土鍤が出土している。大部分はSD-04の出土で、一部、SK-26、27より出土している。いずれも管状土鍤である。

1は円筒状の鍤で、長さ6.7cm、径4.4cm、である。この類は量的に多くない。2は両端部をやや丸くしたもので、長さ7.7cm、径4.4cm、この類も量的に少い。3～5、両端部がしばむ紡錘形のもので、長さ6cm前後、径3～3.5cm、量的に多い。6は長さ8.5cm、径2.3cm、棒状の

2. 遺物各説

もので両端がややしばむ。量的に少い。7～9は棒状で長さ7cm前後、径1.2～1.5cm、量的に多い。11、12、22、23は紡錘形をしたもので長さ6cm前後、径1.5～2cm、量的に多い。10、11、20、21は前者よりやや短いもので形態は紡錘形、長さ5cm前後、径1.5～2cm、量的に多い。14、16～18はさらに小さくした紡錘形で長さ4cm前後、径1.5～2cm、量的に多い。15は同様の形態を示すが、ヘラで面とりしてある。量的に少い。

(10) 鉄器 (Fig. 88)

70点近く出土している。いずれもSD-04の出土である。形態がわかる30点を図示した。工具、農具、漁撈具、武器等がある。

1は鉄斧、長さ6.6cm、刃部幅3.8cm、袋部幅3.6cmである。2はU字形鋤先の破片で袋部に木

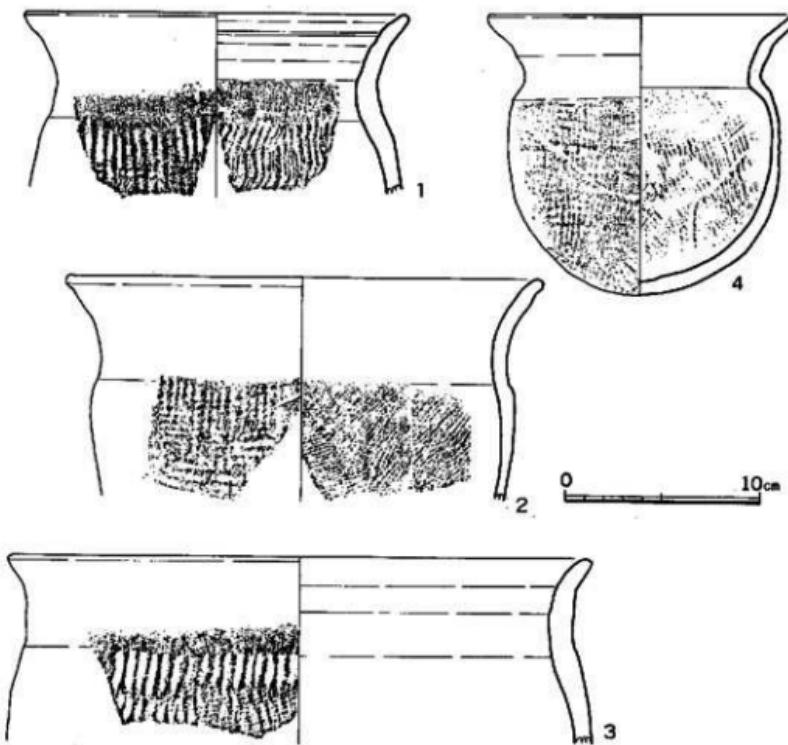


Fig. 86 製塩土器（玄海灘式）実測図

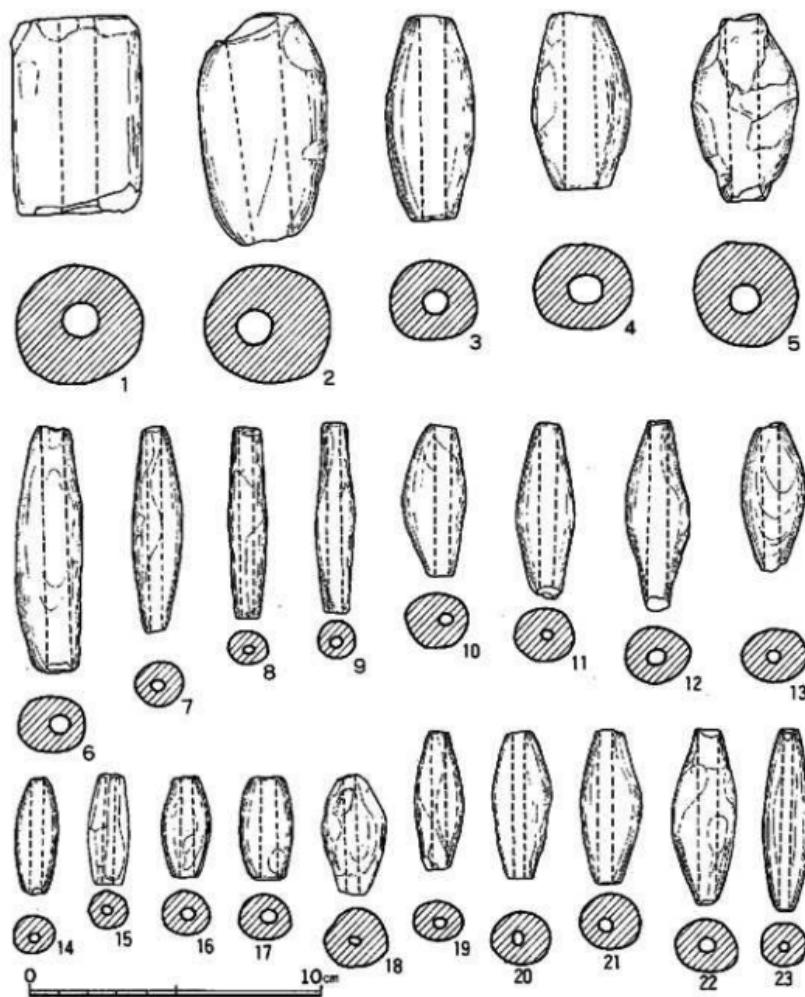


Fig. 87 土鐘実測図

2. 遺物各説

質部を残している。3は紡錘車（紡輪）径5cm、中央部に径0.3cmの円孔をあける。4、5は釣針、長さ4.8cmの中型品である。逆刺がわずかにつく。6は鎌、長さ15cm、幅2.6cmである。7、8は鉗具、SD-04から多量に出土する馬歯との関連が考えられる。9~12はかりまたの鉄鎌である。いずれも形状は類似するが、大きさはそれぞれ異なる。16~21は刀子。形態、大きさはさまざまである。完存する17は長さ10.2cm、18は8.1cmである。13~15、22~32は角釘である。形態は頭部をわずかに曲げるものが多い。

(11) 滑石製品 (Fig. 89)

滑石製品は30数点出土している。中でも多いのが、石鍋であるが、いずれも小破片で固化することができなかった。以下図示したものについて説明する。

1は容器、約半分を残し、その全形を知ることができる。底部は平底であるが一見丸底風である。円筒状にたちあがり、口縁がわずかに外反する。復原口径13.1cm、器高13.1cm、器底が厚く1.7cmをはかる。内外面共にのみで加工した後、研磨して面をととのえているが石材の質が懸念のために粗製品のごとくみえる。火を受けた痕跡はない。使用用途は不明。

2はレンガ状に加工された製品である。長さ15.8cm、幅は8.7~9.8cm、厚さ2.3~3.6cm、加工痕はわずかに残るが全体に研磨している。製品あるいは未製品と考えるが明確な解答はできない。製品であれば石枕が考えられるが形態が若干異なる。未製品の場合は石製の風字硯の未製品と考えられる。形態的、大きさも最も適合する。

3、4は栓状の製品、3は上面観は6cm×4.8cmの長方形、上面は丸くなり薄いカマボコ状をなす。下面に2.6cm×1.5cmの長方形の突起をつくり出すが折れている。この突起に孔があかれ、針鉄がとうされていたと思われ、一部鉄芯が残っている。4も同様の形態であるが上面観は不整形である。石鍋の再利用品である。

5は一部欠失する。4.7+αcm×3.5cmの精凸形で厚さ4.4cm、中心部に径0.8cmの円孔をあける。一部ススが付着する。

6は紡錘車（紡輪）径3.7cm、厚さ2cm、中心に径0.7cmの円孔をあける。

7は径4.7cmの円形で厚さ1.2cm、中心部に径0.7cmの円孔を穿ち、片面にはその円孔を中心にして5個の円文をめぐらし、そのうちの一つは穿孔される。面にカーブがあり容器の再利用品か。使用用途は不明。

(12) 瓦 (Fig. 90, 91)

軒丸瓦 2型式に分類できる。いずれも鴻臚館式系統のものである。1は破片しか出土していないため瓦当文様については内区が複弁蓮華文で間弁に2本の弁子様の物を配していることを知り得るのみであり、弁数、中房等については不明である。外区は内縁に小さな珠文をやや間隔をあけて配する。外縁は斜縁をなす。この軒丸瓦の特徴は内区と外区を郭する圓線が蓮弁の端部に沿うように表現されており、あたかも内向する凸縦齒文状を呈していることである。

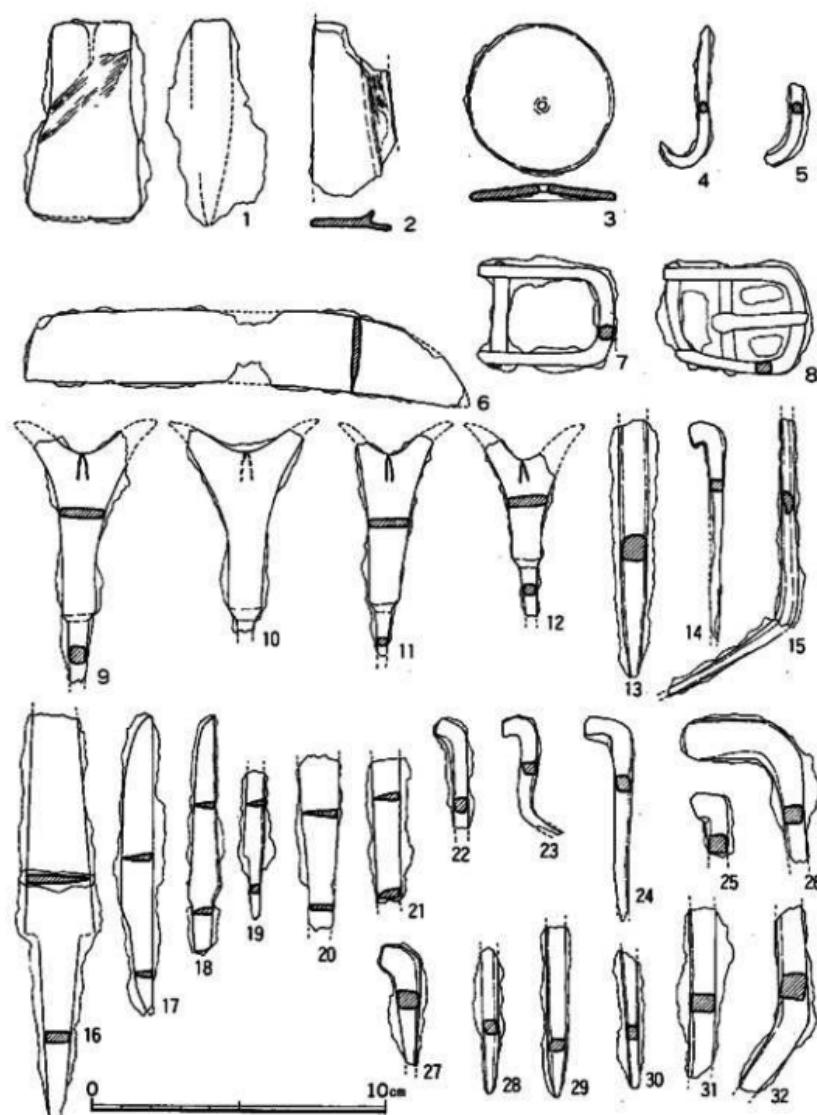


Fig. 88 鉄器実測図

2. 遺物各観

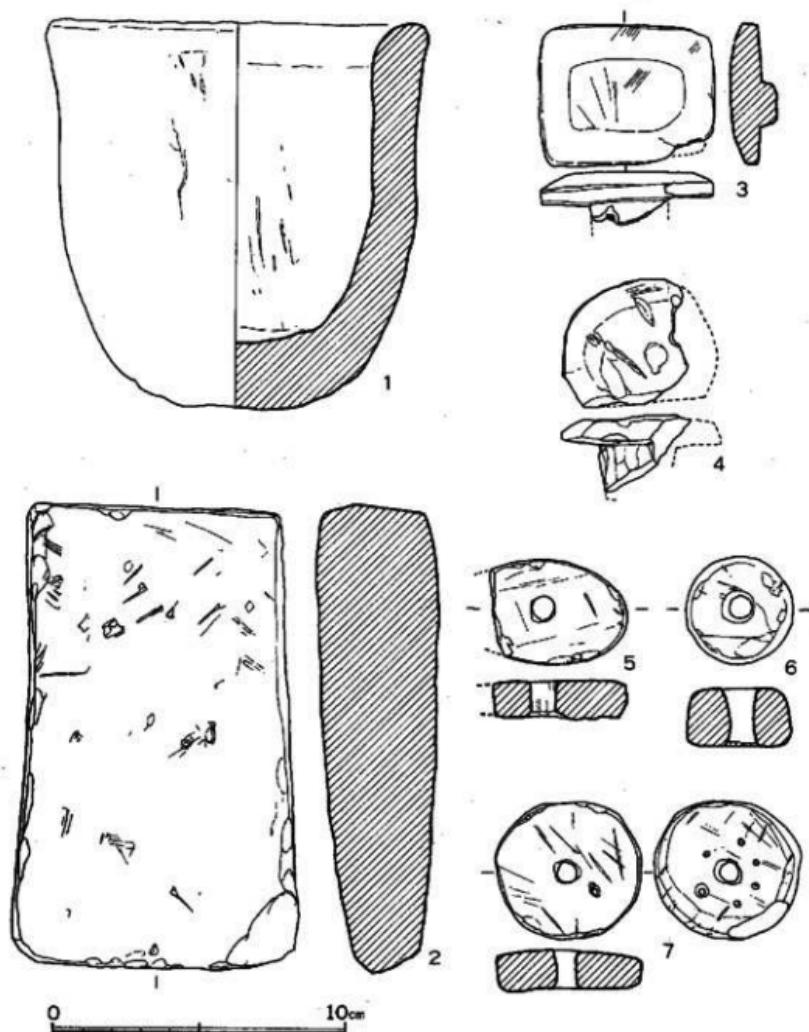


Fig. 89 滑石製品実測図

胎土は荒い砂を少量含み、焼成はやや軟質である。これと類似したものが、宗像郡福間町の神興庵寺および柏屋郡柏屋町の内橋遺跡、長者原庵寺から出土している。^{註1} 両者は内区、外区ともきわめて酷似しているが前者が複弁七弁であるのに対し後者は複弁八弁であることが大きな相違点であり、また間弁にも若干の相違が認められる。内区と外区を郭する圓線の形状から1は長者原庵寺のものと同型式と考えられる。

2は直径16.3cm、瓦当厚3.2cm。全体に文様の彫りが浅く、また磨滅しているため内区文様の観察が困難である。文様の彫りが浅いことや比較的残りのよい蓮弁の形状から、筑前国分寺出土のものと同范と考えられる。それによると内区は一段低い中房に1+7の蓮子を配し、弁区は複弁六弁で間に1個の単弁を配する。外区内縁には珠文を配し、外縁は低い斜縁をなす。瓦当裏面は縱方向のヘラ削りによって調整している。胎土には砂粒を少量含み焼成はやや軟質である。

軒平瓦 2型式に分類できる。いずれも軒丸瓦同様に鴻臚館式系統のものである。1は上に向って開く相対曲線文を中心飾にして左右に「の」字型の唐草文を配した均正唐草文である。唐草文は大振りで文様の彫りは浅い。上外区には偏円形の珠文を、下外区には外向する凸鋸歯文を配している。段頭と推定され、顎面は荒いヘラ削りによって調整を行っている。胎土は比較的精良で焼成は軟質である。軒丸瓦同様に神興庵寺、内橋遺跡、長者原庵寺から同型式のものが出土している。2は瓦当幅28.8cmで1と同様に相対曲線文を中心飾にして、その左右に4回反転する唐草文を配した均正唐草文である。上外区にはやや大きなボタン形の珠文を配する。顎面は平瓦部凸面に粘土板を貼りつける段頭で、深い。顎面と平瓦部凸面は縱方向のヘラ削りによって調整を行っている。凹面は瓦当寄りを部分的にヘラ削りを行うが他は不調整で枠板痕、布目痕が残る。側縁はヘラ削りによって調整し面取りを行う。胎土は少量の砂粒を含むが比較的精良である。焼成はやや軟質である。

これと同范とみられるものが筑前国分寺から出土している。^{註2}

軒丸瓦、軒平瓦とも出土点数が少いためセット関係を決めるることはかなりの危険性をともなうが筑前国分寺における出土状況を参考にすれば、この軒平瓦は軒丸瓦2とセットになる可能性がある。

鬼瓦 鬼面の左側眉尻りから額にかけての小片である。眉毛および頭髪の一部と外縁の珠文帯を残すのみであるが、この部分を筑前国分尼寺出土のものと比較検討した結果、全く一致しており同范とみられる。筑前国分尼寺出土のものも鬼面左側半分を残すのみであるが、それによると鬼面は肉盛り豊かに表現され、眼と眉は強く吊り上がり、額には同心内状の力瘤を浮き出させる。上辺部には鳥衾を置くための半円形の刺込みがある。外縁にそって珠文をめぐらす。この鬼瓦は大宰府史跡から出土する通有のもので8世紀前半代のものである。

丸瓦 行基式丸瓦と玉縁丸瓦の2種類がある。いずれも第一次成形は粘土板巻きつけ技法に

2. 遺物各説

よっている。まず行基式丸瓦の凸面は縦位の繩の叩き目を丁寧なナデによって擦り消している。凹面には糸切り痕および粘土板の合せ目を残す。布目は荒い。側縁は分割時の載面と破面の凹凸を残したまま調整は行っていない。胎土は砂紋が少く精良である。焼成はやや軟質。玉縁丸瓦の凸面も縦位の繩叩き目をナデによって擦しているが、部分的に繩叩き目が残る。凹面は糸切り痕、布目痕が残る。側縁は分割時のまま調整は行っていない。また玉縁製作時の粘土の貼り付け痕が明瞭に残っている。胎土は小さな砂粒を含み、焼成は軟質である。

平瓦 第一次成形は粘土板によっており、両面とも糸切り痕が良く残っている。凸面は縦位の繩叩き目が残る。側面は分割時ヘラ削りによる調整を行っているが、凹面を上にした場合、両側面はほぼ垂直になる。胎土は荒い砂を含む。焼成はやや軟質である。長さ36cm、広端幅26.5cm。

註1 九州歴史資料館編『九州古瓦図録』 柏書房 1981

註2 福岡県教育委員会『筑前国分寺』—昭和52年度発掘調査概要— 1978

註3 同上

註4 太宰府町教育委員会『筑前国分尼寺跡、陣ノ尾遺跡』太宰府町の文化財第4集 1981

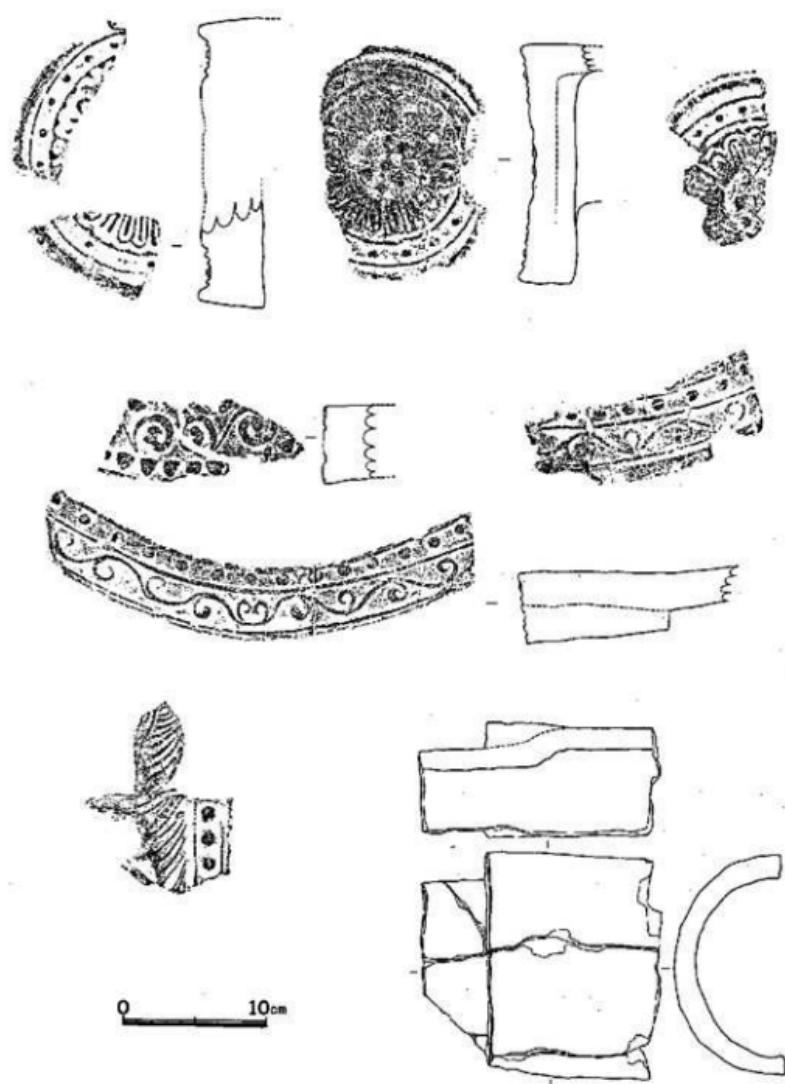


Fig. 90 瓦実測図 I

2. 遺物各記

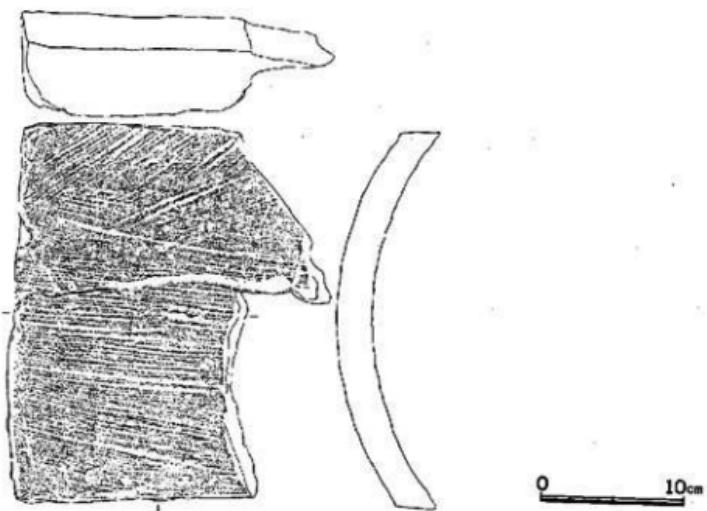
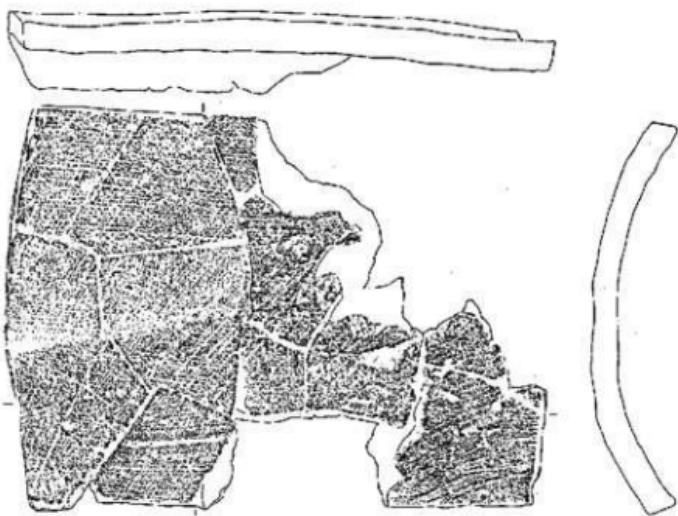


Fig. 91 瓦実測図II

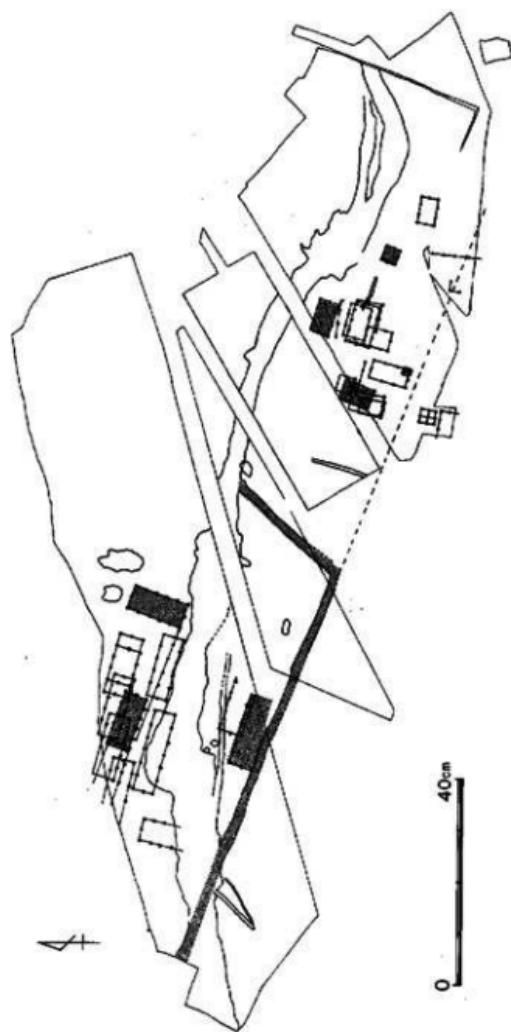


Fig. 92 古代の遺構分布図

3. 古代のまとめ

本節では第6次調査で検出した古代の遺構について整理して、問題点をあげ今後にそなえたいたと思う。

第6次調査で検出した古代遺構は掘立柱建物12棟、溝6条、土塙6基以上である。これらの遺構はSD-04が第1～3次調査区から連続してくる以外は第1～3次調査区とは独立した遺構配置を示している。たとえば、第6次調査区の掘立柱建物群は、第2、3次調査区で検出した建物群と連続するものではなく、第2、3次調査区の建物群とは約50mの空白地帯が存在することから明らかである。また、SD-26は第2、3次調査区の建物群との区画を意味する溝と理解することもできる。

第6次調査区の建物群はその場所が限定されていることは明らかである。すなわちSB-15を東限とし、SB-25、SD-24を南限とし、SB-24を西限とし、SB-16を北限とする東西約50m、南北約30mの範囲に集中し、それ以外には、柱穴はおろか、その他の遺構も皆無に近い。

建物群には数次の切り合いかみられ、著しい重複関係があるが、柱穴掘り方の切り合い関係はなく、その先後関係をつかむことは困難であった。また、柱穴掘り方内の遺物も少く、器形のわかるものはなく建物の時期は決めがたい。したがって、建物の方位でもついくつかの群にまとめ、その中の配置を検討してみたい。

まず、①N-69°-Wおよびそれに直交するN-19°-E、②N-73°-W～N-74°-W、③N-75°-W～N-75.5°-W、④N-76°-W～N-76.5°-W、⑤N-78°-Wおよびそれに直交するN-13°-Eの5群に分けられる。この場合①群にはSB-15、20の2棟、②群はSB-22、25、26の3棟、③群はSB-16、17、18の3棟、④群はSB-19、21の2棟、⑤群はSB-23、24の2棟が各群にあたる。しかし、各群の中で②群のSB-25、26は重複関係にあり、どちらかが群構成に変化する必要があり、配置関係からSB-25はより近い①群に組み入れられる。また、③群ではSB-16とSB-18が重複関係にあり、その配置からみて⑤群に組み入れた方が良い。この修正によって、①群はSB-15、20、25の3棟、②群はSB-22、26の2棟、③群はSB-16、17の2棟、④群はSB-19、21の2棟、⑤群はSB-18、23、24の3棟となる。これに各遺構の方位を加えるとSD-24とSB-15と柱すじをあわせてのびる櫛列が同一方向で第①群遺構に組み入れられる。

次にこの各群の先後関係を検討してみよう。SD-24はおそらくはSD-25と連接するものと考えられ、SD-26はSD-04と同一時期、SD-24はSD-04とは同時期ないしは先行する。また、SD-24、26の遺物は少いが、溝底のものは8世紀中頃のもののみである。SD-26、24が第1群と一致することを考慮すれば第①群が最も古く、①→②→③→④→⑤と北に角度をふりながら変化していったことが考えられる。この変化は第2、3次調査結果とも一致し

ていることは重要である。また、SD-24の方位は、ほぼ条里方向と一致している。

以上の結果から建物配置をみていくと、第1期では、条里方向と一致するSD-24、およびそれと交わるSD-26に囲まれ、SD-24に接してSB-26の東西棟が配され、SD-04を挟んで、SD-04より約3m離れてSB-16の南北棟を配し、SB-16の梁行の柱に柱すじをあわせた櫛をたて、その櫛に平行しSB-16より約15m離れてSB-20の東西棟を配する。この配置は少くともコの字形の配置を強く意識しているものと考えられる。やや変則的になるのはSD-04の流れがあったためではないかと考えられ、SD-04の組入れが必要であったことがうかがえる。第2期は東西棟の建替えとみて、SB-15が継続して使用されたとすれば、第1期同様の建物配置となる。第3期は、SD-04の北側に梁行の柱すじを一間ずらした並列する配置をとる。第4期も第3期と全く同じ配置をとる。第5期は桁行の柱すじを北壁と南壁がとうるようにして約1間ずらした東西棟を配し、それにL字形に連接するような南北棟をもってきている。以上、いずれの時期の建物配置も企画性をもっていることが判明するのである。

第2、3次調査の建物群も五期に分けられ第6次調査建物と対応することは先に述べたが、ここで両建物群の関係およびその性格を考えてみよう。第2、3次調査区の總物と本次調査の建物を比較すれば、第2、3次調査区建物は規模が小さく、最大で2間×4間である。また、總柱の倉庫が含まれ、井戸の存在があり、居住区としての色彩が強い。これに対し、本次調査区の建物は不明のものもあるが、大部分が2間×5間の建物で、一棟のみ2間×6間の建物があり最大規模をなす。いずれも規格性のある建物である。また建物配置も第2、3次調査区より企画性が感知できる。出土遺物の比較でも本次調査区が他区を圧倒している。これらのことを見合すれば、本次調査区は生活空間としての利用を考えるより、官衙的性格が強いと考えることができる。ただし、第2、3次調査区の建物群との関連性は無視できない。出土遺物の中で特に容器類に優品が多いことを考慮すれば、客館的性格の強い部分として把握される。このことはさらに周辺部に別の機能をそなえた建物が予想され、それらを統合して一つの官衙が構成されていたのであろう。

ではどのような官衙であったのであろうか。現在のところ、この遺跡に符号する官衙を指摘するのは困難である。ただし、日守に比定している「夷守駅」の可能性がないではなく、日々良川対岸に残っている地名の津屋も、柏原郡の「津家」としての機能を暗示させるものであるが、これらについては今後の検討にまちたい。

おわりに

おわりに

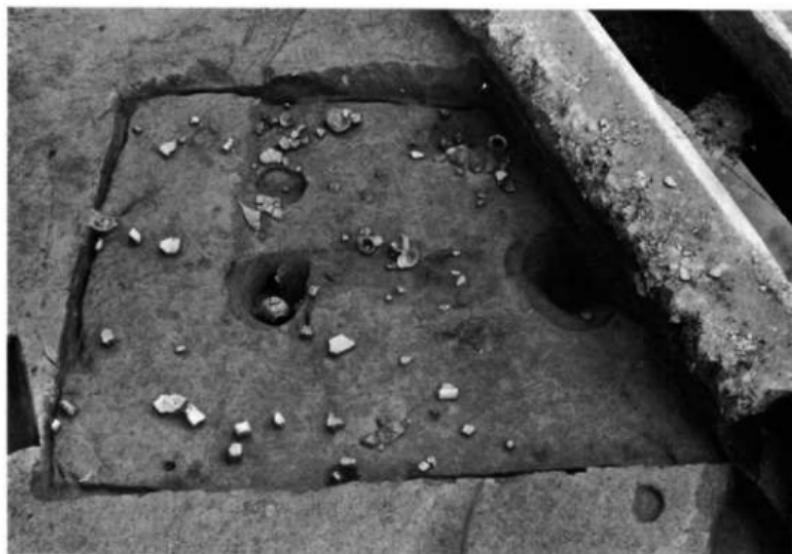
多々良込田遺跡の第6次調査の成果を報告したが、遺物の量が莫大で充分な整理ができないまでの報告である。古墳時代の集落構造の分析、出土土器の編年、あるいは古代の建物群の分析、施釉陶磁器の分析、未発表の資料等については、今後さらに検討を加え、その責を果したいと思う。

図 版

PLATES



- ① 第14号住居址 (SC-14)
- ② 第13号住居址 (SC-13) (北から)
- ③ 第13号住居址 (SC-13) (南から)



① 第17号住居址 (SC-17) 遺物出土状況



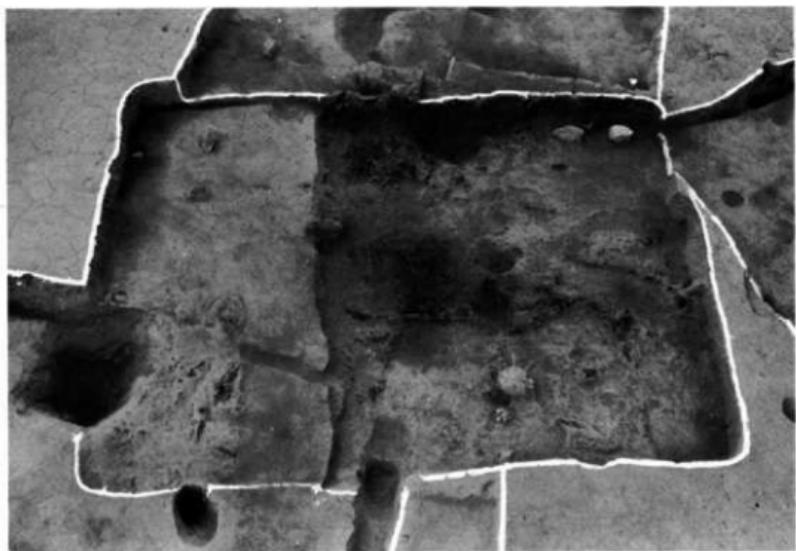
② 第17号住居址 (SC-17)



① 第18~22、25、26号住居址 (SC-18~22, 25, 26) と掘立柱建物 (SB-13)



② 第18, 19, 22, 26号住居址 (SC-18, 19, 22, 26)



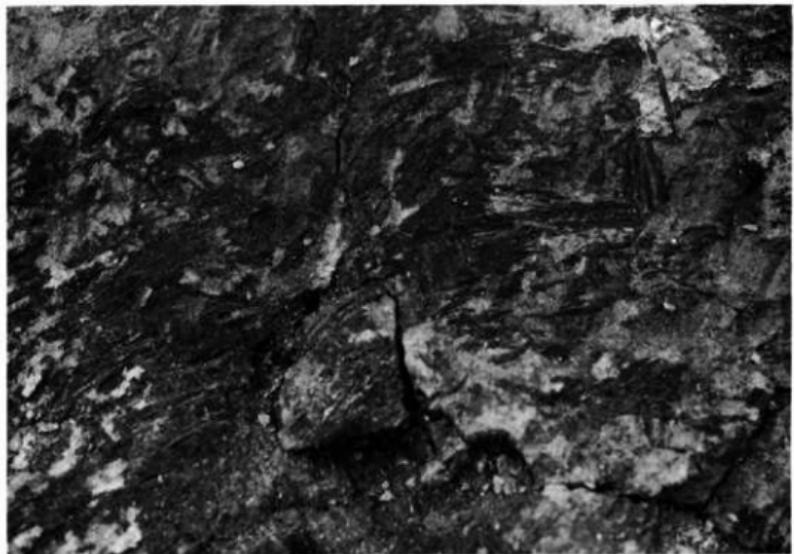
① 第19号住居址 (SC-19) 遗物出土状况



② 第19号住居址 (SC-19)



① 第19号住居址 (SC-19) 壁面の状況



② 第19号住居址 (SC-19) 床面の炭化材



① 第20号住居址 (SC-20)



② 第22号住居址 (SC-22)



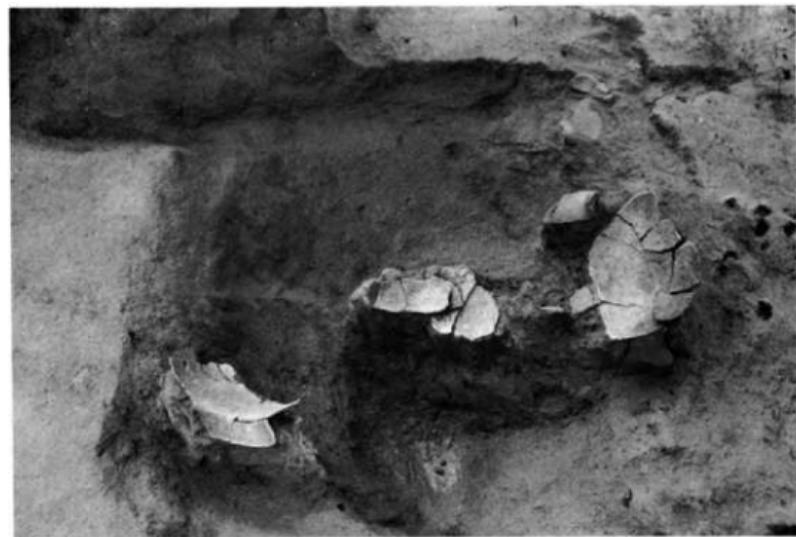
① 第18号住居址 (SC-18) 床面の石錘出土状況



② 第22号住居址 (SC-22) 床面の砥石出土状況



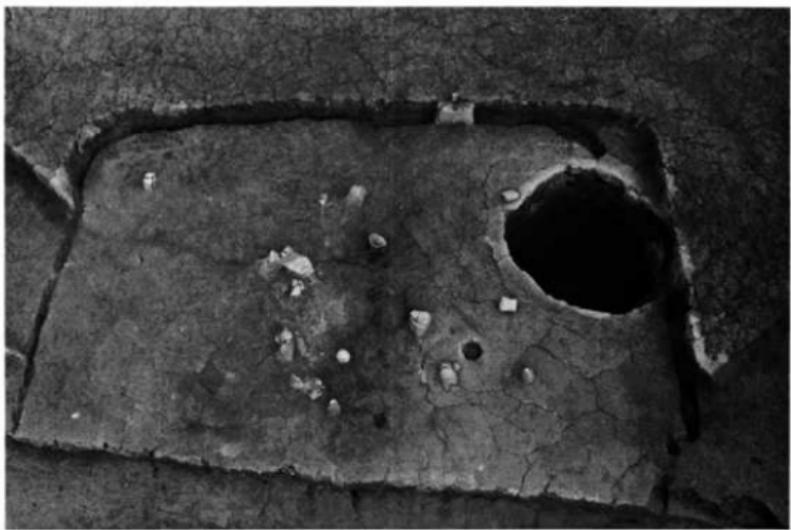
① 第22号住居址 (SC-22) 遗物出土状況



② 第20号住居址 (SC-20) 遗物出土状況



① 第21号住居址 (SC-21)



② 第24号住居址 (SC-24)



① 第27、32号住居址 (SC-27, 30) 32



② 第27号住居址 (SC-27) ピット同遺物出土状況



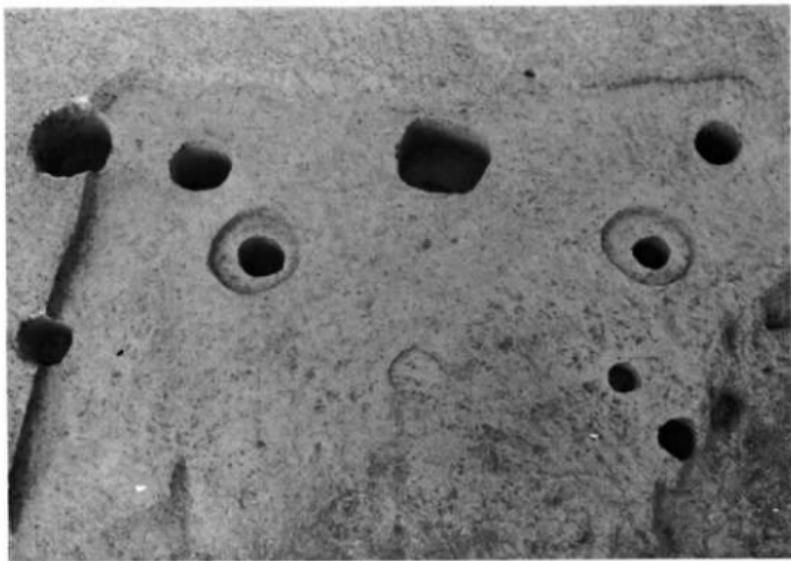
① 第28~31号住居址 (SC-28~31) 遗物出土状況



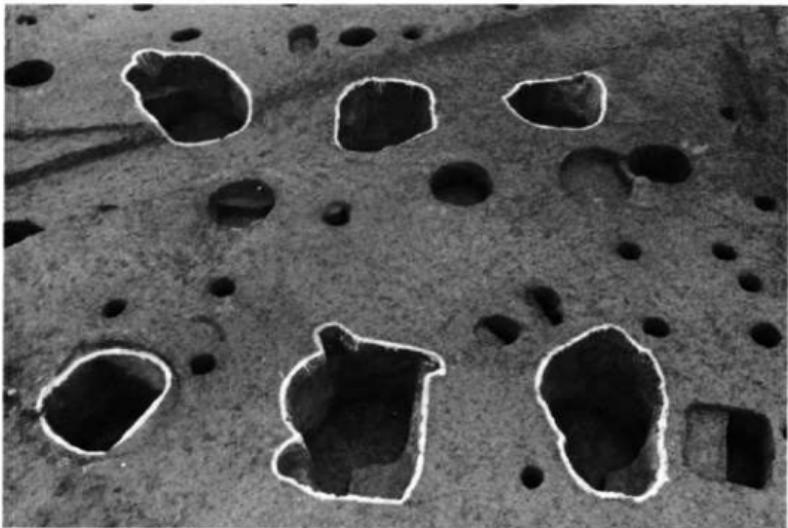
② 第28~31号住居址 (SC-28~31)



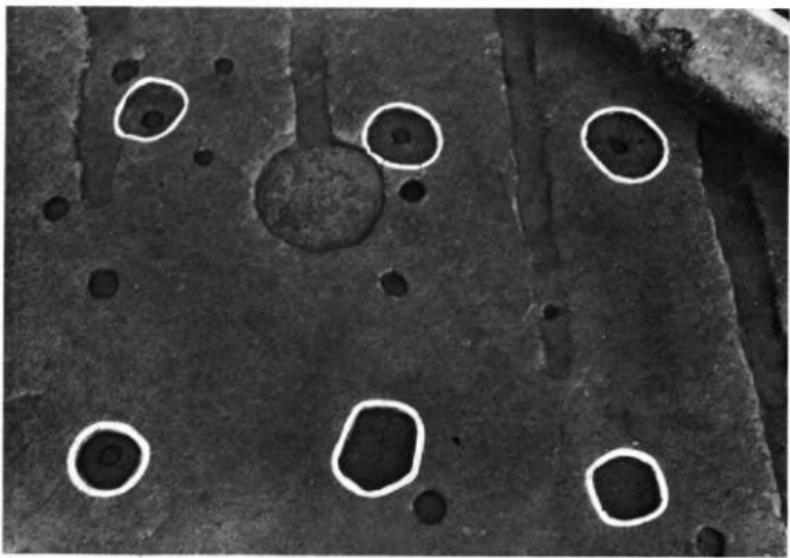
① 第23号住居址 (SC-23)



② 第33号住居址 (SC-33)



① 第14号掘立柱建物 (SB-14)



② 第13号掘立柱建物 (SB-13)



① 第28号土坑 (SK-28) 遗物出土状况



② 第28号土坑 (SK-28)



① 第29号土堆（SK-29）遺物出土状況



② 第29号土堆（SK-29）遺物出土状況



① 第2号溝（SD-02）遺物出土状況



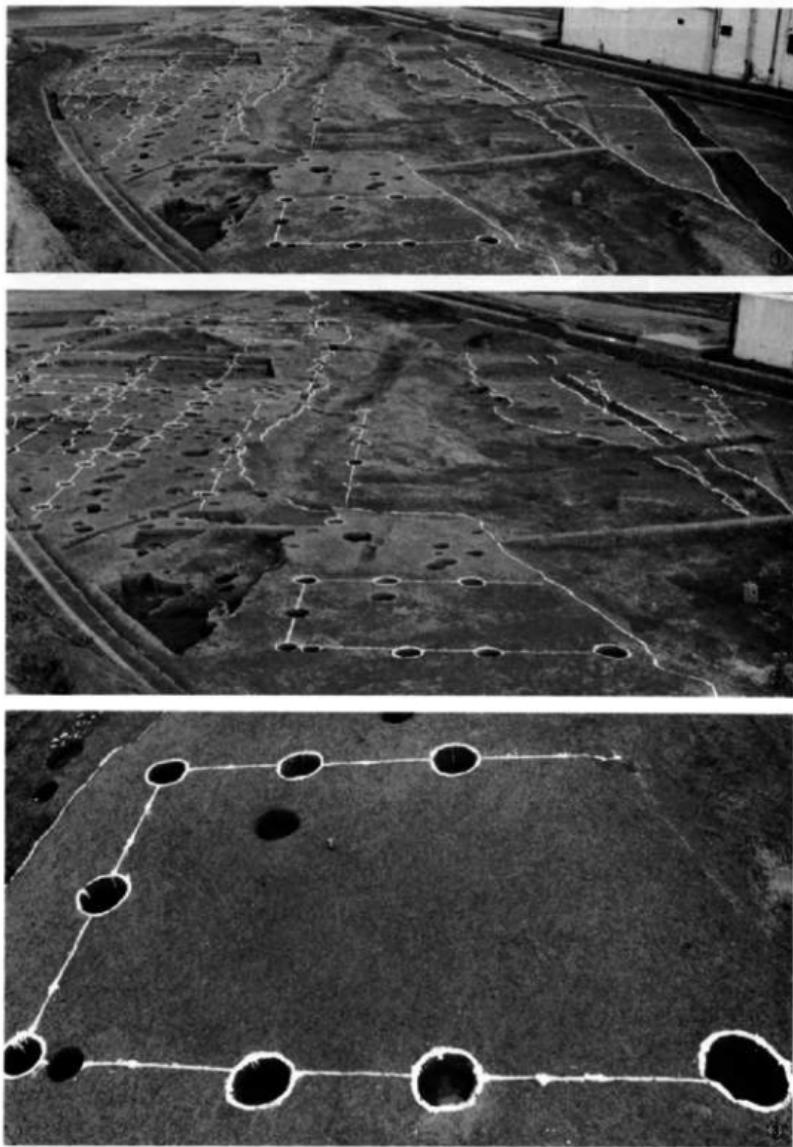
② 第2号溝（SD-02）遺物出土状況



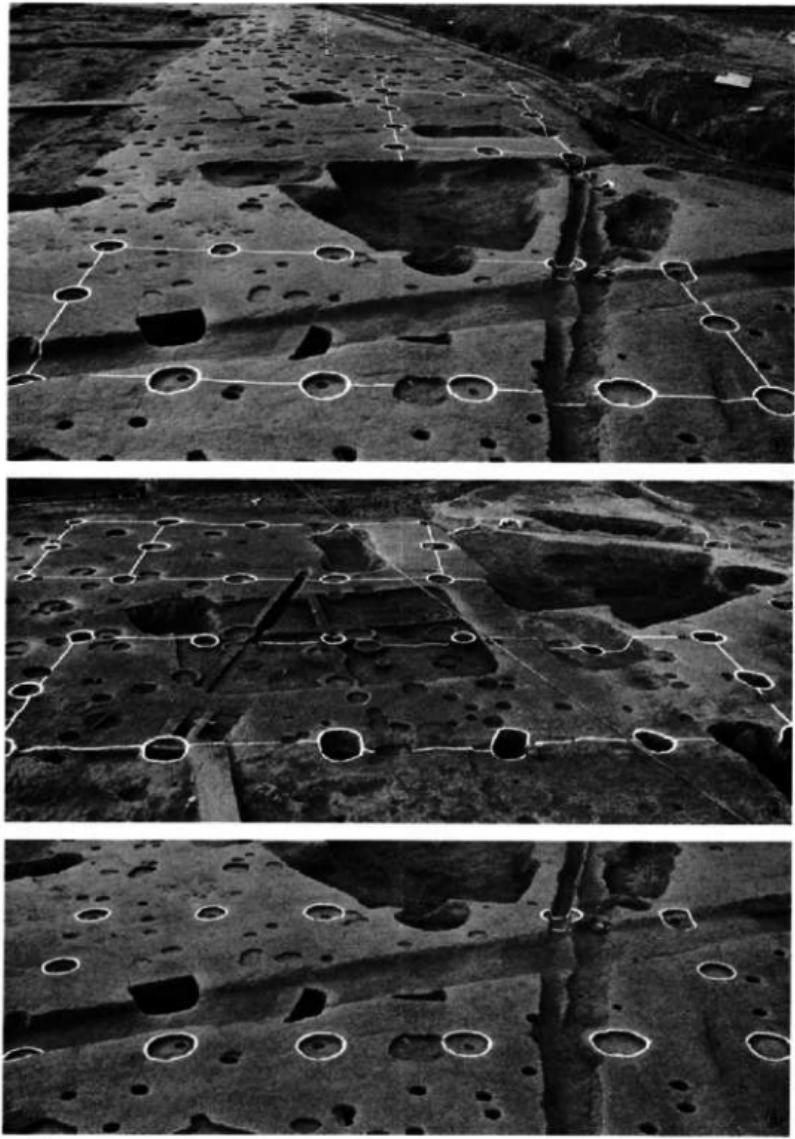
① 第24、26号溝 (SD-24, 26) (東から)



② 第24、26号溝 (SD-24, 26) (西から)



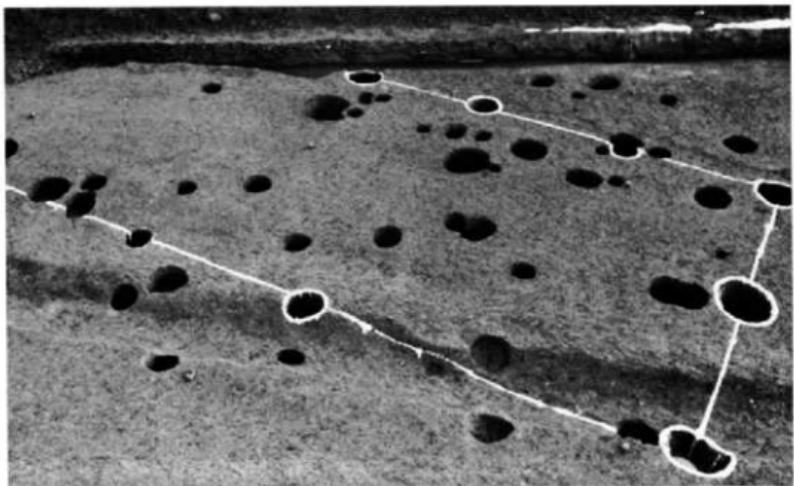
- ① 挖立柱建物群（遠景）
- ② 挖立柱建物群（近景）
- ③ 第22号挖立柱建物（S B-22）



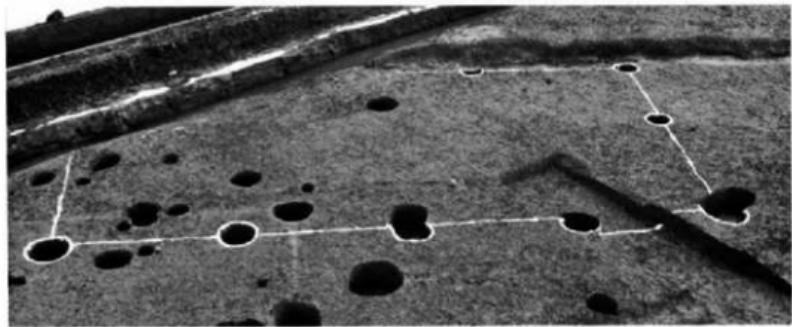
① 第15、16号掘立柱建物 (SB-15、16)

② 第16、17号掘立柱建物 (SB-16、17)

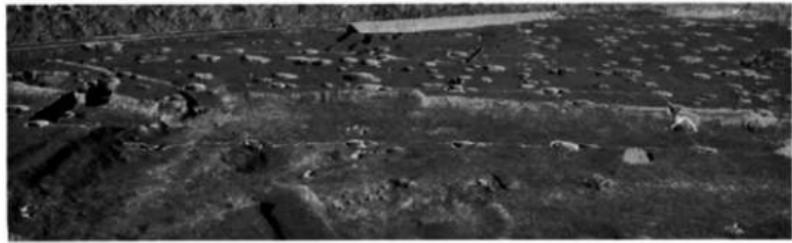
③ 第15号掘立柱建物 (SB-15)



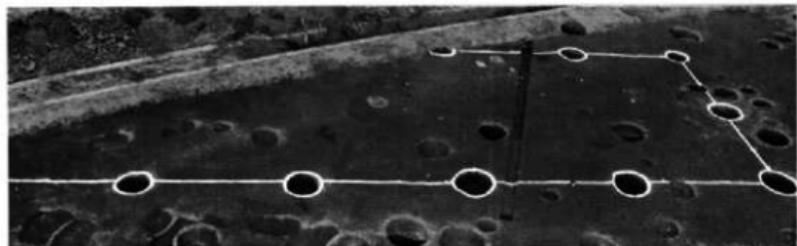
① 第26号掘立柱建物 (SB-26)



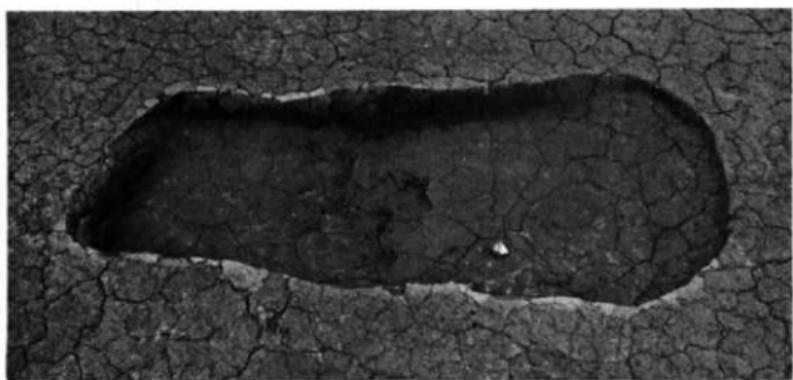
② 第25号掘立柱建物 (SB-25)



③ 第21号掘立柱建物 (SB-21)



① 第19号掘立柱建物 (SB-19)



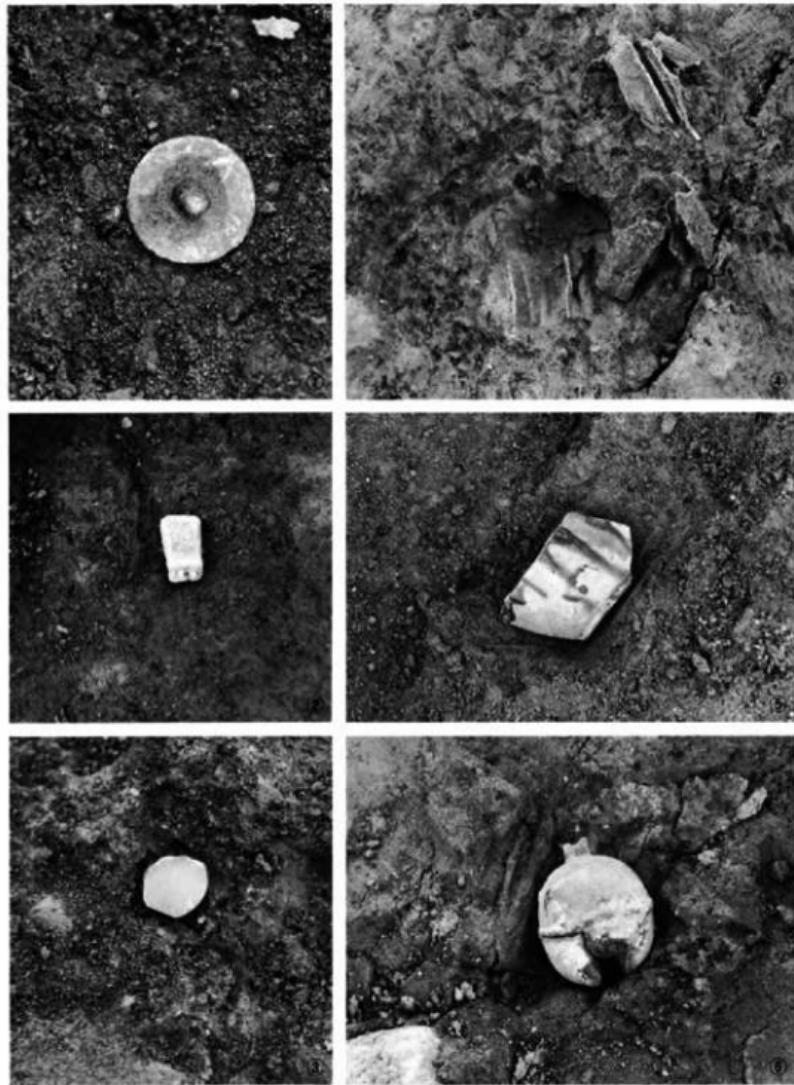
② 第19号土塙



③ 第24号溝 (SD-24) 断面



- ① 莖生土器出土状况
- ② 緑釉陶器出土状况 (SD-04内)
- ③ 土師器耳皿出土状况 (SD-04内)



SD-04內遺物出土狀況 ① 錢 ② 椎 ③ 石帶 ④ 馬齒 ⑤ 三彩 ⑥ 鈴

福岡市
多々良込田遺跡 III
福岡市埋蔵文化財調査報告書
〈第121集〉

編集・発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目7-23
電話(福岡)711-4667

印 刷 桑文社印刷株式会社
福岡市博多区博多駅南4丁目15-17
電話(092)411-1611

